

331.34-L97aウ



1200500737292

岩波文庫

875-877

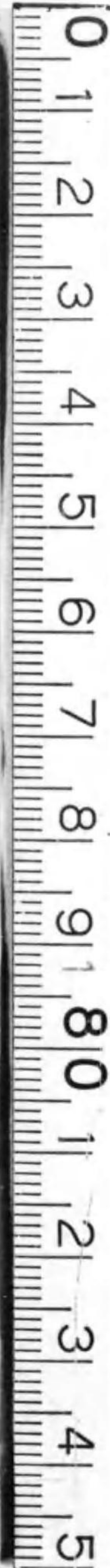
グループンセクル・ザーロ

經濟學入門

佐野文夫 譯

岩波書店

34
L77a



始



331.34
L97a

岩波文庫

875—877

グルブンセクル・ザーロ

門 入 學 濟 經

譯 夫 文 野 佐



岩波書店



982
282

譯者序

一 本書はローザ・ルクセンブルグが曾てドイツ社會民主黨學校において試みた經濟學講義の内容を、ローザ自身の手によつてまとめたものである。ローザはこれを完成して公けにする機會を得ずに、スパルタクス叛亂において反革命暴徒のために虐殺されてしまつた。曾てはローザと同じ黨に屬してゐたパウル・レヴィが、右の遺稿を編纂して、一九二五年ベルリンで公けにしたものが本書である。本書に收められた部分は、ローザの企圖の一部にすぎず、それも所々は未完結のままに、或は單なる覺書のままに残されてゐる。レヴィはこの事情を説明して、「著者の突如たる死が、著者の企圖を完成することを妨げたためか、それとも彼女の住居に侵入せる兇漢が、こゝに缺けてゐる原稿を盗み去つたためか」と推測してゐる。本書にまとめられた部分の原稿は、同じく編纂者の推測によれば、一部は多分世界戦争前に、一部は戦争の前半期に執筆されたものである。

二 ローザ・ルクセンブルグは二十世紀のドイツ無産階級運動が生んだ最高の革命的マルクス主義者であつた。彼女の理論的著作には、つねに能動的變革的立場が一貫してゐる。そしてこの態度は労働者に向つて語られたこの講義の進め方にも鮮やかに現はれてゐる。この態度こそは本統のマルクス主義的態度であつて、理論の大衆化はかゝる見地に立つてのみ初めて行はれ得るも

のである。「如何にすべきか」といふ視點を離れて純粹に靜學的に、資本論の骨拔きの「祖述」を事とするカウツキイと、マルクスの方法を無視して機械的「拔萃」と密木細工式解説とを事とするボルハルトの態度と、本書におけるローザの態度とを比較すれば、兩者の態度が本質的に異なることが判明するであらう。

三 この講義は最初にブルジョア學者の「國民經濟學」の本質を検討して、シヨモラー、ロツシャー、ビュヒャー等のブルジョア經濟學代表者の思想の矛盾と曖昧とを完膚なく曝露し、經濟學における階級的立場を闡明し、次いで經濟の歴史的考察に移つて、原始共產社會の歴史的地位を、詳細なる材料によつて解明し、茲にも經濟史に對する資本家的見地と無產者的見地とを説明し、次ぎに商品生産、貨銀法則の題目の下にマルクス主義經濟學の基本法則を解明し、最後に資本主義經濟の諸傾向を説明せんとしてこの講義の原稿が中絶してゐる。本書に資本の機能および運動についての重要な項目が缺けてゐるのは、恐らくその部分の原稿が失はれたのであらう。最後の章は資本主義崩壞の法則の説明に宛てられたものであるが、そこまで發展することなしに、その戸口に至つて原稿が中絶してゐるのは惜しむべきである。しかしながら本書を一貫せる著者の全體的見地は、右の構造上の缺陷にも拘らず、本書を從來の經濟學解説書と質を異にするところの卓越せる『入門書』たらしむるを妨げないであらう。

四 本書中の脚註のうち、著者の心覺え風のもの、讀者に直接不必要と思はれるものは省略した。原本には巻頭に編纂者パウ・レヴィの序文が附せられてゐるが、つまらない内容のもので

あるから、これも省略することにした。譯者は讀者の便宜のために、假りに目次の各節に標題を附し、それに細目を加へておいた。

一九二六年二月

佐野文夫

内 容

第一章 國民經濟學とは何ぞや

一 經濟學の對象

經濟學の對象についてのブルジョア學者の解釋の曖昧(15) ロッシャーの解釋(16) シュモラーの解釋(16) 經濟學發
生の時期についての見解の相違(18) ブランキイおよびデューリングの解釋(19) ラサールの解釋(19) マルクスの
解釋(19) シュモラーの解釋(20)

二 「國民經濟」の本質

國民經濟の本質についてのブルジョア學者の解釋の相違(22) ビュヒャーの解釋(23) これに對する批評(24)

三 國民經濟か世界經濟か

一 國民の自立的經濟が存立してゐるか(30) ドイツ國民の經濟生活(31) 國際的經濟の存立(34) ブルジョア學者は世
界經濟の存立を否認する(35) これに對する批評(37) 國際貿易は工業國と農業國との對立より生ずるといふ説に
對して(40) ドイツの輸出入(44) 國民の經濟は自立してゐない(47) 世界の經濟的聯結の基礎は單純商品交換に非
ず(54) 政治的支配關係による聯結(56) 資本輸出による聯結(57)

四 國民經濟か世界經濟か(續)

イギリス木綿工業の發達とその世界的影響(64) 資本主義經濟は世界を經濟的全一體たらしむ(65) ブルジョア學者

五 資本主義生産様式の法則の發見 七一

の世界經濟否認の階級的根據(70)
自然經濟時代における農民經濟(72) カロロ大帝の經濟(75) 自然經濟の特徴(80) 資本主義經濟の特徴——商業恐慌
を例として(82) 失業を例として(85) 價格變動を例として(88) 經濟學の任務は資本主義生産様式の法則の發見に
ある(89) 古代經濟および封建經濟の計調性(91) 資本主義經濟の無秩序性(92) 資本階級の經濟學と労働階級の經
濟學(94)

六 經濟學と労働階級 九四

經濟學の存立は資本主義の存立に伴ふ(94) ブルジョア革命の武器としての古典經濟學(103) 社會主義の實現とも
に經濟學は終焉する(104) プロレタリア解放運動の武器としての經濟學(104) フランス革命と社會主義(106) ユトピア。
社會主義(106) 科學的社會主義の發生(109) 經濟學とプロレタリア運動との特殊關係(111)

第二章 經濟史(一) 一二三

一 原始共產社會の歴史的地位 一二三

マウラーの發見(113) ゲルマン民族共產體の發生過程(115) ハックスタウゼンの發見(118) スラヴ民族共產體(118) イン
ド共產體(121) アラビア民族共產體(125) 古代ペルー共產體(126) 原始共產主義は文化發展の一定段階における普遍的
形態である(129) モルガンの原始共產主義學說(132) 階級搾取社會は文化發展における一時的段階にすぎぬ(137) モル
ガンの業績とマルクス主義(138)

二 原始共產主義學說と資本家的階級利害 一二九

原始共產主義學說にブルジョア學者が反對する階級的根據(139) リッペルトの反對論(142) ビュヒャーの反對論(144)

三 原始的種族における共產主義 一六一

グローセの反對論(144) これに對する反駁(147)
農業に至らざる最原始的種族の生活(162) オーストラリア黑人(163) 南カリフォルニア・インディアン族(170) 南アメ
リカ・ボロラ族(172) フォイエルランド族(174) ミンコビー族(175) 農業に至らざる種族の間には共產主義經濟が行は
れてゐる(177) 農業共產主義は原始共產主義の最高且つ最終の形態(178)

四 經濟史に對する資本階級の見地と労働階級の見地 一八一

經濟史的發展の要因として何を携ふべきか(181) 決定的要因——生産手段に對する労働力の關係(183) ブルジョア學
者の經濟史的段階の分類(185) ビュヒャーの分類(186) これに對する批評(187) ブルジョア學者が經濟史の尺度として
交換分配消費を撰ぶ階級的根據(191) 經濟史に對する階級的立場の相反(194)

第三章 經濟史(二) 一九五

一 原始共產社會の内部的組織と各種崩壊様式 一九五

ゲルマン共同體の内部的組織(195) 古代ペルー共同體の内部的組織(201) 古代ギリシヤ共同體の内部的組織(205) 原始
的社會組織の崩壊の経路(211) 資本主義との衝突(213) スペイン植民地におけるインディアン共同體の崩壊様式(215)
インド共同體の内部的組織とその崩壊様式(221) ロシア共同體の内部的組織とその崩壊様式(233)

二 原始共產社會の崩壊過程總説 二三四

土地共產體の順應性と耐久性(243) 労働生産力と生産關係との衝突(245) 集約的耕作の必要と土地私有の發生(245) 公
共的仕事の増大と身分的分化(246) アフリカ黑人社會における專制政治(249) 外來民族の支配(255) 資本主義の侵入(256)

第四章 商品生産

一 商品交換の成立

共産體に共有および共同労働計劃が突然廢止されたと假定する(259) 交換によつて社會的聯結が再建される(261) 商品生産の發生(262) 交換社會において私的労働が如何にして社會的労働となるか(266) 商品交換が社會關係に及ぼす變化(268)

二五八

二 商品交換の成立

如何にして社會的交換が成立し得るか(274)

一般的商品の發生(277)

貨幣の出現と貨幣の諸機能(281)

二七四

三 商品經濟の歴史的發展

共有の崩壊と私有の發生(236) 分業の發達(288) 偶發的交換より規則的交換へ(292) 一般的商品(294) 金屬貨幣の出現と商品經濟の支配(298)

二八六

四 單純商品生産より資本家的生産へ

商品交換の基礎——スミス、リカルドの労働價值學說(300) マルクスの功績(303) 貨幣廢止による社會主義實現の企圖(306) 價值通りの交換が行はれるのに如何にして富の不平等が現はれるか(307)

三〇〇

第五章 賃銀法則

一 商品としての労働力

労働力商品の出現(308) 労働力の價值(309) 労働力商品の特殊性(310) 労働力が商品となる諸條件(311) 労働生産性の發達(312) 労働者の人身的自由(315) 生産手段よりの分離(315) 商品經濟の存立(317)

三〇八

二 労働日

支拂労働時間と剩餘労働時間(319) 奴隸労働の搾取と賃銀労働の搾取(322) 剩餘價值増大のための二方法——労働日の延長と賃銀の引下(323) 労働日の長さは資本家對労働者の實力によつて決せられる(324) 労働日を中心とする闘争史(325) 最短労働日制定の時代(325) 最長労働日制定の時代(327)

三二八

三 賃銀形成の基準

名目賃銀と實質賃銀(330) 労働力賣買における資本家の立場と労働者の立場(331) 労働組合組織によつてのみ労働力は價值通りに賣られ得る(333) 労働者生活標準が生理的最低限度に引下げられる傾向(333)

三三〇

四 産業豫備軍の發生

産業豫備軍の存在は資本主義經濟の存立條件(336) 産業豫備軍の諸層(338) 産業豫備軍の形成は資本主義特有の現象(340) ブルジョア學者は失業者層の存在を自然律と見る(343)

三三六

五 相對賃銀と社會主義運動

絕對賃銀と相對賃銀(345) 相對賃銀の低下は資本主義發展の必要條件である(347) 相對賃銀低下に對する抗争は資本主義そのものに對する闘争となる(350) 組合運動と社會主義運動(351)

三四四

六 賃銀形成に及ぼす労働組合の作用

労働者生活標準は労働組合組織によつてのみ高められる(352) 生活標準向上に及ぼす労働組合の作用には限界がある(353) 「賃銀鐵則」理論とそれに對する批評(356)

三五二

七 賃銀労働者の發生

三五九

何處から最初のプロレタリアが発生したか⁽³⁶³⁾

第六章 資本主義經濟の諸傾向

一 資本主義生産様式の矛盾

無秩序を原則とする資本主義經濟を可能ならしむる諸條件⁽³⁶²⁾

おる法則に轉化する⁽³⁶⁵⁾ 資本の世界的司令——世界貿易と植民地侵略⁽³⁶⁶⁾ 資本主義を可能ならしむる法則が不可能ならし

至つて赤裸々に現はれる⁽³⁶⁹⁾ 資本主義生産の擴張慾と市場限界との衝突⁽³⁷¹⁾ 資本主義の矛盾は世界經濟の成立に

三六二

三六三

經濟學入門

第一章 國民經濟學とは何ぞや

國民經濟學は奇妙な學問である。

この領域に第一步を踏み入れるに當つて、即ち、この學問の特有の對象は何ぞやといふ最も初歩的な問題に當つて、早くも難點と意見の相違とが初まる。國民經濟學とは何を教へるものであるかといふ點について、全然漠然たる觀念しかもつてゐない單純な勞働者は、自己の不明を自分自身の教養の不足に歸するだらう。しかしながらこの勞働者は、この場合は、國民經濟學について大冊の著作を書いたり、大學で青年學生のために講義を行つたりしてゐる幾多の博學な學士や大學教授と、或る意味においてその不幸を共にしてゐるのである。信じられないような話ではあるが、國民經濟學の専門學者の大多數が、自分の學識の本統の對象が何であるかについて、極めて曖昧な概念をもつてゐるのは事實である。

専門學者諸君の間では、定義を拵へるのが、言ひかへれば複雑極まる事物の本質を二三の整然たる命題の中に言ひ盡すが、慣はしになつてゐるのだから、吾々は試みに國民經濟學の公式代表者の口から、この學問が根本的に如何なるものであるかを聞くことにしよう。まづ最初に、ドイツ大學教授仲間の耆宿であり、國民經濟學に關する無數の驚くべき歴大な教科書の著者であり、

謂はゆる「歴史派」の創始者であるウィルヘルム・ロツシャーが、これについてどんなことを言つてゐるかを見よう。彼れの最初の大著、『國民經濟學の基礎。實業家および研究者用參考書並びに教科書』——これは一八五四年に發行され、爾來二十三版を重ねてきてゐる——において、吾々はその第二章第十六節に次ぎの如き章句を讀む。

「吾人は國民經濟學を、國民經濟即ち經濟的國民生活の發展法則の學と解する（フォン・マンゴルトの言をかりれば、國民經濟史の哲學）。これは國民生活のすべての學と同じく、一面には個々の人間の觀察と關聯し、他面には全人類の研究にまで伸長する。」

さて「實業家および研究者諸君」は、國民經濟學とは如何なるものであるかを理解したか？ それは取りも直さず——國民經濟の學なのだ。角眼鏡とは何か？ 角縁の眼鏡だ。荷驢馬とは何か？ 荷を運ぶ驢馬だ。小さな兒どもに熟語の用法を説いて聞かせるのは、實に造作もない方法である。たゞこの場合困つたことには、豫じめ問題の言葉の意味を理解してゐない人間は、その言葉が如何に置き代へられても、それによつて一向利口にはならないのである。

次ぎにもう一人のドイツの學者、現にベルリン大學の經濟學教授であり、「國を超え大洋まで」名聲を馳せてゐる官學の一名、シュモラー教授に轉じよう。ドイツの大學教授連の大きな合著、『國家諸科學中辭典』（コンラッド教授およびレキシス教授編纂）の中に、シュモラーは、國民經濟學に關する一論文において、國民經濟學とは何ぞやといふ問題に對して次ぎの如き解答を與へてゐる、「それは國民經濟的現象を記載し、定義し、原因によつて説明し、並びに一個の聯結せる

全體として理解せんとする學であると言ひたい。もつともこの場合、國民經濟なるものが豫じめ正當に定義されてゐることを前提されてゐるのは勿論である。この學の中心になつてゐるものは、今日の文化的國民の間に反復されつゝある典型的諸現象、即ち分業および勞働編制、交通、所得分配、社會的經濟文物であつて、後者は私法および公法の一定形態に依倚し、等一の又は類似の心理的力によつて統御されて、類似の又は等一の規定または勢力を生み出し、その總體的記載はそのまゝ現在の經濟的文化世界の靜態、この文化世界の一種の平均的組織を説明するものである。この學は右のものから出發して、次ぎに個々の國民經濟相互間の偏差や、諸所における異なる組織形態を觀察せんと試み、これらの異なる種々の形態が如何なる結合を行ひ、如何なる結果において現はれるかを探究してきた。そして此の如くにして諸形態相互の因果的發展、並びに經濟狀態の歴史的繼起といふ觀念に到達してゐる。即ちそれは靜態的觀察に動態的觀察を添加してきたのである。そしてこの學は、その最初の出現からすべての人倫的歴史的價值判斷に因つて、理想を打ち立てるにいたつたように、それと並んでこゝろいふ實踐的機能をつねに或る程度まで維持してきた。それは理論の外に、生活のための實際的教説をつねに組み立ててきたのである。」

やれやれ！ ひと息つかう。つまりどうなつたのだ？ 社會的經濟文物——私法および公法——心理的力——類似と等一——等一と類似——統計——靜態——動態——平均的組織——因果的發展——人倫的歴史的價值判斷……何しろ凡人にとつては、頭の中に水車が廻つてゐるようで、何が何やら分らなくなる。不撓不屈の知識慾と大學教授的智慧の泉に對する盲目的信頼とを以て、

凡人はその中に何等かの理解し得る意味を發見するために、この譯けの分らぬ文句を二度も三度も一生懸命に熟讀することに骨折るだらう。だがおそらくはそれは無駄な骨折りとなるであらう。そこに示されてゐるものは、取りも直さず音響だけの文句、飾り立てられた言葉の音響以外の何ものでもない。そしてそれを示す間違ひのない一つの微號がある。即ち明瞭に考へ、自分が話してゐる事柄を本統に擱んでゐる人間は、同時にまた明瞭に、分るよりに言ひ現はすといふ事實である。哲學の純粹心象や宗教的神祕論の幻想を主としてゐるのでない場合に、曖昧に且つ業々しく言ひ現はす人間は、その事柄そのものが分つてゐないのか、それとも明瞭に語ることを避ける原因を何かもつてゐることを立證するものに外ならぬ。經濟學の本質に關するブルジョア學者の曖昧な譯けの分らぬ言葉は決して偶然ではないこと、その言葉の中にはむしろ二つのものが現はれてゐること——即ちこれらの學者諸君自身の不明瞭も現はれてをれば、問題の眞の闡明を厭やがる彼れ等の偏頗な、意地悪い根性も現はれてゐることを、後に吾々は見るとであらう。

經濟學の本質の不明瞭な定義が、事實において一個の論争の問題であるといふことは、或る外部の事情によつて明瞭にすることが出来る。それは國民經濟科學の年齢について、極めて矛盾した幾多の見解が現はれてきてゐるといふ事實である。たとへば知名な老史家であり、かつてパリ大學の經濟學教授だつたアドルフ・ブランキイ——有名な社會主義指導者であつたコンミュン戦士オーギュスト・ブランキイの兄弟——は、一八三七年に著した『經濟發達史』の第一章を、次ぎの題言を以て始めてゐる、「政治的經濟學（國民經濟學をフランス語で言ひ現せるもの）は、人

々が考へてゐるよりも古い時代のものである。ギリシヤ人およびローマ人はすでに彼れ等の經濟學を有してゐた」と。他の經濟史家、たとへば以前のベルリン大學講師オイゲン・デュトリンクの如きは、その反對に、國民經濟學は普通に考へられてゐるよりも、甚しく年代の若いものであつて、この學問はもと十八世紀後半に初めて生じたものであることを力説する必要があると考へてゐる。そしてまた、この點に關する社會主義者の判斷を挙げれば、ラサールは一八六四年にシユルツェ・テリリツチに對する彼れの古典的論争書、『資本と勞働』の序文の中に、次ぎの如く言ひ現はしてゐる。

「國民經濟學は、その端緒が漸やく存在してゐるだけの、そして尙ほこれから作らるべきところの科學である。」

これに反してカール・マルクスは、彼れの經濟學的著作『資本論』——その第一卷は謂はばラサールによつて示された期待の履行として、それ（ラサールの『資本と勞働』）から三年おくれで現れたものである——に對して、『經濟學批判』といふ副標題を與へた。このようにマルクスは彼れ自身の著作を從來の經濟學の圏外に置き、後者を完成したものの、出來上つたものと觀て、彼れ自身の方からはこれに批判を加へてゐるわけである。こういふ風に、或る人々は、この學問は人類の記録歴史と殆んど同じ位に古いと主張し、他の人々は、一世紀になるかならざるものだと主張し、第三の人々は、漸やくまだ幼兒になつたばかりのものだと主張し、今度はまた別の人々が、この學問はすでに死亡してしまつた、今はそれを批判的に埋葬する時だと主張してゐる——およ

そこらいふ學問は、可なり獨特な且つ錯綜した問題を形成してゐることが明らかである。

だが同じくまた、今日支配してゐる意見のように、經濟學が百五十年前といふような晩い時期に發生したといふ不思議な事實は、一體如何に説明さるべきであるかを、この學問の公式代表者の一人に質問するならば、吾々は飛んでもない忠言を與へられるだらう。たとへばデューリング教授は縷々贅言を費やして次ぎの如く説明するだらう。古代ギリシヤ人およびローマ人は、經濟學的物事についてまだ何等學問的概念を有せず、單に日常の經驗からの「責任の負へぬ」、「表面的」な、「至極ありふれた」觀念を有してゐただけであり、中世は一般に極めて「非科學的」だつたと。この博學な説明は特に中世をこんな風に概括した點においても全然誤つてゐるが、その點を度外視しても、こんな説明の仕方は吾々を一步も前進させるものではないことは明白である。もう一つ一種獨特な説明をシュモラー教授は製造してゐる。右に『國家諸科學中辭典』から引用した同じ論文の中で、氏は次ぎのことを吾々に御馳走してくれてゐる。

「數百年の間個々の私經濟的および社會經濟的事實が注意され、記載され、個々の國民經濟的眞理が認識され、道徳および法律體系の中で經濟上の問題が論究されてゐた。これまでの個々の部分が初めて一個の特殊科學に綜合され得たのは、國民經濟的諸問題が、十七世紀—十九世紀において、國家の統制および行政にとつて從來豫想されなかつた重大なる意義を獲得し、多數の著述家がこの國民經濟的問題に携はり、青年學生に對してこの問題を教示することが必要となり、同時に一般に科學的思惟の勃興の結果、集成された國民經濟的命題および眞理を、十八世紀の顯

著なる著述家が試みたように、或る種の根本思想——貨幣および交換、國家的經濟政策、勞働および分業の如き——によつて結合された一個の獨立の體系に結成するに至つた時であつた。爾來國民經濟學は獨立の科學として成立してゐる。」

この長々しい説明を短い意味に包括するときは、次ぎの如き教訓を得る。曰く、長い時期の間散り散りばら／＼になつてゐた個々の國民經濟的觀察が、一個の特殊科學に結成するに至つたのは、「國家の統制および行政」の必要、即ち政府の必要に迫られたとき、そしてこの目的のために大學で國民經濟學を教へることが必要となるに至つたときである。こらういふ説明は、ドイツの大學教授にとつては如何に讚嘆すべきものであり、如何に模範的なものであらう！ 尊敬極まりなき政府の「必要」から、初めて一個の講座が設けられて、一人の精勵格勤なる大學教授が座を占める。然らばまた言ふまでもなく、それに相應した科學が創設されてゐなければならぬ、でなければ教授は教へるものが無いではないか？ こらういふ理窟を聞いて、王國は永久に持續しなければならぬ、何故なら王國が存在してゐないとしたら、自分にはこの世に何の仕事もなくなるからだと主張した宮廷儀典長の言葉を思ひ出さないものがあるだらうか？ しかも問題の核心たる國民經濟學は、近代國家の政府がこの科學を必要としたから生じたといふのだ。お上みの註文が國民經濟學の本來の出生認知なのだ。この場合々々の帝國政府の學問的侍僕として、その政府の命令を受けて艦隊擴張案や關稅、租稅案のために、お好み次第に「學問的」な煽動を行ふか、でなければ戰場の鬩狗として、戰爭中排外主義的な民族的敵愾と精神的食人主義とを教唆しつゝあ

る今日の大學教授の考へ方にとつては、君侯の貨幣的欲望「内帑」の利益、政府の一言の命令が、全然新規な一個の學問を呪文で以て出現させるに充分だといふようなことを考へるのはたしかに至極相應はしいことである。にも拘らず國庫から俸給を受けてゐるのでない普通一般人にとつては、こゝろいふ思想は幾多の難點をもつてゐる。就中こゝろいふ説明は、吾々に新しい謎を課するものに外ならない。何故ならそうなる吾々は次ぎの如き質問を出さなければならなくなるからだ。曰く、シュモラー教授が主張してゐる通りに、十七世紀頃に近代國家の政府が、その親愛なる臣僕どもを學問的原理によつて欺く必要を、突然感じ出したといふのはどうしたわけか？ それまでは政府は幾世紀に亘つて、そゝいふ學問的原理なんかなしに、家長的に家來を世話することに立派に成功してゐたではないか？ おそらくこの場合事柄が顛倒してゐるのではないか、即ち「内帑」の新しい欲望は、大きな歴史的激變の一個の微細な結果にすぎないのであつて、その歴史的激變そのものから國民經濟學といふ新しい學問が十九世紀中葉に發生したのではないか？ 要約して言へば、國民經濟學とは何を取扱ふものであるかを、初めに學士會員から聞けなかつた以上は、この學問が何時、何のために發生したかもまだ分らぬわけである。

二

とにかく一つのこととは確かである。即ち、すべて右に引用したブルジョア學者の定義の中には、つねに「國民經濟」のことが言つてある。「ナチオナルエコノミー」(National Konomie)といふ

ふのも、國民經濟學 (Volkswirtschaftslehre) の外來語にすぎない。國民經濟の概念は、この學問のすべての公式代表者の場合に論究の中心點を成してゐる。然らば國民經濟とは一體何であるか？ 「國民經濟の發生」に關する著作を以て、ドイツにおいても外國においても非常な名聲を馳せてゐるビュヒャー教授は、これについて次ぎの如き教へを垂れてゐる。

「一國民全體の欲望の充足が惹起するところの、設備、文物、所爲の總體が國民經濟を形成する。國民經濟はまた幾多の個別經濟に分れ、後者は交通によつて互ひに結合されてゐる、そして個別經濟が各自、他のすべてのために或る任務を負ひ、他のすべてからかゝる任務を負はされてゐることによつて、相互に對して千種萬様に依倚し合つてゐる。」

矢張りこゝろいふ博學な「定義」を、普通一般人の言葉に翻譯して見よう。

まづ第一に、一國民全體の欲望を充たすべく定められてゐる「文物および所爲の總體」といふ言葉を聞くときは、吾々はありとあらゆるもの——工場や職場、耕作や牧畜、鐵道や倉庫、それと同じく、牧師や警官、舞踏會や登録官や天文臺、議會選舉や國君や軍人協會、將棋俱樂部、畜犬展覽會、決闘などを思ひ出さなければならなくなる——何故ならすべてこゝろいふものと、なほこれ以外の幾多の「文物および所爲」の無限の連鎖は、今日「一國民全體の欲望を充たす」役をつとめてゐるからである。そうなれば國民經濟なるものは、天地の間に起る一切のものの綜合となり、國民經濟學なるものは、ラテンの諺にあるように「すべての事物となほその上にいくらか」を取扱ふ一個の普通科學となるわけである。

このライプチヒの大學教授の太つ腹な定義は、明らかに一の制限を受けなければならぬ。多分彼れは一國民の物質的欲望の充足、もつと正確にいへば物質的事物を以てする欲望の充足に役立つ「文物および所爲」のみを言はうと欲したのだ。だがそうしたとしても、「總體」といふのが餘りに廣汎な意味に捉へられ、再びわけなく雲霧の中で消失することにならう。とはいへ吾々はできるだけこの中に手がかりを見出すことに努めよう。

すべての人間は生き得るためには飲食物を必要とし、雨露を凌ぐ屋根を必要とし、寒い地帯では衣服を必要とし、更らに家内における日常用途のための種々の器具を必要とする。これらの物は簡單なると、精巧なると、つましやかになると、豊富なるとを問はず、いづれにしてもあらゆる人類社會の存立のために缺くべからざるものであり、従つて——炙つた鳩はひとりでの口中に飛び込むものではないから——人間によつて絶えず調達されなければならぬ。それにすべての文化状態において、なほ生活の美化と精神的社會的欲望の充足とに役立つ種々の對象——敵に對する防衛のための武器といふような——がこれに加はる。即ち謂はゆる野蠻人の場合には、舞踏の面や、弓矢、偶像がそれであり、今日吾々の場合は、贅澤品、寺院、機關銃、潛航艇がそれである。今度はこれらのすべての對象物の製出には、それをつくるに役立つ各種の自然材料や道具が矢張り必要である。しかるに石、木材、金屬、植物等の如き材料も、人間の労働によつて地殻から採取されるのであり、その際に使用される道具も、矢張り人間労働の産物なのである。そこで暫くこういふ粗削りの觀念で満足しようとするなら、吾々は國民經濟なるものを略々次

ぎの如く考へることができよう。各國民は絶えず自己の労働によつて、生活に必要な事物——食物、衣服、建物、家具、裝飾品、武器、文化品等、同じくまたこれらのものの製出に缺くべからざる材料および道具——の或る一定量をつくり出してゐる。さて一國民がすべてこういふ労働を遂行し、製出された財を個々の成員の間に分配し、これを消費して生活の永久の循環中に再び新たに製出する——すべてそういふやり方全體が、その場合の國民の經濟、即ち一個の「國民經濟」を形成するのである。これが大略ビュヒャー教授の定義の中の第一の命題の意味なのだ。だが更らに解釋を進めて行かう。

「國民經濟はまた幾多の個別經濟に分れ、後者は交通によつて互ひに結合されてゐる、そして個別經濟が各自、他のすべてのために或る任務を負ひ、他のすべてからかゝる任務を負はされてゐることによつて、相互に對して千種萬様に依倚し合つてゐる。」こゝに吾々は或る新たな問題に當面する。曰く、吾々が漸やく腐心して考へ當てたところの「國民經濟」が個別經濟に分れるといふ、その「個別經濟」とは一體如何なるものであるか？ 最も手近かなところでは、おそらくその中に個々の家政、家族經濟を數ふべきであらう。事實において、謂はゆる文化國では各國民はいづれも無数の家族から成り立つてゐる、そして各家族はまた常則として一個の「經濟」を自分のために行つてゐる。この私經濟の本質は次ぎの點に存する。即ち家族はその中の成人の仕事からにせよ、その他の源泉からにせよ、或る何等かの貨幣收入を得て、それで以て衣食住等の欲望の充足に宛てる。そしてこの場合一個の家族經濟を考へるなら、普通にこの觀念の中心に

は主婦、庖厨、洗濯物戸棚、保育室などが浮んでくる。「國民經濟」がこういふ「個別經濟」に分れるといふのか？ 吾々は一種の當惑に陥る。吾々がいま解き明してきた國民經濟の場合は、主眼となつてゐるものは何よりもまづ、衣食住、什器、道具、材料として生活および労働に要するすべての財の製出である。即ち國民經濟の中心點には生産が位してゐる。これに反して家族經濟の場合に主眼となつてゐるのは、種々の物品の消費なのであつて、その物品は家族がその所得を以て出来合ひのまゝを買つてゐるのである。近代國家における大多數の家族は、今日殆んどすべての生活資料、衣食、什器等を店や市場で出来合ひのまゝ買つてゐるのを吾々は知つてゐる。家庭經濟においては、買入れた生活資料からのみ食物が調製され、また少くとも買った材料で衣服を拵へてゐる。農家がまだ生活に必要な大多數のものを一家内の労働によつて調達してゐるのは、全然進歩におくれてゐる田舎だけである。なるほど近代國家においても、種々の工業生産物を多量に家内で製出する數多の家族が存在してはゐる。たとへば家内織匠や出来合洋服工がそうである。また吾々の知つてゐる通りに、村を擧げて玩具や何かを家内工業で拵へてゐるところもある。しかしながらそういふ場合であつても、家族によつて拵へられた生産物は、専らそれを注文しそれを買取るところの企業家に屬するのであつて、その中の一個と雖もその家族自身の消費へは移らず、家内で働いてゐる家族の經濟の中には入り込まない。自家の經濟のためには家内労働者は、自分の乏しい賃銀から、他の一般家族と同じようにすべて出来合ひを買ふのである。そこで吾々は、國民經濟は幾多の個別經濟に分れるといふビュヒャーの命題を以て、別な言葉で大體次ぎの

結果に到達したことになる。曰く、國民全體の生存手段の製出は、個別的家族による生活資料の單なる消費に「分れる。」——何と飛んでもない馬鹿げたことのように見える命題ではないか。

なほもう一つの疑問が生ずる。「個別經濟」は、ビュヒャー教授によると、「交通によつて互ひに結合し」、なほ「各自他のすべてのために或る任務を負ふ」のだから、すべて相互に對して依倚し合つてゐるといふ。こゝにいふ交通や依倚とは、如何なるものを意味してゐるだらうか？ 種の私家族の間に現はれる友隣的な種類の交通のことだらうか？ だが一體そういふ交通は、國民經濟と、並びに一般に經濟と何の關係があるといふのか？ それは勤勉な主婦のすべてが主張してゐる通りに、隣人との家々の交通が少ければ少いほど、經濟や家庭内の平和にとつて有益なのだ。そして「依倚」といふ點で言へば、金利生活者のマイヤーの家經濟が、中學校教頭のシュルツェやその他すべての人々の經濟のために、どんな「任務」を負つてきたのか、一向想像することができない。吾々は明らかに道を外れた。それで問題を別の一端から捉へなければならぬ。故にこういふ個別的家族經濟に、ビュヒャー教授の「國民經濟」が分れるといふことはあり得ないのは一見して明らかである。それなら、個々の工場、職場、農場や何かに分れるのではないだらうか？ 今度は吾々は正道に辿り着いたことを主張し得る根據があり相に見える。これらのすべての經營において、國民全體の維持に役立つものが種々製出され、生産されてゐるのも本統であり、また他方においてもそれらの經營の間には如何にも交通と相互的依倚とが存してゐる。たとへばズボン釦を製造する工場は全く裁縫職場に依倚してをり、そこで彼れ等は自己の商品に

對する買客を見出すのであるが、一方裁縫工はまたズボン卸がなければズボンをよく仕立て上げることができぬ。他方において裁縫職場は材料を使用する、それで羊毛および木綿織匠に依倚してをり、後者はまた後者で牧羊業や木綿取引業に依倚してゐるといつた風である。こゝに吾々は事實上多岐に互つての生産の相互關聯を認めることができる。尤もこの場合、こゝに吾々がいづれも「他のすべてのために任務を負ふ」といふのは、如何にも誇張である。といふのは、この場合行はれてゐるのは、裁縫工にズボン卸を賣り、紡績場に羊毛を賣るといふような、極めて普通ありふれた販賣だからである。しかしながら吾々は今暫くの間はこゝにいふ飾り立てを、避けがたき大學教授式癡言と見て勘辨しなければならぬ。大學教授といふものは、シュモラー教授が道破してゐるように、企業家世界の一寸した儲け仕事にも、何か彼が「人倫的評價」をくつ付けたがるものである。しかしながら茲になほ深い疑問が生ずる。個々の工場、農場、炭坑、製鐵所は、國民經濟が「分れる」ところのそれぞれの「個別經濟」だといふことになる。だが少くとも吾々が國民經濟を思ひ浮べる場合の「經濟」といふ概念の中には、明らかに或る範圍内において、生活資料の製出も消耗も、即ち生産も消費も含まれなければならぬ。ところが工場、職場、炭坑、製鐵所では只生産されるだけであり、それも他のために生産されるのである。そこでは道具を運用するために原料だけが消費されるのであつて、仕上つた生産物は工場内においては決して消費に移らない。一個のズボン卸と雖も、工場主およびその家族によつて消費されることなく、況んやその工場の労働者によつて消費されるものではなく、一個の鐵筒と雖も製鐵所の所有主によつ

て家庭内で消費されはしない。加之、いかに「經濟」なるものを精密に規定しようとする場合でも、吾々はつねにこれを全體的な或るもの、幾分首尾の完成した或るものと解し、人間の生存に要する最も重要な生活資料の製出および消費といふ風に解しなければならぬ。ところが今日の各農工業經營が供給してゐる生産物は、どんな子供でも知つてゐるように、一種類の生産物、または高々二三種類の生産物であつて、それ一つでは人間の生計を充たすに足りぬばかりか、大多數の場合それだけでは全く消費され得ないものである。即ち或る經營は生活資料の一部を、或る經營はその材料を、或る經營は道具を供給すると言つた風である。即ち今日の生産經營は取りも直さず一個の經濟の斷片なのであつて、この斷片はそれだけとしては、經濟的見地からは何等意味も目的も有してゐないのである。まさにそゝいふことだけからしても、吾々の如き無學者の眼から見れば、これらの斷片はそれ自身としては何等經濟ではなく、一個の「經濟」の無細工な小破片にすぎぬものと映るのである。そこで、國民經濟、言ひかへれば一國民の欲望の充足に役立つ文物および所爲の總體が、工場、職場、炭坑等の如き個別經濟に分れるといふなら、それと同じく次ぎの如く言ふことができよう。人間といふ有機體のすべての機能の運用に役立つ生物學的設備の總體が人間そのものであつて、この人間は、鼻、耳、脚、腕等の幾多の個別的器官に分れると。事實において今日の「工場は、鼻が一個の個別的器官であると略、同じ程度で、一個の「個別經濟」なのである。

かくて吾々はこゝにいふ正道を辿つても、矢張り一個の馬鹿げた事柄に到達した。即ち、單なる

外面的な特徴と言葉の分割とに基くブルジョア學者の人工的定義は、こゝにいふ場合に事柄の眞の核心を避け廻らねばならぬ或る理由を有してゐることが、これによつても立證されるのである。そこで吾々自身で、國民經濟の概念を一層精密に吟味して見よう。

三

彼れ等は吾々に語つて曰く、一國民の欲望、曰く、一個の相關的經濟を以てするこの欲望の充足、そして曰く、一國民の經濟と。即ち國民經濟學とは、かゝる國民經濟の本質を説明する學、言ひかへれば一國民が勞働によつてその富をつくり出し、増大し、個々の人々に分配し、消費し、そして再びこれをつくり出すところの法則を説明する學であるといふ。従つて研究の對象を成すものは、私經濟または個別經濟——どんなものを意味しようとも——ではなく、一國民全體の經濟生活だといふのである。かくてこゝにいふ見解を一見確證するものゝ如く、國民經濟學の父と呼ばれるイギリス人、アダム・スミスの一七七六年出版の調期的著作も、『國民の富』といふ標題を帯びてゐる。

しかし吾々はまづ第一に質問しなければならぬ、實際において一國民の經濟といふようなものが存在してゐるだらうか？ 諸國民は各自特別の家計、一個の仕切られた經濟生活を營んでゐるだらうか？ 國民經濟 (Volkswirtschaft, Nationalökonomie) といふ言ひ現はしは、特にドイツにおいて偏愛を以て使はれてゐるのだから、視線をドイツに向けよう。

ドイツの男女勞働者の手によつて、毎年農工業において巨量の各種消費財が生産されてゐる。だが一體このすべてがドイツ帝國住民の自己消費のために製出されてゐるだらうか？ 吾々はドイツの生産物の莫大な部分が他の諸國並びに他の諸大陸に向つて、他の諸國民のために輸出され、しかもその額は毎年増大しつゝあるのを知つてゐる。ドイツの製鐵品はヨーロッパにおける近接諸國、更らに遠く南アフリカやオーストラリアまでも行つてゐる。革および製革品はドイツからすべてのヨーロッパ諸國家に行き、硝子製品、砂糖、手袋はイギリスに赴き、毛皮はフランス、イギリス、オーストリア・ハンガリーに、アリザリン染料はイギリスや合衆國やインドに、肥料として用ゐられるトーマス鑛滓はオランダやオーストリア・ハンガリーに、コークスはフランスに、石炭はオーストラリア、ベルギー、オランダ、スウェーデン、電線はイギリス、スウェーデン、ベルギーに、玩具は合衆國に、そしてドイツの麥酒、インディゴ並びにアニリンその他の染料、藥品、セルロイド、金製品、瓦斯マンテル、木綿製および羊毛製材料並びに衣服、ドイツ製軌條は、殆んど世界のすべての商業を營んでゐる國々に送られてゐる。

しかしまた逆にドイツ國民は、勞働においても日常の消費においても、一步毎に外國並びに他國民の産物に頼つてゐる。吾々はロシアの穀物で拵へたパンや、ハンガリー、デンマルク、ロシアの家畜の肉を食してゐる。吾々が消費しつゝある米は東インドや北アメリカから、煙草はオランダ領インドやブラジルから渡つてくる。吾々はココア豆を西アフリカから手に入れ、胡椒をインドから、豚脂を合衆國から、茶を支那から、果實をイタリー、スペイン、合衆國から、コーヒ

1をブラジル、中央アメリカ、オランダ領インドから手に入れる。肉エキスをウルガイから、鶏卵をロシア、ハンガリー、ブルガリアから、葉巻をキューバ島から、懐中時計をスイスから、シヤンペン酒をフランスから、牛皮をアルゼンチンから、布團用羽毛を支那から、絹をイタリーおよびフランスから、亞麻をロシアから、木綿を合衆國、インド、エチプトから、精製羊毛をイギリスから、黄麻をインドから、麥芽をオーストリア・ハンガリーから、亞麻仁をアルゼンチンから、或る種類の石炭をイギリスから、褐炭をオーストラリアから、硝石をチリーから、鞣皮用ケブラホ材をアルゼンチンから、建築用木材をロシアから、製籃材をポルトガルから、銅を合衆國から、錫をオランダ領インドから、亞鉛をオーストラリアから、アルミニウムをオーストリア・ハンガリーとカナダから、アスベストをカナダから、アスファルトと大理石とをイタリーから、鋪石をスウェーデンから、鉛をベルギー、合衆國、オーストラリアから、石鉛をセイロンから、硫酸石灰をアメリカおよびアルゼリアから、沃度をチリーから……

最も簡単な日用食料品から最も貴重な贅澤品や、最も必要な材料および道具にいたるまで、大多数は直接または間接に、全部または何等かの部分が他國から渡つてくるものであり、他國民の生産物である。かくて吾々はドイツにおいて生活し、勞働し得るために、殆んどすべての國、民族、大陸をして吾々のために働かせ、吾々はまた吾々で、すべての國々のために働いてゐる。

こらいふ交換の規模が如何に巨大なものであるかを一目瞭然たらしむるために、政府の輸出入統計を一瞥しよう。『ドイツ帝國統計年報』一九一四年度によれば、總貿易（但しドイツを單に通

過するだけの外國商品を除く）は次ぎの如き形を取つてゐる。

ドイツが一九一三年に輸入したものは、

原料	五二六二百萬マルク
半製品	一二四六
完製品	一七七六
食料および嗜好品	三〇六三
生畜	二八九
計	一一六三六

即ち約百二十億マルクである。

同年ドイツが輸出したものは、

原料	一七二〇百萬マルク
半製品	一一五九
完製品	六六四二
食料および嗜好品	一三六二
生畜	七
計	一〇八九〇

即ち約百十億マルクである。そこでドイツの二年間の外國貿易は總體で二百二十億以上によつ

てゐる。

ところがドイツにおけると同じことが、多いか少いかの程度はあるが他の近代的諸國においても行はれてゐるのであつて、即ち國民經濟學は専らこれらの國々の經濟生活を取扱ふものである。すべてこれらの國々は相互のために生産し、部分的にはまた最も遠隔な大陸のためにも生産してゐるのだが、それらの國はまたそれらの國で、消費の場合にも生産の場合にも、すべての大陸の産物を事毎に使用してゐる。

こんなに交換が厖大に發達してゐるのに、何故に人々は一國民の「經濟」と、他國民のそれとの間に限界を設け、「國民經濟」などと言つて、各自がそれ自體として觀察され得る獨立的領域であるかのように語る必要があるのか？

ところで國際的商品交換が増大しつゝあるといふことは、ブルジョア學者がまだ耳にしてゐないような發見では勿論ない。毎年報告の發表を以てする政府の統計の内容は、永い間すべての教養ある人士の共同財産となつてゐる。それに實業家や工業労働者は、この事實を日常生活から熟知してゐる。世界貿易が急激に増大しつゝあるといふ事實は、もはや今日争つたり疑つたりできぬ程一般に承認されてゐる。ところがこの事實を、國民經濟學の專攻學者は如何に解してゐるだらうか？ 純外部的な弛い聯絡と解し、一國の産物中自國の需要を超過した謂はゆる「餘分」を輸出し、自國の經濟に「不足なもの」を輸入することゝ解してゐる。――そして彼れ等にとつては、こゝにいふ聯絡があつても、依然として「國民經濟」や「國民經濟學」を説く妨げにはならな

いのである。

たとへばビュヒャー教授は、今日の「國民經濟」は歴史的經濟形態の一系列中における最高にして最後の發展段階であるといふことを長々と説いてから、次ぎの如く述べてゐる。

「國際的交通が容易になつた（それは自由主義時代に起つた事柄である）といふことから、國民經濟の時期は終りを告げ世界經濟の時期に席を譲つたといふ結論を引き出し得るように考へるならば、それは誤りである。――今日ヨーロッパにおいて、その國の食料および嗜好品の著しい量を外國から手に入れる必要に迫られ、一方その國の産業的生產活動が國民的需要をはるかに越えて増大し、絶えず餘分を供給して、外國の消費地域において販路を見出さなければならなくなつてゐる限りにおいて、財の供給における國民的自立を缺いてゐる幾多の國家があることは體かである。だが相互的に頼り合つてゐるところの、こゝにいふ工業國と原料國との並存、こゝにいふ「國際的分業」は、人類が世界經濟といふ名稱の下に從來の諸々の段階に對立させなければならぬような、新たな發展段階に攀ち上らんとしてゐる一つの徴候だと見做すべきではない。何故なら一方においては如何なる經濟段階と雖も、需要の充足についての十分な自立性を持續的に保持してきたものはなく、各段階はいづれも或る空隙を藏してゐて、何等かの方法によつて補充されねばならなかつたからであり、他方においては、かの謂はゆる世界經濟なるものは、少くとも今日にいたるまでは國民經濟のそれと本質的特徴において異なるところの何等の現象をも現はしてゐないし、またそゝにいふような現象が近き將來に出現することは極めて疑ふべきことであ

る。』*

ビュヒャー教授の年若かの同僚のゾンバルトは一層大膽であつて、彼れは頭から、吾々は世界經濟に入つたのでなく、それどころか反對にそれから遠ざかつてゐると説いてこゝ言つてゐる。「吾々はむしろ次ぎの如く主張する、文化民族は今日（その總經濟との關係において）そう大して商業關係によつて相互に聯結されてはゐない。個々の國民經濟は今日百年乃至五十年前に比して、世界市場にヨリ多く引き入れられるどころか、却つて引入れられ方が減少してゐる。しかし少くとも……國際的商業關係が近代國民經濟に對して有する重要性が比較的増大しつゝあると見做すのは間違つてゐる。その反對が本統である。」ゾンバルト教授は、「個々の國民經濟が絶えず完全化するミクロコスムス（即ち他から仕切られた小宇宙）となりつゝあること、そして國內市場が一切の實業にとつて、その重要性において益々世界市場を凌ぎつゝある」と信じてゐる。*

經濟生活の日々の觀察を盲滅法に無視するこゝいふ珍しい馬鹿話は、世界經濟を人類社會の新たな發展相と認めることを、學者先生が底意地悪く忌避してゐることを見事に曝露してゐる。――この忌避は吾々のよく覺えておくべきことであり、その隠れたる根元を究むべきである。――このように、すでに「舊時の諸經濟段階」、たとへばネブカドネザル王時代の經濟段階にあつても、人類の經濟生活における「或る空隙」がすでに交換によつて補充されてゐたのだから、今日

*「國民經濟の發生」第五版、第一四七頁。

**ゾンバルト著「十九世紀におけるドイツ國民經濟」第二版、一九〇九年、第三九九―四二〇頁。

の世界經濟などは全然意味をなさぬものであつて、依然として「國民經濟」のまゝである。これがビュヒャー教授の意見だ。

一見慧敏にして深刻なる經濟史的眼光を以て名聲を馳せてゐる學者の歴史的把握の粗笨さを如何にも鮮やかに示してゐるではないか！ 數千年の年月によつて分離されてゐる種々様々な文化階段および經濟段階の國際的取引を、彼れは惡趣味な圖式を作り上げるために否應なしに一つのものに捏ね上げてゐる。慥かに交換なしに如何なる社會形態も存在してゐないし、また存在しなかつた。最古の先史的發見物、「ノア洪水以前」の人類の住居となつてゐた粗末極まる洞窟や、太古の時代の最も原始的な墳墓や、すべてこれらのものは、それだけでも既に遠隔にある地方間に生産物の或る程度の交換が行はれてゐたことの證據である。交換は人類の文化史と同じ古さのものであつて、古くから絶えず文化史の同伴者であり、その最も有力な促進者であつた。そこでわが學者等は、こゝいふ一般的な極めて漠然たる認識の中に、諸々の經濟形態の時期および文化段階の一切の特殊性を没せしめてゐる。夜はすべての猫が鼠色であるように、こゝいふ大學教授式理論の薄ぼんやりの中では、霄壤の相違ある種々の形相の交換が同一のものとなるのである。一種獨特に編んだ舞踏用假面を折々他の部落の精巧な弓矢と交換するところの、ブラジルにおけるポトクーデン種族の原始的交換、東洋式宮廷の奢侈品が堆高く積んでゐるバビロンの美々しい雜貨店、東洋の亞麻布、ギリシヤの陶器、チロスからの紙類、シリヤおよび、アナトリアの奴隸などが、新月毎に、富める奴隸使用者に對して賣り鬻がれてゐたコリントの古代市場、ヨーロッパ

ペの封建宮廷や貴族邸のために贅澤品を供給したヴェニスの中世海上貿易、——そして東洋と西洋、南と北、すべての大洋と世界の隅々とを一つの網に織り込んで、乞食の日々のパンやマツチから富裕な好事家の貴重なる美術品にいたるまで、最も單純な田畑の産物から最も複雑な道具にいたるまで、すべての富の源なる労働者の手から戦争の殺人器にいたるまで、すべてのものを年から年中彼方へやつたり此方へやつたりしてゐるところの、今日の資本家的世界商業、——すべてこれらのはわが國民經濟學教授にとつては同一のものであつて、獨立的な經濟有機體における「或る空隙」の單なる「補充」なのだ！……

五十年以前にシュルツェ・フォン・デーリッチは、ドイツの労働者に向つてこう説いて聞かせた、今日何人でもまづ第一に自分自身のために入用な生産物を作つてゐるのだが、そのうち「自分自身のために使用しないもの」を「他人の生産物と交換するために」引渡してゐると。こういふ馬鹿げ切つた話に對するラサールの答へは今以て記憶されてゐる——

「シュルツェ君！ 世襲判事君！ 君は一體今日の社會的労働の本統の有様について、全く何等の概念をもつてゐないのか？ 君は一體ビターフェルドとデーリッチの出身ではないのか？ 君は一體そんな見解を抱いて、中世にでも生きてゐるつもりなのか？……君は今日の社會的労働は、各人が自分自身のためには不要であるものを生産してゐるといふ、まさにこの點を特徴としてゐることに気がつかないのか？ 大工業の發生以來そうでなければならぬことに気がつかないのか、この點に今日の労働の形式および本質があること、この點をしつかり掴むことなしには、

今日の經濟狀態の只の一側面も、今日の經濟現象の只の一つと雖も理解できないといふことに気がつかないのか？

それで君の説によるとウイステギールズドルフのレオノール・ライヘンハイム氏は、まづ最初に氏自身に入用な綿糸を生産する。次いで氏の妹が氏のために靴下や夜着用ジャケツを編み切れない餘分の綿糸を交換するといふ順序である。

ボルジヒ氏はまづ最初に氏の家族用のために機械を製造する。次いで餘つた機械を賣りに出す。葬具屋は最初に用心深く、自分の家族の死亡の場合を慮つて仕事をやる。その上で、家族がその度び度び死ぬものではないのだから、葬儀用品で餘分ができたのを交換する。

この町の電信局の所有主ウォルフ氏は、まづ第一に氏自身の通信用、娯樂用の電報を受け付ける。その上で、氏がそういふ電報に充分に堪能した後には尙ほ餘つたものを、取引所の狼連や新聞社の編輯局の人々に提供し、これに對して後者は同じく餘つた新聞種を贈る！……

要するに、人々はまづ最初に自己の需要のために生産し、その次に剩餘物を引渡してゐるといふこと、言ひかへれば主として自然經濟を営んでゐたといふ點が、以前の時代の社會における労働の、差別的な注意すべき性質である。そして今度は、各人は自分が全然必要としないものばかりを生産する、言ひかへれば、以前は主として利用價值だつたのが今日は各人が交換價值を生産してゐる點が、まさに近代社會における労働の差別的性質であり、特殊的性質である。そしてシュルツェ君、これが近代社會のように分業が普く發達してきてゐる社會における、勞

働制度の必然的の、そして益々増大しつゝあるところの形式および様式であることが、君には分らないのか？」

こゝでラサールがシュルツェに對して資本家的私經營を解明しようとしたことは、著しく發達せる資本主義國、たとへばイギリス、ドイツ、ベルギー、合衆國——爾餘の諸國はこれらの國々の足跡を次ぎ次ぎに辿りつゝある——といふような國々の經濟様式に、ヨリ一層日に日に適用されることである。そしてピターフェルド出身の進歩的世襲判事が労働者を迷はしたのは、今日ビュヒャーやゾンバルトといふような人間が、世界經濟の概念に對して意怙地な攻撃を行つてゐるのに比して、はるかに素朴であつて、これほど剥き出しではなかつた。

ドイツの大學教授といふものは、その受持區域における規帳面な御役人として秩序を愛好する。秩序を欲するために彼れは、世界を學問的圖式といふ抽出しの中にキチンと詰め込むのを常とする。そして自分の書物を書架の上に置くのと全く同じ調子に、各國を二つの書架の上に分けるのだ。即ち一方は工業品を製出し、その「餘分」を擁してゐる國々、他方は農耕および牧畜を營み、右の諸國に缺けてゐる原料品を産出する國々といふ風に。國際貿易はそこから生じ、そゝいふ事情に立脚してゐるといふのだ。

ドイツは世界の最高工業國の一つである。そこで右の圖式に従へば、ドイツはロシアの如き大農業國と最も旺んに交易を行つてゐなければなるまい。そうすると、貿易におけるドイツの最も重要な相手國が、他の兩工業國たる北米合衆國とイギリスであるといふ事實をどうしたらよいの

か？ 合衆國とドイツとの交易は一九一三年に二十四億マルクに上り、イギリスとは二十三億マルクに上つた。ロシアは漸やく第三番目にくるにすぎぬ。そして特に輸出の方を考へれば、取りも直さず世界の第一の工業國がドイツの工業にとつて最大の買客なのであつて、即ちドイツよりも年輸入額十四億マルクを以てイギリスが先頭を占め、他のすべての國をはるかに抜いてゐる。ところが植民地を含めての大英帝國となると、全體でドイツ總輸出額の五分の一を占めてゐるにすぎぬ。こゝにいふ不思議な現象に對して大學教授流の圖式は何と答へるだらうか？

一方に工業國家——他方に農業國家、これがビュヒャー教授やその大多數の同僚が振り廻してゐる世界經濟關係の骨組である。さてドイツは六〇年代には農業國家であつた。その頃は農業製產品の餘分を輸出し、そして緊要な工業品はイギリスの供給を受けざるを得なかつた。爾來そのドイツが工業國家となり、イギリスの當面の競争者となるに至つた。合衆國はドイツが六〇年代および八〇年代に經過してきたと同じことを、一層短期間に經過しつゝある。即ちこの國は今が恰度變化の最中にある。合衆國は現在なほロシア、カナダ、オーストラリア、ルーマニアと並んで世界最大の小麦國であつて、最近の統計（尤も一九〇〇年度）によれば、その國の總人口の三六%といふものは、依然として農業に従事してゐた。だがそれと同時に合衆國の工業は無比の迅速さを以て進歩して、今やイギリスおよびドイツの工業と並んで、危険な競争者と見られてゐる。そこで吾々は高貴なる經濟學教授諸君に對して、合衆國はビュヒャー教授の圖式の中で農業國家の項目の下に置くべきか、それとも工業國家の項目の下に置くべきかを決定することを、懸賞問

題として提出する。ロシアは徐々に右と同一の軌道を辿つてゐる、そして——時代おくれの國家形態の桎梏を除き去つた瞬間から——巨大なる人口と無盡藏の天然資源とを以て——今まで後れてゐたものを一足飛びに取り返し、おそらく今日吾々の眼前において、有力な工業國家としてドイツ、イギリス、合衆國を押しつけてその追従を許さぬようになるだらう。このように、世界は大學教授の智慧のような、硬直的な骨組ではなく、運動し、生活し、變化しつゝあるのだ。國際的交易がそこからのみ發生するといふ工業と農業との兩極的對立は、従つてそれ自身一個の流動的な要素なのであつて、近代文化世界の圈内から絶えず外周の方に廣く押し遣られてゐるのだ。ところが、それはそうとしてこの文化圏内の交易はどうなるのか？ ビュヒャーの理論に従へば、それは益々萎縮してゆかなければなるまい。ところが、そうはならず——何と不思議ではないか！——取りも直さず工業國の間に益々旺んになりつゝあるのだ。

わが近代經濟領域が過去二十五年間に吾々に示してゐる光景ほど教訓的なものはない。八〇年代以來ヨーロッパ並びにアメリカのすべての工業國および大國家において、保護關稅、即ち各「國民經濟」の相互的な人為的隔離が大騒ぎで行はれてゐるにも拘らず、その同じ期間における世界貿易の發達は停止しないばかりか、狂奔的に進んでゐる。この場合工業化の増進と世界貿易とが提携して進みつゝあることは、盲者と雖も、イギリス、ドイツ、合衆國の三主要國について一々指摘することができる。

石炭および鐵は近代工業の魂である。いま一八八五年から一九一〇年まで、採炭量は次ぎの如く

増大した。

イギリス	一六二百万より二六九百万噸
ドイツ	七四〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
合衆國	一〇一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
鐵鐵採取量は同じ期間に次ぎの如く増大した。	
イギリス	七・五百万より一〇・二百万噸
ドイツ	三・七〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
合衆國	四・一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

これと同時に外國貿易年額（輸出入）は一八八五年から一九一二年までに次ぎの如く増進した。

イギリス	一三〇億より二七四億マルク
ドイツ	六二〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
合衆國	五五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

しかるに最近における世界のすべての重要國の外國貿易（輸出入）總額を見れば、一九〇四年における一〇五〇億マルクから、一九一二年における一六五〇億マルクに増進した。即ち八年間において五七％の増大である！ 實にこれまでの全世界史にそれと似通つた例を見ないような、息もつかさないほどの速度の經濟的發達である！ 「死者が奔流に乗る。」資本主義「國民經濟」は、その存立能力の限度を減らし、その存在が許される猶豫期間を短縮しようとする焦慮してゐるよ

うに見える。しかるに工業國家と農業國家との間の「或る空隙」、兩者の間の遲鈍な杆格を主眼とする、かの大學教授の圖式は、これについて何と言つてゐるか？
 「しかも近代經濟生活には、こゝいふ謎はなほいくらも存在してゐる。
 交換された商品價値の總量、乃至はそのうちの大きな一般的種目を見るだけにとゞめず、ドイツの輸出入表をもつと綿密に觀察して、右の證明としてドイツ貿易の最重要商品種目を檢査して見よう。」

一九一三年におけるドイツの輸出入は次ぎの如くであつた。

輸 入		輸 出	
綿	花	各種機械類	百萬マルク
小	麥	製鐵品	六〇八
大	麥	石炭	六五二
銅	材	製綿品	四四六
牛	皮	羊毛品	二七一
鐵	鑛	紙および製紙品	二六三
石	炭	毛皮および毛皮製品	二二五
		棒鐵	二〇五
			百萬マルク

雞	卵	絹	物	二〇二
毛皮および毛皮製品	一八八	コークス	一四七	
チリ硝石	一七二	アニリンその他タール製品	一四二	
生	絲	衣類	一三二	
含硫護謨	一四七	製銅品	一三〇	
針葉樹製材	一三五	靴革	一一四	
綿	絲	製革品	一一四	
毛	絲	玩具	一〇三	
針葉樹生材	九九七	葉鐵	一〇二	
犢	皮	毛絲	九一	
黃	麻	鐵管	八四	
各種機械類	八〇	牛皮	八一	
仔羊皮、羊皮、山羊皮	七三	鐵線	七六	
製綿品	七二	軌條類	七三	
褐	炭	銑鐵	六五	
羊毛(梳れるもの)	六一	綿絲	六一	
羊毛品	四三	護謨製品	五七	

この場合二つの事實が表面的な觀察者の眼にも否應なしに入り込む。第一は、同一の商品種目が額こそ異なれ、幾様にも兩方の項目の中に現はれてゐるといふ事實である。ドイツは巨額の機械を外國に販賣してゐるが、同時に年に八千萬マルクといふ著しい額の機械を外國から仕入れてゐる。同様に石炭もドイツから輸出されてゐると同時に、外國の石炭もドイツに輸入されてゐる。同様のことが、木綿製品、毛絲、羊毛品や、同じく牛皮、毛皮や、なほその他右の表中に掲げられてゐない幾多の商品についても言へる。わが經濟學教授連にとつて、近代世界貿易の一切の秘密を、アラディンの魔燈のように闡明するはたらしきをするところの、工業と農業との赤裸々な對抗といふ見地からは、こゝにいふ不思議な二重性は全く理解すべからざるものであり、それどころか完く意味をなさぬことのように見える。どういふわけでこゝなるのか？ ドイツは機械について「自國の需要以上の餘分」を有してゐるのか、それとも逆に「或る空隙」を有してゐるのか？そして石炭や木綿品についてもそうなのか？そして牛皮についても？そしてその他幾百の事物についても！若しくは如何にして「國民經濟」が、同時に、且つ同一の生産物について、つねに不時の「餘分」と「或る空隙」とを示し得るのであらうか？これではアラディンの魔燈の光りも心もとない。右に擧げた事實は、次ぎの如く解して初めて説明され得る。即ちドイツと他の諸國との間に、複雑な、根柢的な經濟的聯絡が存立してをり、多岐に互つての、細目に互つての分業が成り立つてゐて、この分業の結果、同一生産物中の或る品種のものがドイツにおいて他國のために造られ、他の品種のものが他國においてドイツのために造られるようになり、毎日用品

物の往復が生じ、個々の國はヨリ大きな全一體の有機的一部分として現はれると解すべきである。

更らに各人は右の表を一見しただけで、次ぎの事實を知つて奇異の感に打たれるに相違ない。即ちこの場合輸出入は、自國經濟の「空隙」を以て説明されたり、その「餘分」を以て説明されたりするような、分離せる二つの現象として現はれるのでなく、むしろ相互に因果的連鎖を以て縛られてゐるといふ事實である。ドイツの巨額の木綿輸入は、言ふまでもなくドイツ國民の自家需要によつて測られるのでなく、むしろそれはドイツから木綿材料および衣類を大輸出すること豫じめ可能ならしむるべきものである。羊毛の輸入と羊毛製品の輸出との相互關係、同じく外國鐵の巨額の輸入と、あらゆる形における製鐵品の巨額の輸出との相互關係も右と同様であり、以下またこれと一々同じ關係を有してゐる。このようにドイツは輸出し得んがために輸入するのである。ドイツは人爲的な「或る空隙」をつくり出して、然る後にその空隙をそれと同じだけの「餘分」に化するわけである。さればドイツといふ「小宇宙」はすでに當初から、すべての標準において、一個のヨリ大きな全一體の一斷片、世界における一職場たる姿を取つてゐるのである。とはいへこの小宇宙を、その「絶えず完全化しつゝある自主性」の方面から、茲にもう少し細密に觀察して見よう。何等かの社會的または政治的破局カクストロフによつてドイツの「國民經濟」が現實に爾餘の世界から切斷され、自立したと考へよう。然らばその場合如何なる光景が現はれるだらうか？

手始めに日常のパンから考へて見よう。ドイツの農業は合衆國に比して二倍の收穫能力を示し

てゐる。農業の品質に關しては世界の農業國のうちでは第一位を占め、ベルギー、アイルランド、オランダの、ヨリ集約的な農業の次ぎに来るだけである。五十年前にはドイツは、當時はるかに進歩がおくられてゐた農業を以てして、なほヨーロッパの穀倉を成してゐて、自國のパンの剩餘を以て他の諸國を養つてゐた。今日はドイツの農耕は收穫能力が大であるにも拘はらず、自國の國民と自國の家畜とを養ふに足るところか、食糧の六分の一を外國から仕入れなければならぬ始末である。これを別な言葉でいへば、ドイツの「國民經濟」を世界から切り離してしまへば、人口の六分の一、即ち千百萬人のドイツ人が生活資料を奪はれるといふことになるのだ！

ドイツ國民は年々二億二千萬マルクのコーヒー、六千七百萬マルクのココア、八百萬マルクの茶、六千一百萬マルクの米を消費し、約千二百萬マルクの種々の香料と、一億三千四百萬マルクの外國煙草とを消費してゐる。これらの産物は、それがなければ今日どんな貧乏人でも生活をつづけてゆくことができないものであつて、日常の習慣、吾々の生計の中に入り込んでゐるものであるが、右のすべての産物はドイツの風土がそれに適しないために、ドイツにおいて全然産出されてゐない（乃至は莫栽培の場合の如く、極く少量しか製出されてゐない）。そこでドイツを持續的に世界から脱退させれば、今日の文化に相應してゐるドイツ國民の生計は崩れてしまふ。食糧の次ぎは被服である。今日民衆の大部分のシャツも、衣服全體も、専ら木綿で作られ、富裕な紳士階級の下着はリンネル、衣服は精製羊毛と絹で出来てゐる。木綿と絹とはドイツでは全然製出されず、極めて重要な織物材料である黄麻もそうであれば、最も精製された羊毛もそうで

あつて、後者は全世界においてイギリスが獨占權を握つてゐる。大麻と亞麻とはドイツでは非常に缺乏してゐる。そこでドイツを永く世界から切り離し、外國における原料および市場からドイツを引き離すときは、ドイツ國民のすべての層は最も必要な衣服を奪はれ、今日被服工業と共に百四十萬の成人、少年、婦人労働者を養つてゐるところのドイツ纖維工業は破滅してしまふ。

更らに觀察を進めよう。今日の大工業の脊樑は、謂はゆる重工業——機械工業と金屬工業とである。ところが重工業の脊樑はまた金屬鑛である。ドイツは年に（一九一三年）約千七百萬トンの銑鐵を消費する。然るに自國における銑鐵製出量は同じく千七百萬トンである。そこで一寸見ればドイツの「國民經濟」は、鐵に對する自國の需要をまづ自國で充足してゐると考へ得られるかも知れぬ。ところが銑鐵の製出に必要なのは鐵鑛であつて、この點からすると、ドイツ自國の採掘高は一億一千萬マルク強の價值を有する約二千七百萬トンに上るだけであつて、二億萬マルク以上に上る千二百萬トンの高價な鐵鑛——これがなければドイツの金屬工業は全然やつて行けない——は、スウェーデン、フランス、スペインから仕入れられてゐるのを見る。

他の金屬について殆んど同一の事情を認めることができる。ドイツにおける亞鉛の年消費量は二十二萬トンであるが、ドイツ自國の採掘量は二十七萬トンであつて、そのうち十萬トンは輸出されてゐるのだが、他方五萬トン以上の外國の亞鉛がドイツの需要を充たさなければならぬ状態にある。ところが必要な亞鉛鑛は矢張り一部分だけドイツで採掘されてゐるにすぎぬ。即ち五千萬マルクの價值を有する約五十萬トンであつて、四億マルクの價值を有する三十萬トンの高價な

亞鉛礦は外國から仕入れなければならぬ。鉛は九萬四千トンの製成品と、十二萬三千トンの鑛石とを輸入してゐる。最後に銅はどうかといへば、ドイツの生産は年消費量二十四萬一千トンのところ二十萬六千トンといふものを外國からの輸入に頼つてゐる。なほ錫は全然外國から仕入れてゐる。——そこでドイツを永く外國から切り離すならば、最も重要な金屬のこゝろいふ輸入の状態と、並びに外國におけるドイツ製鐵品と、ドイツ機械類との巨額の販賣とに鑑みて、六十六萬二千の労働者を従業させてゐるドイツの金屬工業と、百十三萬の男女労働者を養つてゐるドイツの機械工業との存立の基礎が消滅してしまふ。ところが金屬工業と機械工業とがそうだとすると、それにつれて、そゝいふ原料や道具に關聯を有する他の工業部門、並びにこの兩工業に原料や助成材料を供給してゐる部門、たとへば採炭業、それから最後にまたこれらの工業部門の莫大な労働者軍のために生活資料を生産してゐる部門、そゝいふ幾多の産業部門の全體が破滅しなければならぬ。

十六萬八千の労働者を擁し、全世界のために生産してゐるところの化學工業を考へて見よ。また製材工業を考へて見よ。今日四十五萬の労働者を従業せしめてゐるのだが、外國の材木および建築用材がなければ、大部分その經營を閉鎖しなければならぬ。製革工業を考へて見よ。外國の皮革がなく、外國における大きな販路がなければ、十一萬七千の労働者を推してのたれ死にするに相違ない。貴金屬の金銀を考へて見よ。これは貨幣材料を成し、その點において今日の全經濟生活の缺くべからざる土臺を成すものであるが、ドイツには全然と言つてよい位生産されてゐる。

ない。こゝろいふ有様をありありと眼の前に泛べて、さて、ドイツの「國民經濟」とは如何なるものであるかと問へ。言ひかへれば、ドイツが實際に且つ永續的に他の世界から切り離されて、自國の經濟を全然孤獨で營まなければならぬと假定すれば、ドイツの今日の經濟生活は、そしてこれと共にまた今日のドイツの全文化はどうなるだらうか？ 生産部門が次ぎ次ぎに破滅し、一は他を亡ぼし、業を失つた巨大なるプロレタリア大衆、全人口は必要缺くべからざる食料、嗜好品、衣服を奪はれ、商業はその貴金屬貨幣といふ土臺を奪はれる、そして全「國民經濟」は——廢物の山、破碎せる廢朽物！

ドイツ經濟生活における「或る空隙」とはこゝろいふものなのだ、そして大學教授式理論の薄青いエーテルの中に、いゝ氣になつて浮泛してゐる「絶えず完全化しつゝある小宇宙」なるものも、畢竟こゝろいふ代物なのだ。

しかし待て！ 一九一四年の世界戦争は、「國民經濟」といふ例題の實地の吟味ではなかつたか？ この戦争は猜疑的世界に對して、ドイツといふ「小宇宙」が、倔強な國家的組織とドイツ技術の能率のおかげで、世界交通から遮斷されてゐながらも能く生存に耐え、強壯であり健全であることを見事に示したではないか？ 國民の給養は外國の農業なしにも充分に間に合つたではないか、そして工業の齒車は外國からの供給がなくとも、外國での販賣がなくとも依然として活潑に動いてゐるではないか？

では事實をしらべて見よう。

第一に給養の點である。食糧はドイツの農業のみによつて供給されたのでは決してなかつた。幾百萬といふ成人男子人口は軍隊に屬してゐて、殆んど戦争の全期間中を通じて外國から養はれてゐた。即ちベルギー、北フランス、並びに部分的にはポーランドおよびリタウエンの諸國がそれである。このように、ドイツ國民の給養のためには、ドイツ自身の「國民經濟」の範圍が、ベルギーおよび北フランスの占領地帯の全面積に擴張され、戦争第二年にはロシア帝國の西部に擴張されたのであつて、これらの地帯はそれぞれの農産物を以て、ドイツの輸入杜絶を著しく補充してゐたに相違ない。これに對する補充的對照を成すものは、右の諸外國の占領地帯における土着人口の怖るべき缺乏を見たことであつて、これらの人口は——たとへばベルギーにおける如く——アメリカ農業の生産物の御慈悲によつて養はれてゐたのである。第二の補充を成したものは、ドイツにおいて、生活資料のすべてが一〇〇乃至二〇〇%騰起したこと、並びに國內人口の廣汎なる諸層の怖るべき營養不足であつた。

更らに工業の齒車の點である。外國の原料やその他の生産手段の輸入が、ドイツの工業によつて莫大な意義を有してゐることは吾々の學んだところであるが、そういふものなしに如何にして工業の齒車が運轉され得たらうか？ どうしてそんな奇蹟が起り得たらうか？ この謎は極めて簡単に、且つ何の不思議もなく解かれる。ドイツ工業が活動をつゞけることができたのは、必要缺くべからざる外國の原料を絶えず供給され得たといふ、たゞ一つの理由からであつて、し

かもこの原料を次ぎの三様の方法によつて仕入れてゐたのである。第一には、國內の貯藏から引き出したのであつて、ドイツは木綿、羊毛、銅等を種々の形で國內に貯藏してゐて、これを隠匿所から引き出して流通させさへすればよいようにしてゐた。第二には、これも矢張りベルギー、北フランス、部分的にはポーランドおよびリタウエンの諸外國において、軍事占領によつて貯藏物を押收して、自國の工業に利用したのである。第三には、外國からの間斷なき輸入であつて、これは中立國の仲介を通じて（並びにルクセンブルグ國から）戦争中にも中絶しなかつたものである。それにこういふ全「戰時經濟」並びにその圓滑なる進行にとつて、缺くべからざる前提だつたものは、ドイツの銀行に保管されてゐた外國の貴金屬の貯藏物だつたといふ事實を付け加へるなら、ドイツの商工業が世界から完全に遮斷されてゐたといふことも、ドイツの民衆の給養が國內の農業によつて充分に行はれてゐたといふことも、等しく一個の空談であつて、かくて世界戦争中におけるドイツの「小宇宙」の外見的自主はこの二つのこぢつけ話に基礎をおいたものであることが立證される。

最後にドイツ工業の販路である。これはドイツが世界のあらゆる地域において著しく確立してきたのであつたが、戦争の繼續中ドイツ國家自身の軍需がこれに代つたのである。別な言葉でいへば、最も重要な工業部門——金屬工業、皮革工業、化學工業が改造を蒙つて、専ら軍隊のための供給工業と化したのである。戦争の費用はドイツの納税者によつて支拂はれるのだから、このように工業が軍事工業に化したことは、ドイツの「國民經濟」がその生産物の大部分を外國に販

賣する代りに、これを戦争における間断なき絶滅の犠牲に捧げ、その結果生ずる損失は、公債制度を介して今後数十年間を通じてドイツ經濟の成果に負はせたことを意味するものであつた。右のすべての事柄を要約すれば、次ぎの點が明白である。即ち戦争中における「小宇宙」の驚くべき繁榮は、あらゆる點において一個の試験だつたことを示すものであつて、たゞこの人爲的建物がカードの家のように崩壊することなしに、果してこの「小宇宙」がどれだけの間維持され得るか、問題だつただけである。

今度はもう一つ、不思議な現象を一瞥しよう。ドイツの外國貿易を總額において觀察するとき、その輸入額が輸出額に比して著しく大きいことに氣がつく。即ち前者は一九一三年に百十六億マルク、後者は百九億マルクであつた。そしてこういふ關係はまづ右の年だけの例外のもではなく、ずつと永らくの年數以來、これを見ることが出来る。この事情は大ブリテンにあつても同一であつて、一九一三年には總貿易額において百三十億マルクを輸入し、百億マルクを輸出した。フランスにおいても、ベルギーにおいても、オランダにおいてもこれと事情を同じうしてゐる。どうしてこんな現象が可能なのであるか？ ビュヒャー教授は、お得意の「自國の需要の餘分」「或る空隙」の學説を以て、吾々にこの現象を説明してくれないだらうか？

種々の「國民經濟」相互間の經濟的關係が次ぎの一點に盡されるとすれば、——即ち教授が吾々に教へてくれるように、個々の「國民經濟」が、遠くすでにネブカドネザル時代に行はれてゐたように互ひに時々の「餘分」を投げ出し合ふだけのことであるとすれば、——言ひかへれば、

單純なる商品交換が、これらの「小宇宙」同志を引き離してゐるところの蒼穹に懸つてゐる唯一の架橋であるとすれば、——一國は自國の商品を輸出すると丁度同じ分量だけ、外國の商品を輸入し得るものであることは明らかである。しかも單純なる商品交換の場合には、貨幣は單なる媒介物なのだから、外國の商品は結局において自國の商品で支拂はれることになる。従つて一の「國民經濟」は、自國の「餘分」を輸出する以上に多くのものを、永續的に外國から輸入するといふような手品を如何にして行ふことができるのか？ こういへばおそらく教授は、嘲笑的な態度で吾々に大聲で言つて聞かせるだらう——その解決は世界で最も造作もない解決だ、輸入國は輸出に對する輸入の餘分を正貨で清算しさへすればよいのだと。だが失禮ながら、外國貿易の深淵の中に、年から年中著しい額の正貨を、それも二度と御目にかゝれないのを投げ込むといふような贅澤な眞似は、高々自國に豊富な金銀鑛を有する國のみが能くすることであつて、ドイツにしろフランスにしろ、ベルギーにしろオランダにしろ、そらいふ眞似はできるものではない。その上に吾々は——不思議なことではないか！——次ぎの驚くべき事實を見る。即ちドイツは輸出する以上の額の商品を絶えず輸入してゐるだけでなく、輸出する以上の貨幣も輸入してゐるのだ！たとへば一九一三年にはドイツの金銀輸入額は四億四千三百三十萬マルクに上り、輸出額は一億二百八十萬マルクであつた。そして永年の間殆んど同一の關係を示してきてゐる。この謎に對してビュヒャー教授は、その「餘分」論と「空隙」論とを以て何と言ふだらうか？ 教授の魔燈の光りでは心もとない。全くその通りだ。かくて吾々は世界貿易のこういふ謎めいた徴候の背後には、

おそらく個々の「國民經濟」の間に、單純な商品交換とは全然別種の經濟的關係が存立してゐなければならぬといふことに氣が付き始めるのである。自國の生産物を他國に與へるよりも以上に、絶えず他國から生産物を取るといふようなことは、そういふ他國に對して何か經濟上の要求權利を有してゐる國のみが能くすることであらう。即ち等一のものゝ間の交換とは全然異つた權利である。そしてこういふ要求權利と國々の間の隸屬關係とは、たとへ大學教授式理論はそれについて何等知るところがないとしても、一步一步事實の上に成立してゐるのだ。こういふ隸屬關係は、その最も單純な形においては、謂ゆる母國とその植民地との關係である。大ブリテンはその最大の植民地——英領インドから年々十億マルク以上の買物を種々の形で取り立てゝゐる。それに對して吾々はインドの商品輸出額は年に大ブリテンの輸出額を十二億マルクだけ超過してゐるのを見る。この「餘分」こそは、インドに對するイギリス資本主義の植民地的搾取の經濟的表現に外ならぬものであつて——この場合商品が直接に大ブリテンのために向けられてゐると考へても、乃至はインドが毎年あらゆる國家に對して十二億マルクの商品を、イギリスの搾取者に買物を納めるといふ特別の目的のために販賣しなければならぬとしても、一向構はない。*

だがこのほかに、政治的な權力支配によつて樹立されてゐるのでない經濟的隸屬關係がある。ロシアは年に輸入するよりも十億マルクだけ多くの商品を輸出してゐる。こういふ旺んな商品の

* インドにおける背景——農民共同體の「國民經濟」は破滅しつゝ、ある工業……輸出人の數字が暗黙のうちにも障にこれを語つてゐる。

潮流が毎年ロシア帝國から流れ出てゐるのは、自國の國民經濟の需要以上に土地生産物が大「氾濫」を起してゐるためだらうか？ ところが肝心の穀物をこういふ具合に輸出させられてゐるロシア農夫は、周知の如く營養不良の壞血病にかゝつてゐて、且つ屢々樹皮を澤山取り交ぜたパンを喰つてゐるのだ。農夫のパン粉をこのように大量に輸出することは、取りも直さず國內における一定目的に應じた財政租稅制度の媒介の下に、ロシア國家が外債に對する義務を履行するため必要缺くべからざることなのである。ロシアの國家機關の費用は、クリミア戰爭における大敗退以來、そして農村改革によつてロシアが近代化されて以來、西ヨーロッパ——しかも主としてフランスからの借入資本によつて大部分を支辨されてゐる。そこでフランスよりの借入金に利子を支拂ひ得るがためには、ロシアは毎年大量の小麥、木材、亞麻、大麻、牛、鳥類を、イギリス、ドイツ、オランダに賣らなければならぬ。かくてロシアの輸出大超過は、債權者に對する債務者の年貢を現はしてゐるのである。この事情はフランス側における輸入の大超過に合致するものであつて、それは借入資本が蓄藏するところの利子を現はしてゐるに外ならぬものである。だがこの經濟的聯結の連鎖は、ロシア國內に一層はびこつてゐる。フランスよりの借入資本は數十年以來主として二つの目的に使はれてゐる。國家擔保による鐵道建設と軍備とがそれである。この兩目的に應ずるために、ロシアでは七〇年代以來——高率保護關稅制度の援護の下に——有力な大工業が發生してゐる。老資本主義國フランスからの借入資本は、ロシアに若き資本主義を成長させたのであるが、このロシアの資本主義の方ではまた、技術の優秀な工業國イギリスおよびドイツ

から機械類その他生産手段を著しく輸入することによつて保護され、補充されることか必要だつたのである。このようにしてロシア、フランス、ドイツ、イギリスの間には経済的聯絡の紐帯が結ばれてゐるのであつて、そのうちで商品交換なんかは最後の發言權を有するだけのものにすぎぬ。しかし経済的聯絡の多種多様なることは、右の事柄だけで盡されるものではない。トルコや支那のような國は、大學教授的圖式の上に新たな謎を課するものである。これらの國はロシアとは反對に、そしてドイツやフランスと似通つて、非常な大輸入額を有してゐて、多くの年において輸出額の殆んど二倍に上つてゐる。どうしてトルコや支那が、自國の「國民經濟」の「空隙」をこんなに豊富に充填するやうな贅澤な眞似ができるのだらうか、これらの國の國民經濟はそれに應じた「餘分」を交附する能力はないのだ。多分この半月の國や辨髮の國は西ヨーロッパ諸強國から、キリスト教的隣人の愛を以て一億マルクといふ巨額の贈物を、年から年中幾多の有用な商品の形で受けてゐるのだらうか？ だがトルコにしろ、支那にしろ、首が廻らぬほどヨーロッパの高利貸の爪牙にかゝつて、イギリス、ドイツ、フランスの銀行に巨額の貢物を利子として支拂はなければならぬことは、小兒と雖も知つてゐる。そこでロシアの例に従へば、トルコにしろ、支那にしろ、西ヨーロッパの慈善家に利子を支拂ひ得るがためには、事實とは逆に、自國の生産物の輸出超過を示してゐなければならぬ筈である。しかしながらトルコにしろ、支那にしろ、謂はゆる「國民經濟」はロシアのそれとは根本的に異つてゐる。なるほど外國からの借入金は、矢張り主として鐵道敷設や築港や軍備に使用されてゐる。だがトルコは今日まで皆無といつて差

支へない位何等自國の工業を所有してゐない。また原始的耕耘と十分一税とを伴つた中世的農民的自然經濟の中から、工業を突然妖術を以て現出させることはできぬ。こゝろいふ事情は形式は異つても支那においても大體同一である。そのために單に工業製造品に對する國民の總體的必要のみならず、交通敷設や陸海軍の軍備に必要な一切の助成材料をも、既成品のまま西ヨーロッパから仕入れて、ヨーロッパの企業家、技術家、専門家によつて諸々方々において建設されなければならぬ。それどころか借入金は屢々こゝろいふ材料の供給と豫じめ結びつけられてゐるのだ。たとへば支那はスコルダ製作所や、クルップ工場に一定額の軍需品を注文するといふ條件の下にのみ、ドイツやオーストリアの銀行資本から借入金を獲得してゐるのである。また外の借入金は當初から鐵道敷設のための租借と結びつけられてゐる。かくして大多數の場合ヨーロッパ資本は、初めから商品（軍需品）として、または機械、鐵等の現物形態を取つた工業資本として、トルコや支那に移動するのである。この後者の方の商品は、交換のために流れ込むのでなく、利潤を生み出すために流れ込むのである。そしてこの資本に對する利子は、爾餘の諸々の利潤と同じくヨーロッパの財政的統制の下にある租税制度の力をかりて、トルコや支那の農民から強奪するのである。このようにトルコや支那の優勢なる輸入と、それに應ずるヨーロッパの輸出との簡単な數字の背後には、富める大資本主義西ヨーロッパとこの西ヨーロッパによつて吸ひ取られるところの貧しく且つ遅れたる東洋との、一種獨特の關係が潜んでゐるのであつて、後者は前者によつて、最も近代的な、最も大規模な交通機關や軍事機關を供給され——同時に舊來の農民的國民經濟の急激な

る破滅を齎せられるのである。

もう一つ別な事情を合衆國が示してゐる。合衆國においても矢張りロシアと同じく、輸出が著しく輸入を凌駕してゐる——後者は一九一三年には七十四億マルク、前者が百二億マルクに上つた——が、こゝにいふ現象が生ずる原因はロシアの場合とは根本的に異つてゐる。合衆國もまた巨額のヨーロッパ資本を呑み込んでゐるには違ひない。夙に十九世紀初め以來、ロンドン取引所はアメリカの巨額の公債證書や株券を吸収してをり、アメリカの企業並びに證券に對する投機は、六〇年代にいたるまでは、つねにイギリスの大規模な工業恐慌および商業恐慌の勃發が近付きつゝあることを體溫計のように示した。爾來合衆國に對してイギリス資本の流入は停止してきてはゐない。この資本は部分的には都市および私社會への貸付資本として合衆國に移動するが、大多數の場合は工業資本として移動するのであつて、ロンドン取引所にアメリカの鐵道株や工業株が買はれる場合たると、イギリスの工業カルテルが合衆國において、高い關稅壁を避けるために自己の子會社を設立する場合たると、乃至は株券の買上げによつて、世界市場における競争を無くするために、合衆國の企業をわがものにする場合たるとを問はない。しかもなほ合衆國は今日著しく發達せる、益々急激に進歩しつゝある大工業を有してゐて、ヨーロッパから絶えず貨幣資本がこれに流入しつゝある一方には、この大工業自身がすでに工業資本——機械、石炭——を、カナダ、メキシコ、その他中央アメリカおよび南アメリカ諸國に向けて輸出してゐて、その程度は次第に高まりつゝある。こゝにいふ具合にして合衆國は老資本主義諸國に對する木綿、銅、小麥、

木材、石油等の天産物の巨額の輸出を、工業化が始まりつゝある若き諸國に對する工業生産物の輸出と結合してゐるのである。かくて合衆國の輸出大超過には、資本を受入れる農業國から資本を輸出する工業國へ移りゆく獨特の過渡的階段が反映し、老資本主義ヨーロッパと、後くれたる若きアメリカ大陸との橋渡したる役割が反映してゐるのである。

舊來の工業國から若き工業國への資本のこの大移出と、それに應じてこの資本から引き出される所得——それは若き國から貢物として年々老いたる國に逆流してゆく——の逆移入とを、全體として概觀するときは、茲に主として三つの有力な流れが現はれる。イギリスは一九〇六年の見積りによれば、當時までに自國植民地および外國に四百五十億マルクを放下してゐて、そのうちから二十八億マルクの年所得を利子として引き出してゐた。フランスの對外資本は同じ年に、少くとも十三億マルクの年所得を伴ふ三百二十億マルクに上つてゐた。最後にドイツは十年以前にすでに二百六十億マルクを外國に投資してゐて、これは毎年約十二億四千萬マルクをドイツにもたらしてゐた。爾來この投資も所得も急速に増大してゐる。ところがこれらの大きな主要潮流は末流において、ヨリ細い支流に分れてゐる。合衆國が資本主義をアメリカ大陸の上に擴張してゐるように、矢張りロシアも——まだ全然フランスの資本、イギリスおよびドイツの工業によつて養はれてはゐるが——すでに借入資本や工業品を、そのアジア的奥地たる支那、ベルシヤ、中央アジアに移轉してゐる。また支那その他における鐵道敷設に參與してゐる。かくて吾々は國際貿易の無味乾燥な象形文字の背後に、單に大學教授の智慧にとつてのみ存在

してゐるにすぎぬ單純なる商品交換とは無關係な、經濟的鏈れ合ひの一個の網を發見するのである。

工業生産國と原料生産國とに區別して、その木製の棧橋の上に立つて國際的の交易を鼓舞する博學なビュヒャー先生のやり方は、それ自身大學教授的圖式のお粗末な産物に外ならぬことを吾々は發見する。香料や木綿材料や機械は一樣に工業品である。だがフランスから香料が輸出されることは、フランスが、全世界における富めるブルジョアジの微小なる一團のための贅澤品生産國たることを示すものに外ならぬ。日本から木綿材料が輸出されることは、日本が全極東における西ヨーロッパ諸國との競争のために傳來の農民的並びに手工業的の生産を覆へして、商品貿易を以てこれに代へてゐることを證明するものである。しかるにイギリス、ドイツ、合衆國から機械が輸出されることは、この三國が大工業そのものを世界の各地方に向つて移植してゐることを示すものである。

それ故に吾々は、今日、ネブカドネザル王時代や、古代および中世の如何なる歴史的時期にも知られてゐなかつたところの或る「商品」が輸出され、輸入されてゐることを發見する。その商品とは即ち資本である。そしてこの商品は外國の「國民經濟」の「或る空隙」を充たす役をつとめるのではなく、反對に空隙をつくり出し、昔ながらの「國民經濟」の壁の中に刺れ目をつくり、その中に侵入し、爆裂火薬が作用するように早晩さういふ「國民經濟」を廢墟に化する役をつとめるのである。「商品」たる資本と共に、なほ一層奇妙な「商品」が、二三の舊國から全世界に向

つて、益々大量に運び出されてゐる。既に近代的交通機關と全土着民族の剽滅、貨幣經濟と農民の負債、富と貧、プロレタリアートと搾取、生存の不安と恐慌、無秩序と××とがそれである。ヨーロッパの諸々の「國民經濟」は、地球上のすべての國と民族とを、諸々の資本家的搾取の巨網の中に絞め殺すために魔手をひろげてゐるのだ。

四

それにも拘らずビュヒャー教授は世界經濟といふものを信ずることができないだらうか？ できないのだ。何故ならこの學者は世界のあらゆる地方を注意深く見渡して、何物をも發見せずして次ぎの如く聲明してゐる。曰く、予は國民經濟と「本質的特徴において異つてゐる」ところの「特殊の現象」を何等認めないと言はざるを得ない。そして「かゝるものが近き將來において現はれることは極めて疑はしい」と。

さて今度は貿易と貿易統計とを一掃して、直接に生活に、近代的經濟關係の歴史に、眼を轉じよう。色々と込み入つた一大光景の中から只一つ小さな断片を取り上げて見る。

一七六八年にはイギリスのノッチンガムにおいて、アークライトによつて機械裝置を有する最初の紡績場が設立され、一七八五年にはカートライトが力織機を説明してゐる。イギリスにおいてその直接の結果は、手織業の絶滅と機械織の急速な普及である。十九世紀初にはイギリスには、或る見積りに従へば、約百萬の手織工が存在してゐた。それが今や御拂ひ箱になつて、一八六〇

年には聯合王國內に僅か數千の手織工があるだけであつて、これに對して木綿業に五十萬以上の工場労働者が存在してゐた。一八六三年には、首相グラッドストーンは議會において、「富と力との狂熱的増進」について語り、この富と力とはイギリスのブルジョア階級の間に漲つてゐるのだが、労働階級はその分け前に何等與つてゐないと述べてゐる。

イギリスの木綿工業は原料を北アメリカから仕入れてゐる。ランカシャー地方における工場の増加は、合衆國南部における綿花の巨大な栽培の結果した。砂糖、米、苺栽培の場合と全く同じく、綿花栽培における殺人的労働のための低廉な労働力として、アフリカから黒人が輸入された。アフリカでは奴隷貿易が異常に活氣つき、「黒い大陸」の奥地において全黒人種が狩り立てられ、酋長によつて物品と交換され、アメリカに賣られるためにはるばる水陸を越えて輸送された。堂々たる黒色の民族移動が起つた。十八世紀末の一七九〇年には或る統計によればアメリカに六十九萬七千の黒人しかなく、一八六一年には四百萬に上つた。

合衆國南部における奴隷賣買と奴隷労働との途方もない蔓延は、こういふ非キリスト教的暴行に對する北部諸州の十字軍を喚び起した。一八二五—一八六〇年におけるイギリス資本の大量的輸入は、合衆國北部に、活潑な鐵道敷設、土着工業の端緒を喚び起し、それに伴つて、搾取の近代的改良たる資本家的賃銀奴隷制度のために有頂天になつてゐるブルジョア階級を産んだ。自己の奴隷を七年間以内に死なすように酷使することのできた南部栽培地所有者の、作り話のような商賣繁昌は、北部の敬虔なる清教徒にとつては、氣候の關係でそういふ天國を北部諸州に建設す

ることができなかつたために、一層許すべからざる暴行として映じた。かくして北部諸州の催促に基いて、一八六一年に奴隷制度が合衆國全域に亘つて、あらゆる形において法律を以て廢止された。感情の底の底まで傷けられた南部の栽培者は、この打撃に對して公然たる叛亂を以て答へた。南部諸州は合衆國よりの分離を宣し、かくて大内亂が勃發した。

この内亂の直接の結果は、南部諸州の荒廢と經濟的破滅とであつた。生産と商業とが衰へ、棉花の輸出は杜絶した。かくてイギリスの工業はその原料を奪はれてしまひ、一八六三年にはイギリスに怖るべき恐慌、謂はゆる「棉花飢饉」が勃發した。ランカシャー地方では二十五萬の労働者が全然仕事を失ひ、十六萬六千は部分的に従業してゐるだけであつて、十二萬の労働者のみが完全に就業してゐたが、それでもその賃銀は、一割乃至二割引下げられたのである。この地方の住民の間に無限の窮迫がはびこり、五萬の労働者は請願書を以て、イギリス議會に對して、家族を携へてイギリスから移住するために國家機關からの許可を要求した。始まりつゝある資本主義的飛躍に必要な労働力に不足してゐるオーストラリア諸州は——土着の住民はヨーロッパよりの移民のために、僅かを残して滅ぼされてしまつた後なので——イギリスから失業プロレタリアを受け容れることを既に聲明してゐたのである。ところがイギリスの工場主は、やがて期待されてゐる産業の飛躍に際して再び使用し得るところの、彼れ等の「生ける機械」の移出に對して猛烈に反對した。かくて労働者は移住の手段を拒否され、恐慌の怖しさは彼れ等によつて剩すところなく味ひ盡されたのである。

イギリスの工業はアメリカの資源が駄目になつたので、別のところで原料を調達しようとして、東インドに視線を向けた。綿花栽培場がこゝに熱病のよりに設立され、數千年以來住民の日々の食糧を供給し、住民の生存の土臺を成してゐる農業は、廣汎な範圍に亘つて投機者の儲け仕事に屈しなければならなかつた。こゝいふ風に稲作が押しつけられるに伴つて、數年後に異常な物價騰貴と飢饉とが起り、一八六六年にはベンガールの北、オリッサといふ一地方だけでも百萬以上の人間が餓死に襲はれた。

第二の實驗はエヂプトにおいて行はれた。南北戦争の景氣を利用して、エヂプト副王イスメル・パシャは大急ぎで綿花栽培場を設けた。この國の農業の所有關係の上にすばらしい革命が起つた。農民地は廣い範圍に亘つて強奪され、王領と宣せられ、大規模の栽培地に變ぜられた。數千の舊役農は副王のために堤防を築き、運河を鑿り、開墾するために、鞭打たれながら栽培地に驅り立てられた。だが副王は借金で最新式の蒸氣鋤と繰綿設備をイギリスから仕入れるために、ますますイギリスおよびフランスの銀行家に負債をつくつた。しかしこの大規模な投機も、南北戦争媾和後合衆國において綿花の價格が數日のうちに再び四分の一に下落したので、早くも一年後に破産を以て終りを告ぐるに至つた。エヂプトに對してこの綿花時代がもたらした成果は、農業經濟の零落の促進、財政の破滅の促進、そして結局にはイギリス軍隊によるエヂプト占領の促進であつた。

そうする間に木綿工業は新たな占領を行つた。一八五五年のクリミア戦争はロシアからの大麻

および亞麻の輸出をとどめ、これが西ヨーロッパにおいてリンネル製造業における猛烈な恐慌を誘致した。その際木綿が多くリンネルの地位を奪ひ、リンネル生産を犠牲にして木綿工業が益々ひろがつた。同時にロシアではクリミア戦争における舊制度の崩壊以來、政治的變革が行はれ、農奴制度の廢止、幾多の自由主義的改革、自由貿易、急速なる鐵道敷設が行はれた。それに伴つて工業製品のために新たな大販路がこの大帝國の内部に開かれ、イギリスの木綿工業が第一にロシアの市場に乗り込んだ。同じく六〇年代には幾多の血腥き戦争の後、支那がイギリスの貿易のために門戸を開かされた。イギリスは世界市場を支配し、木綿工業はその輸出中の半分を占めた。六〇年代および七〇年代の時期は、イギリス資本家の最も目ざましい商賣の時代であり、同時にこのイギリス資本家が、勞働者に對する小讓歩によつて「人手」と「工業平和」とを確保するために最も骨折つた時代である。この時期にイギリスの勞働組合は、木綿紡績工と木綿織工とを先頭にして、最も著しい成功を勝ち得たのであるが、同時にそれはチャーチスト運動の革命的傳統と、イギリス・プロレタリアの中におけるオウエン思想とが究極的に死滅して、プロレタリアが保守的トレード・ユニオンに癡痺してしまつた時代である。

だが間もなく場面が一變する。イギリスが木綿製造品を輸出してゐたヨーロッパ大陸に、いたるところに土着の木綿工業が次第に發生してきた。すでに一八四四年において、シユレジアおよびボヘミアにおける手工業の飢饉暴動は、三月革命の最初の前兆たる役割をつとめた。イギリス自身の植民地にも土着の工業が發生した。ボンベイの木綿工場は間もなくイギリスの工場と競争

を行ふようになり、八〇年代には世界市場におけるイギリスの獨占を打破するに與つて力があつた。

最後にロシアでは六〇年代における自國木綿製造業の飛躍が、大工業と保護關稅との紀元を開いた。高い關稅壁を避けるために、サクソニーやフォークトランドから全工場が工場員諸共にロシア領ポーランドに移され、そこでは新工場中心地たるロツヅ、ツギールツがカリフォルニア式の急速度を以て發達した。八〇年代には木綿工業地域たるモスコイ・ウラヂミールにおける勞働不安が、ツァール帝國の最初の勞働者保護法を強要した。一八九六年にはベテルスブルグの木綿工場の六萬の勞働者が、ロシアにおける最初の大衆罷業を起した。そして九年後の一九〇五年には、木綿工業の第三番目の中心地たるロツヅにおいて、十萬の勞働者がその中のドイツ人勞働者を先頭にして、ロシア大革命の最初の堡砦を打ち樹てた。

こゝに吾々は以上の簡単な記述の中に近代的一産業部門の百四十年の歴史を見る。それは世界の五大州を悉く席卷し、數百萬の人間の生命を抛り投げ、或は恐慌となり、或は飢饉となつて勃發し、或ひは戰爭となり、或は革命となつて炎上し、途上いたるところに富の黄金山と貧窮の深淵とを残してゆく——それは血に染まつた人間勞働の大規模な汗の潮流である。

それは生命の痙攣であり、諸民族の内臟まで達するところの傳播作用であるが、國際貿易統計の無味乾燥な數字の中には、その微光だも認めることのできぬものである。近代工業がイギリスに入り込んで以來一世紀半のうちに、全人類の苦痛と震動との下に資本主義世界經濟が初めて形

成されるに至つた。それは生産部門を次ぎ次ぎに捉へ、一國から他國へと次ぎ次ぎにわが物としてしまつた。この世界經濟は蒸氣と電氣とを以て、火と劍とを以て、地球の如何なる遠隔の隅々にも侵入し、あらゆる萬里の長城を打ち破り、世界的恐慌の紀元によつて、共通の週期的破局カクストロフによつて、今日の人類の經濟的相互依存を祝福してきた。イタリアのプロレタリアが、國內の窮迫から祖國の資本のために逐ひ出されて、アルゼンチンやカナダに向つて移住すれば、そこにはすでに合衆國やイギリスから輸入された資本の完全な新たな羈絆を見る。そしてドイツのプロレタリアが國內に留まつて、實直に暮らさうとすれば、その安危は一から十まで世界全體における生産および貿易の進み具合如何に係つてゐる。仕事が見付かるかどうか、その賃銀が家族を満足させるに足るかどうか、一週間の數日は否應なしの閑暇を強制されるか、それとも晝夜時間外勞働の地獄を強制されるか——それはすべて合衆國における綿花の收穫、ロシアにおける小麦の收穫、アフリカにおける新金礦またはダイヤモンドの發見、ブラジルにおける革命騒ぎ、五大州における關稅戰、外交的紛争、戰爭等に依存して、間斷なく、あつちになつたり、こつちになつたりしてゐる。すべての民族を合して一個の大きな全一體たらしめてゐるところの、日に日に緊密に密着しつゝあるこの經濟的基礎と、諸民族を境界標や關稅壁や軍國主義によつて人爲的にそれぞれ他人行儀の敵對的な部分に分裂させようと努めてゐるところの、國家といふ政治的上部構造との間に、段々大きくなつてゆく矛盾ほど、今日驚くべきものはなく、これ以上に今日の社會的および經濟的生活の總體的成態にとつて重大な意義を有するものはない。

しかもビュヒャーやゾンバルトやその同僚なんかにとつては、すべてこゝろいふものは存在しないのだ！ 彼れ等にとつては「絶えず完全化しつゝある小宇宙」だけが存在してゐるのだ！ 彼れ等は國民經濟と「本質的特徴において異つてゐる」ところの「特殊の現象」を何處にも認めないのだ！ これは解し難き謎ではないか？ 電光の如く煌々たる光力を以て如何なる觀察者の感官にも突入するところの現象に對して、學問の公式代表者がこのように盲目であるといふことは、國民經濟學の領域以外の何等かの知識の領域においては考へ得らるゝことだらうか？ 自然科学においては、こゝに名聲ある一人の學者があつて、地球が太陽の周圍を廻るのでなく、太陽がすべての遊星を伴つて、地球を中心として廻轉するといふ意見を今日公然と主張せんと欲し、この自分の意見と「本質的特徴において」矛盾する「現象を何等知らない」と主張するとすれば、こゝろいふ學者は如何なる場合でも教養ある全社會の哄笑を買ひ、結局近親の憂慮から無理やりにその精神状態を檢查されるに至るのは必定である。たしかに四百年以前にはこゝろいふ意見は何等罰せられずに普及したばかりか、こゝろいふ意見の間違つてゐることを公然證明しようとして企てる者があれば、誰れでも火刑に處せられる危険があつた。當時は、地球が星辰の運行における宇宙の中心だなどといふ間違つた見解を維持することは、カトリック教會の最も緊急の利益であつて、地球の宇宙君臨說に對する攻撃は、すべて精神上における教會の強制支配と、俗世界における教會の十分一税とに對する攻撃を意味してゐたのである。このように當時は自然科学が支配的社會制度中の觸れてはならぬ神聖點であり、自然科学的欺瞞が奴隸化に缺くべからざる道具であつた。

資本の支配下にある今日は、社會制度中の觸れてはならぬ點は、蒼穹における地球の使命に對する信仰ではなく、地上におけるブルジョア國家の使命に對する信仰である。そして今や世界的經濟の巨浪に乗じて、すでに怖るべき禍が奔騰し、膨脹しつゝあるために、そしてまた大暴風がブルジョア國家の「小宇宙」を木葉のように大地から掃蕩せんとして迫りつゝあるために、資本支配の學問的「門衛」は、「國民國家」といふ彼れ等の牙城の門前に馳せ參じて、これを死守しようとしてゐるのだ。今日の國民經濟學の最初の言葉、その基本概念は、ブルジョアジの利益を圖る學問的欺瞞である。

五

國民經濟學は屢々吾々に對して「人間の經濟關係に關する學」であるといふ風に、簡單に定義されてゐる。こゝろいふ方式を與へる人間は、問題を不明確なものに一般化し、「人間」の經濟一般を云爲することによつて、世界經濟における「國民經濟」といふ暗礁を廻航したものと信じてゐるのだ。しかしながらこゝろいふ具合に薄青いろに暈かすことによつて、事柄は明瞭にならないばかりか、おそらくは一層こづかるばかりである。けだしそうなれば次ぎの如き疑問が生ずるからである。「人間」の經濟的關係、從つてあらゆる時代とあらゆる事情とを問はず、すべての人間の經濟關係に關する特殊科學は、果して必要であるか否か、そして何のために必要なのであるか？

任意の經濟關係の何等かの例、できるだけ簡單にして見易い例を選び出さう。まづ吾々は今日の世界經濟がまだ成立せず、商品交易は漸やく都市に榮えてゐるだけで、田舎には自然經濟が、即ち自家の需要のための生産が、大莊園にも小農民地にも支配してゐた時代に身を置くとしよう。たとへば前世紀の五〇年代にデューガルト・スチュワートの記してゐるスコットランド事情を例に取らう。「統計によれば高スコットランドの若干部分においては、多くの牧夫および小屋棲み農夫は、その妻子と共に、自分で鞣した革で自ら造つた靴を穿ち、材料を自分で羊から剪つたり、自分で栽培した亞麻で作つたりして、自分以外には誰れの手にもかゝらない衣服を着てゐた。衣服の仕立て上げには、大針、縫針、指抜および機織りに使用される鐵製品の極少部分を除いては、殆んどこれといふ品は購はれなかつた。染料は婦人自身の手で、薔木、灌木および草類から採取されてゐた。」*

または比較的短かい時代前、即ち七〇年代末のロシアを例に取らう。そこでは農民經濟が多く次ぎの如くに行はれてゐた。

「彼れ等（スモレンスク縣のウヤズマ地方の農民）が耕やしてゐる土地は、彼れ等に衣食を供給し、彼れ等の生存に必要な殆んどすべてのものを供給する——パン、馬鈴薯、牛乳、肉、卵、リンネル、布、羊皮、それから暖い着物のための羊毛……錢を出して買ふのは長靴に、それから

*カール・マルクス著『資本論』第一巻、第四版、第四五一頁に引用するところによる。

若干の細々した飾身具——革帶、頭巾、手帛といふようなもの、それから若干の必要家具類——陶器、木器、火祀、釜といふようなものだけである。」*

今日でもこゝろいふ農家はボスニヤおよびヘルツェゴビナ、セルビア、ダルマチアに存在してゐる。そこで高地スコットランドやロシア、ボスニヤやセルビアのこゝろいふ自家經濟を行つてゐる農民に對して、「經濟目的」、「富の發生と分配」といふような、國民經濟學の大學教授式常套質問を提起しようとするなら、この農民は喫驚仰天するに相違ない。何のために、何の目的で俺と俺の家族とが働くか、それを學者らしく言ひ現はすなら、如何なる「動機」が俺を「經濟」に向はせるかといふのか？ 農民は叫ぶであらう、吾々はとにかく生きなければならぬのだ、そして我々の鳩が吾々の口の中に飛び込むものではない。働かなければ餓死するだらう。だから吾々はどうか暮してゆくために、腹一杯食べて、サッパリしたものを着て、家らしいものに住むために働くのだ。何を吾々が生産するか、「如何なる方向」を吾々の勞働に與へるかといふのか？ これもまた分り切つた質問だ。吾々が使ふもの、それぞれ百姓の一家が生活に必要なものを生産するのだ。吾々は小麥や裸麥、燕麥や大麥を作り、馬鈴薯を植ゑ、それからまた牛や羊、鶏や家鴨を飼ふ。冬には紡ぐのだが、これは女の仕事で、吾々男は斧や鋸や槌で家事に必要なものを細工するのだ。お前さんが吾々のためにそゝいふものを「農業」と呼ぼうが「工業」と呼ぼうが、とにかく

*ニコライ・ジトベル教授著『デビッド・リカルドとカール・マルクス』モスコ、一八七九年刊、第四八〇頁。

く吾々は家でも畑でも色々のものが必要なのだから、あらゆるものを少しづつ營んでゐるのだ。こらいふ労働をどういふ具合に「分割」してゐるかといふのか？ これもまた不思議な質問だ！ 言ふまでもなく男は男の力が入用な仕事をやつてゐるし、女は家のことや、牛のことや、鶏小屋を世話し、子供はあれやこれやと手傳ひをするのだ。それともお前さんは女を木樵りにやつて、自分は牛の乳を搾れとでも言ふのかね。(こゝに附け加へて言ふが、この善良なる農夫は、多くの原始的民族、たとへばブラジル種インディアンの場合は、林で材木を集めたり、根果を掘つたり、果實を探りに行つたりするのは女の仕事であり、一方アフリカやアジアの牧羊民族の場合は、今度は男が家畜の番をするばかりでなく、乳搾りもしてゐることを知らないのである。また今ダルマチアでは女が重い荷物を背負つて行く傍らに、倔強な男が氣樂相に騾馬に乗つて銜へ煙管をしてゐるのを目撃することができる。即ちこらいふ「分業」は、わが農夫に取つて男が木を伐り、妻が牛の乳を搾るのが當然のことに見えると全く同様に、當然のことと思はれてゐるのだ。) 更らに續けて言ふ、どんなものを俺の富と呼ぶかといふのか？ こんなことは村のどんな子供だつて知つてゐる！ 充分な穀物小屋や、設備の整つた牛小屋や、澤山な羊の群や、大きな鶏小屋を持つてゐる百姓は富んでゐるのだ。復活祭の時分にはもう粉が足りなくなつたり、雨降りの日には部室に雨漏りがする、そらいふような百姓は大體貧しいのだ。「わが富の増進」は何に基くかといふのか？ 一體どういふことが問題になるのか？ もつと大きな良い土地をもつてゐるとしたら、言ふまでもなく一層富んでゐるだらうし、夏になつて、禁物のひどい雹が降れば、二十四時

間のうちに村中の誰れも彼れも貧乏になるのだ。

吾々は茲に農民をして經濟學の博學なる質問に長々と答へさせたが、それにも拘らず學問的研究のために手帳と萬年筆とを携へて、高スコットランドやボスニヤの農家にやつてきた大學教授は、その質問の半分も濟まないうちに、早くも再び門外に踵を回へすに相違ないと確信する。事實においてこらいふ性質の農民經濟のすべての事情は、言ふまでもなく簡單明瞭なものであつて、經濟學的解剖刀を以てこれを解剖することは無駄な遊戯のように思はれる。

これに對しては或ひはこらいふ言つて吾々に反對することができぬ。吾々はおそらく不幸な例を選んだのだらう、即ち吾々は自給自足の微小な農民經濟を捉へたのであつて、焉んぞ知らんこの極度の單純性は、貧弱な要具と容積とによつて條件づけられてゐるのだと。それなら別な一例を擧げよう。即ち世の中から忘れられた隅々に何處でもつましやかな生活を營なんである小農家を去つて、一大帝國の最高頂に視線を向けよう。即ちカロロ大帝の經濟を觀察することにしよう。この皇帝は九世紀初にドイツ帝國をヨーロッパにおける最強國たらしめ、帝國を擴張し、鞏固にするために五十三度も出征を企て、今日のドイツの外に、なほフランス、イタリヤ、スミス、スペイン北部、オランダ、ベルギーを皇威の下に置いたのであるが、しかも彼れは、その料地および莊園における經濟事情に對しては極めて細心であつた。彼れは莊園の經濟原則に關し七十條項より成る特別の法典を自から編纂した。これが有名な『カピツラレ・デ・ウィリス』、即ち莊園法典であつて、この法典は歴史的傳統の無上の寶物として、幸ひにも記録所の塵埃に埋もれて吾

吾に保存されてきた。この法典は二つの理由から全く特別の注意を要するものである。第一にはカロロ大帝の莊園の大多數は後に有力な都市となつたことであつて、たとへばアーヘン、ケルン、ミュンヘン、バーゼル、シュトラスブルグ、その他多くの大都市は以前にはカロロ大帝の莊園であつた。第二にはカロロ大帝の經濟制度は、早期中世のすべての貴族領および寺領の巨大地所經濟にとつて手本となつたことである。カロロの莊園は、後進ゲルマン人の武士貴族の粗野な環境の中に移植するために、古代ローマの傳統とその貴族莊園の洗練された生活様式とを採用したものであつて、葡萄栽培、園藝、果樹栽培、蔬菜栽培、養蠶等に關する彼れの規定は一個の文化史的業績であつた。

さて法典を仔細に調べて見よう。大帝は何よりもまづ人々が彼れに實直に仕へることを要求し、料地における家臣が充分な心づかひを受け、貧困に陥らぬように保護される道を講じてゐる。彼れ等に力以上の仕事を課してはならぬ、夜に入つても働かされる場合には相當の賠償を與へられることになつてゐる。家臣の方では誠實に葡萄栽培に氣を配り、何等過失なしに搾つた葡萄汁を壺に詰めなければならぬ。義務を怠つた場合には「仰向けにして」懲罰される。更らに大帝は次ぎの如く規定してゐる。料地においては蜜蜂と鷺鳥とを飼養し、家禽はよく飼養して殖やさなければならぬ。牝牛、種牝馬、羊等家畜の増殖に最大の配慮を與へなければならぬ。

大帝は更らに記して曰く、山林は理解を以て經營し、伐木することなく鷓や鷹を棲はせて置かなければならぬ。肥えた鷺鳥と仔鷓とをいつでも役立て得るようにし、農場で消費されない鷄卵

は市場に賣ること。どの莊園にも良い羽根蒲團、臥褥、掛物、銅製、鉛製、鐵製、木製の家具、鎖、鍋鉤、手斧、錐の用意があるべきで、他人から借りられてゐるようなことがあつてはならぬ。大帝は更らに規定して曰く、莊園の収益は精密に計算して報告しなければならぬ、しかも各個の事物に互つてそれぞれ幾許産出されたかを報告しなければならぬ。そして大帝は次ぎの如く列挙してゐる、蔬菜、牛酪、チーズ、蜂蜜、油、酢、甜菜、それから法典の條文の文句でいへば「その他こまごましたもの。」なほ、どの料地にも各技藝を専攻した各種の手藝者の充分な數が存在してゐなければならぬと言つて、矢張り各個に互つてその種類を擧げてゐる。更らに大帝は降誕祭を以て彼れが毎年富の總勘定を徵收する期日と定めてをり、どんな小つぼけな農夫と雖も、農場における牛や卵の數をカロロ大帝ほど細心に一々に互つて調べはしない。法典の第六十二條に曰く、「吾々があらゆる物に互つて、如何なるものを、幾何、所有してゐるかを知つてゐることが大切である」と。そして矢張り、牡牛、水車、材木、船、葡萄樹、蔬菜、羊毛、リンネル、大麻、果實、蜜蜂、魚、皮類、蜜蠟、蜂蜜、古酒および新酒、その他彼れに交附されるすべてのもの、といふ風に列挙してゐる。そして大帝はすべてこらいふものを交附しなければならぬ愛すべき家臣を慰めて、こらいふ優しい言葉を附け加へてゐる、「お前がたに取つて、こらいふことがそんなに辛い仕事とは見えないように望む。各人はそれぞれ料地の主人なのだから、それぞれ言ひ付けて收集することができようから」と。更らに吾々は葡萄酒の包装や運送の仕方についての綿密な規定を見る。思ふにこれは、大帝の特別の政務の一つだつたのである。「葡萄酒は丈夫な鐵張り

のしてある樽に詰めるのであつて、決して囊に詰めてはならぬ。麥粉は二輪車に積み、革で包んで運送して、何等損害なしに河を渡すことができるようにしなければならぬ。また羯羊や山羊の角や、毎年殺される狼の皮について精密な計算を報告して貰ひたい。五月には仔狼に對して容赦なき戦ひを仕掛けることを怠つてはならぬ。最後に大帝は法典の最後の條文において、一料地に栽培されてゐるあらゆる花卉草木、即ち薔薇、百合、迷迭香、胡瓜、玉葱、大根、茴香等、一々報告すべきものとして擧げてゐる。そしてこの有名な法典は種々の林檎の種類を以て終つてゐる。

これが九世紀における皇室經濟の光景である。

そして右は中世の最も有力にして最も富裕なる君主の一人を擧げたものであるが、この君主の經濟にしる、この農場經營の原則にしる、最初に觀察した矮小農家を卒然として聯想せしむるものがあることは、何人と雖も同意するに相違ない。この場合もこの皇室の主に向つて、前述のような富の本質、生産の目的、分業等の國民經濟學の根本問題を課さうとするときは、このあるじは皇帝らしい手裁きを以て、山のような穀物、羊毛、大麻や葡萄酒、油、酢の樽や、牛小屋や羊小屋を指さして見せるに相違ない。そして吾々は矢張りこの場合も、實際こらういふ經濟においては、國民經濟科學は一體如何なるものについて秘密な「法則」を研究し、説明すべきであるかを知らないであらう。ただしこの場合一切の相互關係、即ち原因と結果、勞働とその成果は掌を指すように明白だからである。

おそらくこの場合もまた讀者は、吾々が矢張り今度も間違つた例の選び方をしたのだといふことを注意したがるかも知れぬ。何といつてもカロロ大帝の法典を見れば、そこに主眼となつてゐるものはドイツ帝國の公けの經濟關係ではなく、大帝の料地における私經濟であることが分かる。だが誰れでもこの二つの概念を相互に對立させようと欲する人は、中世といふものについて歴史的誤謬を冒すことは必定である。如何にもこの律令はカロロ皇帝の莊園および料地における經濟に關するものではあるが、この經濟を彼れは支配者として行つたので、私人として行つたのではなかつた。もつと正確にいへば、皇帝は彼れの莊園地所における地主だつたが、中世においては、即ちカロロ大帝以後の時代においては、貴族大地主はいづれも大體そらういふ小規模の皇帝だつた。言ひかへれば、彼れ等はすでに自由な貴族的土地所有の力によつて、その領地の住民に對して立法者であり、徵稅者であり、裁判者だつたのである。右に見てきたカロロの諸々の經濟規定が事實上政府條令であつたことは、その規定の形式そのものが説明してゐる。即ちそれはカロロの六十五法律、即ち謂はゆる『律令』の一つを成すものであつて、この『律令』は皇帝によつて編纂され、皇帝の年々の帝國會議において發布されたものである。そして大根や鐵箍を絞めた葡萄酒樽に關する規定は、たとへばカピツラ・エビスコポルム即ち『僧正令』における僧侶に對する戒告と同一の絶對權力によつて且つそれと同一の文體において作成されたものであつて、『僧正令』においてカロロは主の僕べをしつかりと掴まへて、逃亡しないように、酩酊しないように、悪い場所を訪れないように、婦人室をもたないように、聖典をあまり高價に賣らないよう

に強く戒めてゐる。中世における何處の田舎でも探して見るがよい。貴族の大土地所有に關する限り、カロロ大帝の經濟が模範であり典型でない農業經營は、何處にだつて見出せないし、獨立に經濟してゐる個々の農家にせよ、共同的に經濟してゐるマルク組合にせよ、そうでない農民經營は只の一つだつてありはしない。

右にあげた二つの例において最も顯著な點は次ぎの事實である。即ちこの場合いづれも人間生活の欲望が直接にはたらし且つ規定し、且つその成果が極めて精密に志向および欲望に合致してゐるのであつて、そのために經濟關係が、その規模の大小如何に拘らず、このような驚くべき簡單明瞭さを示してゐるのである。小地面を耕やす小百姓でも、莊園における大君侯でも、自分が生産によつて如何なるものに到達せんと欲してゐるかを極く精密に必得てゐる。それにまたさういふことを心得てゐるに何等不思議はない。兩者とも衣食住に對する人間の自然的欲望を充たさうと欲してゐるのだから。たゞ兩者の區別は、農民の方は多分蘆蒲團の上に、領主の方は柔かい羽根蒲團の上に眠り、一方はビールや蜜糖水、それにまた冷水を飲んでゐるに反し、他方は宴をはつて上等の葡萄酒を飲むといふだけのことである。即ち區別は拵へられる財の量および種目に存するだけであつて、經濟の基礎とその任務——人間の欲望を直接に充たすためといふ——は依然として同一である。こゝにいふ自然的任務から發する勞働にその結果が合致するのは、同じく自明の理である。この勞働過程にも矢張り區別は存する。即ち農夫は家族と一緒に自分で勞働する、そして彼れは自分の勞働の成果のうち、自分の地面と共同地の持分とが産出し得るだけの分量し

か取らない。もつと精確にいへば——こゝでは中世の徭役農のことを言つてゐるのだから——地主と教會とに對する貢税と庸役との後に残つたものしか手に入らない。ところが皇帝または他の貴族地主はいづれも自分で勞働せずに自分のために家來や小作人を勞働させてゐる。だが農夫が各自家族と一緒に自分のために勞働してゐようと、またはすべての農夫が村長や莊司の指揮の下に地主のために勞働してゐようと、その勞働の成果は、廣い意味での生活資料の一定量に外ならぬ。即ち必要とされてゐるもの、そして大體必要とされてゐるだけの量である。こゝにいふ性質の經濟をどんなに捻り廻して見ても、深遠な研究によつて、特殊の科學によつて初めて闡明されるような謎を、何等そこに見出すことはできぬ。中世においてはどんな魯鈍な農民と雖も、地主の地所をも農民の地所をも折々見舞ふ自然現象は別として、自分の富といふよりも貧が、何に基いてゐるかを仔細に心得てゐた。農民の逼迫は極く簡單明瞭な原因に基いてゐることを仔細に心得てゐた。原因といふのは、第一に徭役および貢納に對する地主の儉盜である。そしてその心得てゐることに共同地、即ち林地、牧地、河水に對するこの同じ地主の儉盜である。そしてその心得てゐることを農民は農民戰爭によつて世界に聲高に叫び、吸血者の家に放火することによつてこれを示した。この場合依然として學問的に研究さるべきものは、さういふ經濟關係の歴史的起源および發達だけであり、如何にして全ヨーロッパにおいて以前の自由な農民地が、借地料および貢税義務のある貴族地主地と化し、以前の自由な農民の身分が、徭役義務のある、そして後にはまた在村義務のある臣屬の一團と化したかといふ問題であつた。

しかるにひとたび今日の經濟生活の中から何等かの現象を選び出すとなると、事情は全然一變してしまふ。例として最も顯著な現象の一つ——商業恐慌を選び出さう。吾々はいづれもすでに幾多の大きな商業恐慌や産業恐慌を経験してきてゐるので、フリードリヒ・エンゲルスによつて典型的に描き出された次ぎの如き出來事は、吾々自身の見聞によつて熟知してゐるところである。曰く、「交通は停止し、市場は供給過多となり、生産物は大量に且つ販賣され得ずに積まれてあり、正貨は見る事ができなくなり、信用は消え、工場は休止し、勞働大衆はあまりに多く生活資料が生産されるが故に生活資料に不足し、破産は破産につゞき、押賣りが押賣りにつゞく。幾年間も不景氣が繼續し、生産力も生産物も大量的に浪費され破壊され、最後に至つて堆積されてゐる商品の山が多少とも減價の下に流れ出し、生産と交換とが漸次に再び動き出すようになる。今度は次第々々にその足並みは早くなり、駈け足になり、この産業的駈け足は疾驅に移り、この疾驅が進んで産業上、商業上、信用上、投機上の競馬の箝制なき競走となり、最後に危険極まる跳躍の後、早くも再び——倒産の墓穴の中に落ち込むのだ。」こゝにいふ商業恐慌はあらゆる近代生活の恐怖であり、恐慌の切迫が告げられる方法は極めて特色のあるものであることは、吾々のすべてが知つてゐる通りである。好景氣と順調な營業經過とが數年つゞいた後、初めに新聞紙上にチラホラ不明瞭なコソコソ話が始まり、取引所では破産に關する不安な噂さが傳へられ、次いで新聞紙上における暗示は段々明瞭なものになり、取引所はますます不安となり、國立銀行は割引率を引上げ、即ち信用の附與を控へ目にし、とらとら破産、休業の報道が驟雨のようにやつてくる。

そして恐慌が全く進行し出せば、何人がそれに責任があるかといふことで争ひが起る。事業家は銀行の苛酷な信用拒否や株式業者の投機熱に罪を着せ、株式業者は工業家に、工業家は國內における貨幣の不足に罪を着せる。そして最後に事業が再び運行し始めれば、取引所や新聞が、重荷をおろしたように矢張り眞先きに恢復への徴候を示し、やがてまた、希望、安心、確信が暫くの間懸つてくる。以上すべての場合に注目すべきことは次ぎの事情である。即ち恐慌はすべての關係者、社會全體によつて、人間の意志と人間の豫測の領域以外にあるものと見做され、見ることでできぬ力によつて吾々の頭上に下された運命の打撃であり、大暴風雨、地震、洪水と大體同じ種類の天の試練であるといふ風に見做されてゐるといふ點である。商業新聞が恐慌を報道するに使用する言葉からして、「これまでの事業界の好天氣は暗雲を見せ出した」といふ語法が好んで用ゐられ、銀行の割引率の急激な引上げを報道する場合には、定りきつて「嵐の兆あり」といふ標題が附せられ、またその後には暴風雨が一過して地平線が晴れたといふような記事を読むのである。こゝにいふ表現の仕方は、實業界の文筆奴隷の没趣味を現はしてゐる以上の何等かのものを言ひ現はしてゐるのであつて、取りも直さずこゝにいふ言ひ現はしこそ、恐慌の不思議な、謂はば自然律的な作用を表現するに典型的なものである。近代社會は恐慌の切迫を恐怖を以て語り、その雷雨の如き打撃の下に潛伏し、試練が終るのを待ち、初はおつかかなびつくり、それからやつと安心して首を上げる。これは中世において民衆が大飢饉や疫病の勃發の前に處したやり方と全く同じである。今日と同じように農夫は雹交りの大暴風雨を忍んだのであつて、苛酷な試練に對して今日

と同じように途方に暮れ、同じように無力だつたのである。とはいへ飢饉でも疫病でも、結局は社會的現象であるとはいへ、第一にそして直接には、凶作、病菌の傳播といふような自然現象の結果である。暴風雨は物理的自然の元素的現象であつて、少くとも今日の自然科学や技術の状態の下には、如何なる人間も暴風雨を起したり、避けたりする能力はない。ところが近代的恐慌はどうか？ 吾々の知つてゐる如く恐慌は、商品が過剰に生産され、販路を見出し得ず、その結果商業と、それに伴つて産業とが停止するところから起るのである。ところが、商品の製出、商品の販賣、商業、産業——こゝろいふものは純粹の人間の關係である。商品を生産するのは人間自身であり、それを買ふのも人間自身であり、商業は人間から人間へと行はれるのであつて、吾々は近代的恐慌を形成する事情の中に、人間の行爲以外に存する要素を一つだに見出すことはできない。されば恐慌を週期的に惹き起すものは、人間社會自身を外にして他の何物でもない。しかも同時に吾々は、恐慌は人間社會にとつて眞の苛責であり、恐怖を以て期待され、絶望を以て忍ばれてゐるのであつて、何人によつても希望されてはゐないことを知る。けだし恐慌の際に他人の犠牲によつて、一擧に儲けようと努める個々の株屋の狼狽——尤もその場合屢々自分自身が没落の憂き目を見るのだが——そゝろいふ連中を外にすれば、恐慌はすべての人にとつて少くとも一個の危険または破壊である。何人も恐慌を欲してゐないのだが、しかも恐慌はやつてくる。人間がそれを自分自身の手でつくり上げながら、しかも世の中にそゝろいふものが無ければよいと思つてゐるのだ。こゝろに吾々は事實において、關係者からは何等説明され得ないところの經濟生活の一

つの謎を目のあたりに見る。中世の農夫は小さな田地でもつて、一部分は彼れ自身が欲し且つ要するもの——穀物と家畜、自分と家族のための生活資料——を生産してゐた。中世の大地主は彼れが欲し且つ要するもの——穀物と家畜、良き葡萄酒と手のかゝつた衣物、自分と館やうたのための生活資料と贅澤品——を生産させてゐた。ところが今日の社會は欲しもしなければ必要ともしないもの——恐慌をつくり出してゐる。即ち社會は消費することを得ない生活資料を時々生産し、賣れない生産物の巨大なる倉庫を傍らにして、週期的に飢饉に悩まされてゐる。需要と供給、勞働の支出と成果とがもはや合致せず、その兩者の間には何か不明瞭なもの、謎のよゝなものがあるのだ。

もう一つ別の例、一般に熟知されてをり、すべての國の勞働者に分かり過ぎるほど知られてゐる例を取らう。即ち失業である。

失業はもはや恐慌とは違つて、時々社會を見舞ふところの異變ではない。それは今日程度の大一小こそあれ經濟生活の不斷の、日常の附隨現象となつてゐる。失業者名簿を記してゐるところの、最も良く組織され最も良い支拂を受けてゐる範疇の勞働者は、毎年、毎月、毎週、間斷なき失業者數の連鎖を記帳しつゝある。この數はひどく動搖してはゐるが、全然涸れ切つてしまふことは決してない。今日の社會が勞働階級のこの怖るべき苛責たる失業に對して、如何に無力であるかといふことは、この災禍の範圍が大きくなつて、立法部がそれに干渉することを餘儀なくされる場合にいつも判明する。こゝろいふ商議のお定期通りの成り行きは、長い議論の後に結局失業者の

現存數に關する調査を始めようといふ決議となる。但し洪水の場合に水深を測る通りに、主としてその場合の災禍の状態を測るだけに止まり、最上の場合でも失業保護——それも多くは從業勞働者自身の費用によつての——といふ姿を取つた微弱な姑息手段によつて、災禍の影響を幾分緩和するだけのことであつて、災禍そのものを除去しようといふ試みは一つも行はれない。

十九世紀初にイギリス・ブルジョアジーの偉大なる豫言者、僧正マルサスは、彼れ特有の小氣味のよい露骨さを以て、次ぎの原則を宣言してゐる。曰く、「すでに人々の所有に歸してゐる世界に生まれた人間は、要求權利があるにも拘らず近親から何等生活資料を得ることができない場合、そして社會が彼れの勞働を必要としない場合は、如何に少量の食糧に對しても何等要求權を有してゐない。そして彼れは事實において、この世界に何等つくり出すものがないのである。自然の大饑饉も彼れのためには何等食卓を用意してくれない。自然は彼れにとつては彼れを排斥することを意味するのであつて、自然は自分自身の命令を迅速に斷行する。」特有の「社會改良家的」虚偽を有する今日の役人社會は、こういふ明らさまな正直を禁じてゐる。しかし事實上はこの社會は、「その勞働を社會が必要としない」ところの失業プロレタリアをして、結局何等かの方法において、急速にか徐々にか、この世界から「排斥」されるようにさせ、それによつてすべての大恐慌中における疾病や乳兒の死亡や、財産に對する犯罪數の増加が帳消しにされる。

先きに吾人は失業を洪水に比したが、取りも直さずこの比較こそは、次ぎの如き驚くべき事實を示すものである。即ち吾々は物理的自然的元素的出來事に對する方が、吾々自身の純社會的、

純人間的な事柄に對するよりも、無力である度合が少ないといふ事實である！ ドイツ東部に於いて春季に非常な損害をもたらしてゐる週期的洪水は、結局は吾々が今日行つてゐるところの全然豫防なしの河水經濟の一結果にすぎぬ。技術はすでにその現在の状態においてすら、水の威力に對して農業を保護するに充分な手段、それどころかこの水の威力を自由に利用する手段すらも供してゐるのだが、只これらの手段は、水害に見舞はれる全地域を圍つたり、田地や牧地を適當に移したり、堤防や水閘を築いたり、河流を調節したりしなければならぬ総合的合理的な河水經濟の最高階段以外には適用され得ないのである。かゝる大改良事業が着手されないのは、一部分は私人資本金も國家もそういふ企てに對して資金を出したがらないからであるし、一部分の理由は、そういふことを企てればその大きな地域において、種々な私的土所有權の障壁にぶつかるからである。しかしながら水害を豫防し、狂暴な水力を箝制する手段を、今の社會はたとへ使用する能力はないにしても、とにかくすでに現在にもつてゐるのだ。ところが失業に對する手段は、今日の社會においてまだ發見されてゐない。しかもそれは何等水力風力といったものではなく、即ち物理的的自然現象でも超人間的な力でもなく、經濟關係の純人間的產物なのである。このように吾々は茲でも矢張り一個の經濟的謎に當面する——即ち何人も企てず、何人も意識的に望みもしないのに、自然現象のよう規則正しく起り、謂はゞ人間の頭から離れて生ずるところの現象を見るのである。

しかし恐慌や失業などといふ、現代生活の顯著な現象を撰び出す必要はない。即ち在り來りの

觀念からすれば、事物の尋常普通の成り行きにおける例外を成してゐるところの、災害や異變を撰び出すを要しない。日常生活から最も尋常普通な一例、すべての國において幾千回となく繰返へされてゐるもの——商品の價格變動を例に取らう。すべての商品の價格は確固不變のものではなく、反對に殆んど毎日、それどころか往々毎時間に上下するものであることは、どんな小兒でも知つてゐる。任意の新聞を手にとつて、物産取引所の報道を調べれば、前日の物價變動に關し次ぎの如き記事を讀むだらう。小麥——午前、弱調子、正午、稍々活氣あり、閉場近くに騰貴した、云々。銅や鐵、砂糖や種油の場合も同一である。そして種々の企業の株式や、證券交換所で「常態的」な現象である。ところがこゝにふ價格の變動によつて、すべてこれらの生産物や有價證券の所有者の財産状態に變動が時々刻々に行はれる。羊毛の價格が騰貴すれば、羊毛現品を倉庫に貯藏してゐるすべての商人および工場主の財産が、一時の間増大し、價格が下ればそれに應じてその財産が消失する。銅の價格が上れば銅山株の所有者は富み、價格が下れば貧しくなる。このように人々は株式取引所の電報一本に基く單なる物價變動によつて、僅々數時間のうちに百萬長者にも乞食にもなることができる。そして實際のところ詐欺を伴つた取引所投機は、本質上そらいふものを土臺としてゐるのである。中世の地主は收穫の良否によつて富んだり貧しくなつたりすることができた。もしくは通り過ぎる商人を待ち伏せする野武士として、大きな獲物があつた場合には金持ちになり、或はまた——そしてこれは最も引き合ふ最も愛好される手段なのだ

が——徭役や貢物の要求を高めることによつて、これまでよりも農奴から餘計に搾り取ることができた場合には、自分の富を増加したのである。ところが今日では、自分がちつとも助力せず、指一本動かさずとも、何等自然の出來事が起らずとも、また誰れも自分に何か呉れたり、暴力的に自分から奪つたりしたわけでもないのに、突然富んだり貧しくなつたりすることができ。價格の變動は謂はゞ人間の背後において、見ることできぬ力に左右されて、社會的富の分配に間斷なき移動と動搖とを惹き起すところの一個の祕密な運動である。人々は寒暖計で溫度を判斷し、バロメーターで氣壓を判斷すると同じ具合に、單にこの運動に注意を拂ふだけである。しかも商品の價格とその變動とは、明らかに純粹に人間的な事柄であつて決して魔法ではない。外の誰れでもない人間自身が自分の手で商品を拵へ、その價格を決めるのであつて、たゞ矢張りこの場合も彼れの行爲から、誰れも企てたり望んだりしなかつたものが現はれてくるだけである。矢張りこの場合も人間の欲望、人間の經濟的行爲の目的と結果とが、互ひに杆格のある不一致に陥つてゐるのである。

どういふ譯でこんなことになるのか、そして今日人間自身の經濟生活を、人間の背後において、かくも奇異な結果に接合させるところの、得體の知れぬ法則は一體如何なるものであるか？ これを闡明することは科學的研究によつてのみ可能である。こゝに精密な探究、深い反省、分析、比較の方法によつて、すべてこゝにいふ謎を解くことが必要となつた。即ち人間の經濟的行爲の結果がその人間の企圖、その人間の意志、約言すればその人間の意識と最早や合致しないようにす

るところの、隠れたる聯絡を發見することが必要となつた。かくて社會的經濟内における意識の
 缺如として示されてゐるものが、科學的研究の課題として現はれるのであつて、こゝに吾々は直
 接に經濟學の根柢に到達したのである。

ダーウィンは世界一週中フォイエルランドについて次ぎの如く述べてゐる。

「この國は屢々飢饉に悩んでゐる。予は、この國の土人をよく知つてゐる海豹獵者の首長ロウ
 氏が、極めて貧粗で非常に窮迫してゐる西岸地方の百五十人ばかりの土人の社會状態について、
 珍らしい話をしてくれたのを聞いた。ひと續きの暴風のため女は岩から貝を採ることを妨げられ、
 また海豹を捕へにカヌー舟で乗り出すこともできなかつた。そこで人々の一小隊は或る朝旅に出
 た。そして別のインディアンが氏に向つて、彼れ等は食料を持ち歸るために四日間の旅に上つた
 のだと説明してくれた。この一隊が歸つてきたとき、ロウ氏は彼れ等に會ひに行つた、そしてこ
 の一隊が疲勞し切つてゐるのを認めた。各人がめいめい腐つた鯨の脂肉を四角に切つた切れの眞
 中に孔をあけて、そこから自分の頭をのぞけて運んでゐる。丁度ヌベインの道化者が外套ゴッソクを着て
 ゐる様子と同じである。この脂肉が小屋の中に運ばれると、一人の老いた男がそれを薄片ボツクに截
 つて、それに向つて二言三言口の中で呟やいて、一分間ばかりこれを火に炙つて、それから餓ゑ
 切つた仲間のものに分けてやつた。彼れ等はその間中深い沈黙を守つてゐた。」

これが世界中最も程度の低い民族の一つの生活である。この場合、意志と經濟の意識的秩序と
 が左右し得る限界は極度に狭いものである。この場合人間はまだ外界の自然に全然頼つてゐて、

その一顰一笑に左右されてゐる。しかしこの狭い限界内では、この僅か百五十人ばかりの小社會
 に社會の全體的組織が行はれてゐるのである。將來のための用意は、腐つた鯨の脂肉の貯藏とい
 ふふじめな形をとつて辛うじて現はれてゐる。だがこのふじめな貯へは、一定の儀式の下にすべ
 ての人に分配され、また食糧探しの仕事には、すべての人が一樣に計劃的指揮の下に携つてゐる
 のである。

今度は奴隸使用の古代家内經濟、即ちギリシャの「オイコス」(戶經濟)を例に取らう。この家
 内經濟は大體において、「小宇宙」、即ち小さな獨立世界を形づくつてゐたものである。こゝには
 すでに極度の社會的不平等が行はれてゐる。原始的な物資缺乏が去つて、人間勞働の成果の豊富
 なる過剰が現はれてゐる。その代り肉體的勞働が或る者の禍となり、閑暇が他の者の特權となり、
 勞働する者自身が勞働しない者の財産となつた。しかもこゝにふ支配關係から、經濟、勞働過程、
 分配の極めて嚴密な計劃性と組織化とが生ずる。主人の一定の意志がそゝるふものゝ基礎であり、
 奴隸監視人の鞭がその制裁である。

中世の封建的莊園においては、經濟の專制的編成が、夙に細密な、豫じめ作成されてゐる律令
 の姿を取つてゐて、この律令の中には勞働計劃、分業、各人の權利義務が明瞭にその輪廓を示さ
 れてゐる。こゝにふ歴史の時期の戸口に立つてゐるのが、前記の立派な文書、カロロ大帝の『カ
 ビッラーレ・デ・ヴィリス』である。この法典はまだ嬉々として充分な肉體的享樂を専ら主眼と
 してゐたものであつて、經濟は専ら肉體的享樂を目宛てにしてゐた。そしてこの歴史の時期の終

りに立つてゐるのが、徭役および納貢の陰鬱な律令である。この律令は封建諸侯の恣な貨幣慾の意のままになり、十五世紀にドイツ農民戦争となつて現はれ、それから二世紀後にフランスの農民を、悲惨な、半分獸物のような代物となすに至つたものであつて、このフランスの農民は大革命的の鋭き警鐘によつて、人権および市民権のための戦ひに目覺めるに至つた。しかしながら革命の筈が封建的莊園を掃しなかつた間は、こゝにいふ悲惨な状態にあつて、封建的經濟關係を避くべからざる運命の如く明確に規定したものは、直接的な支配關係だつたのである。

今日吾々の社會には、如何なる主人と奴隸も、如何なる封建豪族と農奴も存在してゐない。自由と法律上の平等とは、形式上は一切の專制的關係を除き去つた。少くとも古くからのブルジョア國家においてはそうである。ところが植民地においては——周知の如く——屢々いふ國家自身によつて、奴隸制度と農奴制度とが初めて移入されてゐる。とはいへブルジョアが主人であるところには、とにかく經濟關係に關する唯一の法則として自由競争が支配してゐる。だがそれにつれて、あらゆる計劃、あらゆる組織が經濟から消滅してゐる。個々の私的經營、一個の近代的工場、乃至はクルップの場合のような工場と製鐵所との一大合成體、または北アメリカにおける機械經營農場を一見すれば、成程そこには、極めて嚴格な組織、極めて廣汎な分業、科學的知識を基礎とせる極めて精練された計劃性が見出される。そこでは一個の意志、一個の意識によつて指揮されて、萬事が驚くほど都合よく行つてゐる。しかしながら一步工場または農場の門外に出るや、早くも吾々は混沌状態によつて迎へられるのである。無數の個々の部分——といふ

のは、今日の私的經營はどんなに巨大なものでも、全地域に互つてゐる大きな經濟的紐帶の一小部分にすぎぬからである———そういふ個々の部分は極めて嚴格に組織化されてゐるに引きかへ、謂はゆる「國民經濟」即ち資本主義世界經濟といふ全一體は完全に無組織である。幾多の大洋および大陸の上にひろがつてゐるこの全一體の中では、如何なる計劃も、如何なる意識も、如何なる規定も通用しない。知るべからざる、統御すべからざる勢力の盲目的支配が、人間の經濟的運命を氣まゝに弄んでゐるにすぎぬ。なるほど一個の優勢なる支配者が、現今でも勞働人類を統治してはゐる。即ち資本である。しかしその統治形態は專制でなくして無秩序である。

そして取りも直さずこの無秩序が社會的經濟をして、關係してゐる人間自身にとつて思ひがけない謎のような結果を生ぜしむるようになせ、この無秩序が社會的經濟を、吾々とは縁のない、吾々から引離された、吾々とは無關係な現象たらしむるのであつて、吾々はこの現象の法則を、外部的自然の諸現象を研究すると同じように、即ち動植物界を支配し、地殼の變化や天體の運動を支配してゐる法則を闡明せんとする場合と同じように闡明しなければならぬ。以後科學的認識は、意識的計劃が當初から口授してくれなかつたところの、かゝる社會的經濟の意義と規則とを發見しなければならぬ。

今やブルジョア經濟學者にとつては、彼れ等の學問の本質を解明し、彼れらの社會秩序の傷口に指を突込んで、その内部的衰弱を摘發することが、何のために不可能であるか、明白である。無秩序は資本支配の生活要素であるといふことを承認することは、同時に死刑宣告を下すことを

意味し、資本支配の存立に刑の執行猶豫が與へられてゐるといふことを意味する。何故に資本支配の學問的辯護人等が、あらゆる詭辯を弄して事物の眞相を陰蔽し、核心から外殻へ、世界經濟から「國民經濟」に視線を向けようと努めてゐるか、今や明白である。經濟學的認識の敷居に第一歩を踏み入れんとするに當つて、即ち經濟學とは何ぞや、その根本的任務は何ぞやといふ最初の根本問題に當面するに當つて、すでに現在ではブルジョアの認識の道とプロレタリアの認識の道とが分れるのである。この最初の根本問題は、一見抽象的なものであつて、現在の社會的闘争にとつてどうでもよいものゝように見えるかも知れぬ。だが科學としての經濟學と、革命的階級としての近代プロレタリアートとの間に存する特別の紐帶が、すでにこの根本問題と結びついてゐるのである。

六

右に獲得した立場に立つときは、最初疑問に見えた種々の事柄が吾々にとつて明瞭になる。

何よりもまづ經濟學の年齢が明白になる。無秩序的資本主義生産様式の法則を發見することを任務とする科學は、この生産様式そのものよりも以前に發生し得なかつたことは明白であり、近代ブルジョア階級の階級支配のための歴史的條件が、數世紀の歲月のうちに政治的および經濟的變動によつて漸次に合成される以前に發生し得なかつたことは明白である。

ビュヒャー教授によれば、今日の社會制度の發生は、先行の經濟的發展とはまづ何等關係のな

い極めて單純な事柄であつた。即ちそれは單に專制主義諸侯の貴き意志と、優れた智慧との成果にすぎないのである。

「國民經濟の形成——ブルジョア大學教授にとつては「國民經濟」なる概念は、その實、資本主義生産の胡魔化し言ひ現はしに外ならぬことは、吾々のすでに知つてゐる通りである——は、本質において、政治的集中の一成果であつて、この政治的集中は中世の終りに當つて地域的國家形成と共に始まり、現代において國民的單一國家の創成と共に終つてゐるものである。經濟的勢力が綜合されるのは、政治上の分立的利益を總體のヨリ高い目的の下に従屬させることと並行して進んでゐる。ドイツにおいては、土地貴族および都市との闘争において近代的國家理念を發揚せんと試みたものは、地域的大諸侯である。」

ところがドイツ以外のヨーロッパにおいても、即ちスペイン、ポルトガル、イギリス、フランスにおいても、オランダにおいても諸侯の權力がそらいふ偉業を行つてきた。

「程度の強弱の差はあれ、これらのすべての國において、中世の分立的權力との闘争が現はれてゐる。——大貴族、都市、地方諸州、僧俗の諸結社との闘争である。最初はたしかに政治的綜合の邪魔になる獨立區域を絶滅することが主眼だつた。しかしながら諸侯專制主義の形成を誘致したこの運動の奥底には、世界史的思想が假睡してゐて、人類の新たな、ヨリ大きな文化的任務が、諸民族全體の統一的組織を要求し、活潑な一大利益共同社會を要求した。そしてこれは共同經濟を土臺にして初めて實現することを得たのである。」

こゝに吾々はドイツの經濟學教授において見てきたところの、思想的阿諛の最も見事な花盛りを認める。シュモラー教授によれば、國民經濟科學は開化的專制主義の司令の下に發生したものである。ビュヒャー教授によれば、全資本主義生産様式は、專制主義諸侯の崇高なる意志と偉大なる計劃との成果に外ならぬ。そこでスペインおよびフランスの大專制君主やドイツの小專制君主等が、中世紀末における傲慢なる封建領主との鬭争の場合や、オランダの都市に對する血闘に侮蔑するのは、これらの專制君主に對して申譯けない過ちを犯したことを意味する。それどころか、歴史上の事柄を顛倒することを意味することにならう。

集中的な官僚主義的大國家の樹立は、たしかに資本主義生産様式の必要缺くべからざる前提だつたには違ひないが、一方そらいふ大國家の方から言へば、それと同じ程度において新しい經濟的要求の一個の結果にすぎないものであつて、ビュヒャーの文句を逆にして、はるかに正當に次ぎの如く説くことができよう。曰く、政治的集中の形成は、「本質において」、成熟しつゝある「國民經濟」即ち——資本主義生産——の一成界であると。

しかし專制主義がこの歴史的準備過程に與つたことは疑ひを容れぬにしても、しかも專制主義は、歴史的發展傾向の盲目的道具にふさはしい愚かな無分別を以てこの役割をつとめたのであつて、即ち專制主義は都合のよい機會がある毎にこの歴史的傾向に抵抗することを心得てゐたのである。中世の專制君主が神意を體して、封建領主に反對して彼れ等と結んだ都市を、單なる強奪

對象物と見做し、そのため都市を機會ある毎に再び封建領主の手に渡したのがそうであつた。彼れ等が新たに發見された大陸を、その大陸の人類および文化諸共に、専らできるだけ短い期間に「内帛」を金塊でいつばいにしようといふ「高尚な文化的目的」を果すため、極めて野蠻な、極めて悪性な、極めて亂暴な掠奪のための恰好の分野とのみ見做したのもそうであつた。同様に後に神權君主と彼れの忠實なる人民との間に、ブルジョア議會主義憲法と呼ばれる一枚の紙片を奪取するための頑強な抗爭が起きたのもそうであつた。實にこの紙片こそは政治的統一や集中的大國家そのものと同じく、阻止すべからざる資本支配の發展にとつて必要缺くべからざるものである。

事實は全然別個の力が、即ち中世紀末におけるヨーロッパ諸民族の經濟的生活における大變動が、新經濟様式の入場式を行ふためにはたらいてゐたのだ。

アメリカ發見とアフリカ周航——即ちインドへの海路の發見とが、豫想だもしなかつた商業の飛躍と移動とをもたらしてから、封建制度並びに都市におけるギルド制度の撤廢が力強く始まつた。發見された國々における大侵略、土地の獲得、掠奪遠征、新大陸からの貴金屬の急激な旺盛な流入、インドとの香料大貿易、アフリカ黑人をアメリカの栽培地に供給したところの奴隸貿易の擴大——すべてのものは短時間のうちに西ヨーロッパに新たな富と新たな需要とをつくり出した。幾千となき鎖に縛られてゐるギルド手工業者の小職場は、生産の必要なる擴張とその急速なる進歩に對して制動機であることを示した。大豪商等は手工業者を都市の境界外の大製作場に集

め、彼れ等をしてこゝで偏狹なギルド規則に煩はされずに、豪商自身の司令の下に一層迅速に一層良く生産させるようにして、これが解決の道をつくり出した。

イギリスでは新生産様式が農業における變革によつて移入された。フランドルにおける羊毛製造業の勃興は、羊毛に對する大需要と共に、イギリスの封建貴族をして、廣汎な範圍に互つて農地を牧羊地に變ぜしむる機因となり、その際イギリスの農民は非常なる大規模に互つて住宅と農場とから驅逐された。これによつて集團的に無財産の労働者、プロレタリアがつくり出され、出現しつゝある資本家的マヌファクチュアの意のままにならなければならなかつた。宗教改革もこれと同一の方向にはたらき、寺領地の沒收を誘致して、莊園貴族や投機業者に一部は贈與され、一部は投げ賣りされ、寺領地の農民人口はその大部分が矢張り土地から驅逐された。かくしてマヌファクチュア業者も資本家的借地者も、封建的およびギルド的鐵鎖の外にある貧しきプロレタリア人口を集團的に見出すことができたのであつて、後者は浮浪生活や、公共救貧院における長い受難の後、そして法律および警官の慘酷な迫害の下に、搾取者の新階級による賃銀奴隷の中に救ひの港を認めたのである。それに引きつゞいてまたマヌファクチュアに技術上の大變革が起り、次第に熟練手工業者の代りに、そして熟練手工業者の外に、不熟練賃銀プロレタリアの大規模なる使用を益々可能ならしめた。

すべてこゝにいふ新事情の努力と追進とは、いたるところに封建的障壁と腐朽せる状態の悲惨とに遭遇した。封建制度によつて制約され、封建制度の本質となつて存する自然經濟と、並びに農

奴制度の無際限なる壓迫による民衆の貧困化とは、當然マヌファクチュア製品のための國內市場を狭ばめ、それと同時に他方においては、ギルドが、最も重要な生産條件——都市における労働力——を絶えず拘束してゐた。國家裝置はその無限の政治的分散、その公的確實性の缺如——その不合理な關稅政策および商業政策の混亂を以て、新たな交通と新たな生産とを一步毎に阻害してゐた。

西ヨーロッパにおける新興町人階級ヒュンツマンが、自由世界貿易とマヌファクチュアとの代表者として、自己の世界史的使命を全然抛棄せんと欲するのでなかつたなら、すべてこゝにいふ妨害物を如何様にか一掃しなければならなかつたのは明白である。彼れ等はフランス大革命において封建制度を粉碎する以前に、まづ封建制度を批判的に解剖した、かくして經濟學といふ新科學が、中世的封建國家に對する戦ひと、近代的資本主義階級國家のための戦ひとにおける、ブルジョアジの最も重要な思想的武器の一つとして發生する。崩壊しつゝある經濟秩序がまづ第一に、急激に發生しつゝある新しい富の下に屈服した。この富は西ヨーロッパにおける社會に注ぎ込み、すでに氣息奄々たる家長的な農民虐使の方法とは全然別な、一層生産的な、見たところ無盡藏な源泉から流れ出たものである。新しい致富の最も顯著な源泉は、最初は出現しつゝある新生産様式ではなく、その誘導者——商業の大飛躍——であつた。そしてまた經濟學の最初の問題と、それに対する解答の最初の企てとが現はれたところは、中世末における世界貿易の最も重要な場所——地中海上の諸々の富裕なイタリア商業共和國やスペインであつた。

富とは何か？ 何によつて國家が富み、何によつて貧しくなるのか？ これが、封建社會の舊概念が新しい事情の渦巻の中に傳統的な妥當性を失つた以後における新問題であつた。富とはそれを以てすべてのものを買ひ得るところの金である。故に商業は富をつくる。故に多くの金を輸入して少しも國外に出さないようにできる國家が富む。故に世界貿易、新大陸における植民地占領、輸出品を製出する製造業は國家から奨励さるべきであり、金を國外に運び出すところの、外國生産物の輸入は禁止されなければならぬ。こういふのが、すでに十六世紀末にイタリヤに現はれた最初の經濟學說であつて、十七世紀にイギリスやフランスに大きな權威をもつてゐたものである。そしてこの學說は如何にもお粗末なものだつたにしろ、しかも封建的自然經濟との最初のハッキリした斷絶を示すものであり、封建的自然經濟に對する最初の鋭い批評であり、商業、商品生産、そしてそつういふ形を取つた資本の最初の理想化であり、最後に新興ブルジョアジーの心に叶つた國家政策の最初のプログラムたるものである。

間もなく商人の代りに商品生産資本家が中心となつてくる。しかしまだ要心深く、見すばらしい従僕の假面の下に、封建領主邸の控室に姿を現はすのだ。富とは決して金のことではなく、金は商業における商品との仲介者たるにすぎぬ——と、十八世紀におけるフランス啓蒙學者が説いてゐる。ピカピカした金屬を民族や國家の幸福の擔保と認めるとは、何といふ幼稚な眩惑だらう！ この金屬は餓ゑを感じたときに餓ゑを充たし、裸かで頭へてゐるときに寒さを防いでくれることができるだらうか？ ペルシャ王ダリウスは黄金を抱いて、野外に地獄のような渴の苦し

みを味はなかつたらうか、そして彼れは一杯の水のためなら喜んでそれを渡さうとしなかつたか？ いな、富とはそれによつて吾々が、國王と言はず、乞食と言はず、すべてその欲望を充たすところの、食料その他の物資の、自然界からの贈物のことである。人口がその欲望を旺んに充たせば充たすほど、國家もそれだけ富んでくる。けだしそれだけ多く租税が國家の手に落ちてくるからである。だがパンにするための穀物や、吾々が衣服を紡ぐところの絲や、吾々が家や家具をつくるところの材木や金屬を、誰れが自然界から手に入れるのか？ 農業だ！ 富の眞の泉を成すものは商業でなく農業である。故にその手がすべての富をつくり出すところの農業人口、農民大衆は、その際限なき貧窮から救はれ、封建的搾取の前に保護され、安樂の境遇に高められなければならぬ！（それだから俺は俺の商品のための販賣市場を見出してゐるのだ、とマヌファクチュア資本家が小聲に付け加へた。）故にまた農業から富の全體がその手に流れ込むところの大地主、封建豪族は、租税を收め國家を養つて行く唯一のものでなければならぬ！（それだから俺は見たところ何等富をつくり出さないのだから、何等租税を納める必要はないのだ、と矢張り資本家が作り笑ひをしながら口の中で呟やいた。）故に農業を、即ち自然の膝下における勞働を、封建制度のあらゆる桎梏から解放さへすれば、國民および國家のための富の源泉が自然のままに滾々として流れ、すべての人間の最高の幸福が、ひとりでに、自然の調和を以て必然的に全一體と融和する。

こつういふ啓蒙學者の教への中に、早やくもバスターニユに向つての嵐の遠鳴りを明瞭に聞くこと

を得たとき、資本家ブルジョアジーは、漸やく自分に力がつき出したことを感ずるに至つて、隷従の假面を脱ぎ、敢然と正面に現はれて、國家全體を自分等の原型通りに造りかへることを短刀直入に要求するようになった。農業は決して富の唯一の泉ではない、と十八世紀末にイギリスでアダム・スミスが説いてゐる。農地においてとあると、マヌファクチュアにおいてとあるとを問はず、商品生産に用ゐられるあらゆる賃銀労働が、富をつくり出すのだ！（あらゆる労働とアダム・スミスは言つた。けだしスミスにとつてもスミスの後繼者にとつても——彼れ等は既に新興ブルジョアジーの代辯者だつた——労働する人間は天性的に資本主義的賃銀労働者だつたのだ！）何故ならあらゆる賃銀労働は、労働者自身の生計のために最も必要な賃銀をつくり出す外に、なほ、地主の生計のために必要な地代と、資本所有主即ち企業家の富としての利潤とをつくり出すからである。そして一職場において、資本の司令の下に労働に差し向けられる労働者の集團が多ければ多いほど、分業が労働者の間に精確に注意深く實施され、ばされるほど、富はそれだけ大きなものとなる。故にこれが本統の自然的調和であり、國民の富である。——即ちあらゆる労働から、労働者のためにはその生活を支へ、且つ否應なしに賃銀労働を繼續させる程度に支へるところの賃銀と、地主の何不自由ない生活を充たすところの地代と、そして企業家を贅澤させながら引續き事業を営ませるよう支へるところの利潤とが出てくる。かくして封建制度の古くさい不器用な手段を用ゐずして、すべての者が養はれるのだ。故に資本家的企業家の富を増進することは、即ち「國民の富」を増進することを意味するのであつて、資本家的企業家は社會全體をそ

の經營によつて養ひ、富の大動脈たる賃銀労働に刺路を行ふのである。故に舊時代の一切の桎梏も障碍も、新工夫の老婆心的な國家の幸福増進方法も消えてしまへ。自由競争、私人資本の自由活动、資本家的企業家に役立つ全徴税装置および國家装置——これだけあればこの最善の世界において、萬人が饗應されるのだ！

これが皮から剥き出したところのブルジョアジーの經濟學的福音書であつた。そしてこれと共に經濟學が、その核心とその眞の姿とにおいて、究極的に洗禮を受けたのであつた。いかにも封建國家に對するブルジョアジーの實際的改革案と要求とは、新しき酒を舊き皮囊に盛らんとする。歴史上の企てがいつでも失敗するように、企てのまゝ無残に挫折した。革命のハンマーは、半世紀間の改良的な補綴的試みが能くしなかつたことを二十四時間のうちに仕上げた。ブルジョアジーの手に支配の條件を與へたものは、政治的權力奪取の行爲であつた。しかしながら經濟學は、啓蒙期の哲學學說、天權說、社會學說と並んで、且つその學說の先頭に位して、自覺の手段であり、ブルジョアジーの階級意識の方式であり、且つその意味において革命的行爲のための準備であり、拍車だつたのである。ヨーロッパにおけるブルジョアの世界革新の仕事は、その末端にいたるまで古典經濟學の思想内容によつて養はれてゐた。イギリスにおいてブルジョアジーは、世界市場に對する支配を彼れ等に齎したところの自由貿易のための戦ひの迫進期において、スミス・リカルドの兵器廠から武器をもち出した。そしてプロシヤの封建的廢物を、イエナで採用された提案によつて、幾分近代風に修理して、これに生活能力を與へようと欲したシュタイン・ハルデン

ベルヒ・シャルンホルスト時代の幾多の改革も、その觀念をイギリス古典經濟學者の學說からつくり上げたのであつて、新興ドイツの國民經濟學者マールウィッツは一八一〇年に、ナポレオンと並んでアダム・スミスがヨーロッパにおける最も有力な支配者であると書いたほどであつた。

そこで吾々は、何故に經濟學が約一世紀半以前に初めて發生したかといふことを理解するとき、はそれと同じ立場から、この經濟學の爾後の運命も明白になるだらう——即ち經濟學が資本家的生産様式の特種法則に關する一科學であるとすれば、その存立と職能とは、明かに資本家的生産様式の存在と結びついてゐるものであつて、この生産様式が存立を止めるや否やその土臺を失ふものである。言ひかへれば、科學としての經濟學は、資本主義の無秩序的經濟が、勞働する社會總體によつて意識的に編成され、指揮されるところの計劃的な經濟制度に座を譲るや否や、その役割を演了するものである。かくて近代的勞働階級の勝利と社會主義の實現とは、科學としての經濟學の終焉を意味する。この點に經濟學と、近代プロレタリアートの階級闘争との、特殊の相互關聯が存するのである。

經濟學の任務と對象とが、資本家的生産様式の發生、發展、擴張の法則を説明するにあるとすれば、その避くべからざる結論は、經濟學は結局において資本主義の没落の法則をも發見しなければならぬといふことである。資本主義は從來の諸々の經濟形態と同じく、永遠に存続するものでなく推移的な歴史的局面にすぎず、社會的發展の無限の階梯上の一階段にすぎぬものである。かくて資本主義の出現の學說は、論理的に資本主義の没落の學說に變じ、資本の生産様式に關す

る科學は、社會主義の科學的基礎づけに變じ、ブルジョア階級の理論的支配要具は、プロレタリアートの解放のための革命的階級闘争の武器に變ずる。

經濟學の一般的課題のこの第二の部分は、ブルジョア階級のフランスの學者も、イギリスの學者も、況んやドイツの學者も解決しなかつたのは確かである。資本主義生産様式の理論から最後の結論を引き出したのは、當初から革命的プロレタリアートの立場に立つてみた一人の人間——カール・マルクスその人であつた。それによつて社會主義と近代勞働者運動とが、初めて科學的認識の動かすべからざる基礎の上に据ゑられたのである。

人間の平等および友愛を基礎とする社會秩序の理想としては、共產主義共同社會の理想としては、社會主義は數千年來のものである。キリスト教の最初の使徒の間においても、中世の種々の宗徒の間においても、農民戦争においても、社會主義理念はつねに現行社會に對する反抗の最も急進的な表現として輝いてきた。しかしながら如何なる時代にも、如何なる歴史的環境においても推擧され得る理想としては、社會主義は個々の、狂信者の美しい夢、雲層に映ずる彩虹のように到達すべからざる黄金いろの空想にすぎぬ。

十八世紀末と十九世紀初めに、初めて社會主義理念は、宗教的宗徒的狂信から脱して、むしろ出現しつゝある資本主義が社會に惹き起した恐怖と荒廢との反映として、初めて力と重みとを以て現はれた。しかもその時にもなほ社會主義は、根本から見れば一個の夢であり、個々の勇敢な頭腦の案出に外ならぬものであつた。プロレタリアートの革命的擡頭の最初の先頭戰士、即ちフ

フランス大革命中において社會平等の強力的實施のために突撃した、グラックス・バブーフの語るところを聞けば、彼れの共產主義的努力の基礎をなしてゐた唯一の事實は、現行社會秩序の極度の不公平といふ事實である。これを彼れは熱情的な論文や、パンフレットや、彼れに死刑を宣告した法廷の前での辯護演説において、極度の暗澹たる色彩を以て飽かず描き出した。彼れの社會主義の福音は、現行秩序の不公平、極少數の怠け者を富ませ、支配させるため犠牲となつてゐる労働大衆の悩みと苦しみ、貧困と屈從とに對する訴への單調なる繰返しである。バブーフによれば現行社會秩序は没落するに値ひするといふことで充分なのであつて、たとへばジャコバン黨が一七九三年に政治的權力を握つて共和制に導き入れたように、國家權力を占領して平等の制度を導き入れる斷乎たる人々の一群がありさへしたら、現行社會秩序はすでに百年前に實際上に倒壊することができたといふのである。

フランスのサン・シモンおよびフリエー、イギリスのオウエンの三大思想家によつて、前世紀の二〇年代および三〇年代に、一層多くの天才と光彩とを以て主張された社會主義理念は、これと全然別個の方法に基いてはゐるが、しかも本質的には同一の基礎の上に立つものである。たしかに右の三人のうちの誰れも、社會主義の實現のための革命的な權力奪取といふようなことを決して考へなかつた。反對に彼れ等は大革命の後を承けた全セネレーションと同じく、あらゆる社會的顛覆とあらゆる政治とに幻滅を感じて、純平和的な宣傳手段の公然たる信奉者であつた。にも拘らず社會主義理念の基礎は、彼れ等三人の場合にいづれも同一であつた。即ち彼れ等の社會

主義理念は、その本質において一個の天才的頭腦の計劃、案出にすぎぬものであつて、彼れ等は憐める人類をブルジョア社會制度の地獄から救ひ出すために、人類に對してその計劃を實現することを奨めたのであつた。

そういふわけで右の社會主義理念は、その批評と、その未來の理想の魅力とも拘らず、時代の現實上の運動と闘争との上に、これといふ影響を與へることなしに終つたのである。バブーフは革命史のページの上に光輝ある數行を残した外は、何等の痕跡をも後に残すことなしに、小團の友人と共に、揺り動く小舟のように反革命の荒浪の中に没してしまつた。サン・シモンとフリエーとは、熱心な信奉者の宗徒をものにしただけであつて、これらの信奉者は社會的理念の鼓舞や、幾多の批評や企てを盛んに播き散らかした後に、間もなく分散するか新たな方向に向ふかしてしまつた。オウエンはプロレタリア大衆の上に一番多く働きかけたのだが、しかもなほ彼れの影響は、三〇年代と四〇年代とに、イギリス労働者の精鋭分子の一群を感奮させた後に、跡方もなく消えてしまつた。

社會主義指導者の新時代の一團が四〇年代に現はれた。——ドイツのワイトリング、フランスのブルドーン、ルイ・ブラン、ブランキイがそれである。労働階級はすでに自ら資本支配に對する闘争を始めてゐたのであつて、彼れ等はフランスにおけるリヨン絹織工の突發的暴動や、イギリスにおけるチャーチスト運動において、階級闘争への信號を與へてきた。だがこの被搾取大衆の自然發生的衝動と、各種の社會主義理論との間には、何等直接の聯絡が存在してゐなかつた。

革命化しつゝあるプロレタリア大衆が、一定の社會主義的目標を認めてゐたわけでもなければ、社會主義理論家が自分等の理念を、労働階級の政治的闘争の上に打ち樹てようと試みもしなかつた。彼れ等の社會主義はブルドーンの公平な商品交換のための庶民銀行や、ルイ・ブランの生産組合の如く、抜け目なく考案された或る制度物を通じて實現されるものだつたのである。社會革命の實現のための手段として、政治的闘争に頼つた唯一の社會主義者は、ブランキイだつた。それによつてまた彼れは、その時代におけるプロレタリアートと、その革命的階級利益との唯一の眞の代表者だつた。それにも拘らず彼れの社會主義は、その根本においては、依然としていつの時代にも實現され得るところの一個の計劃案であつて、それは革命的少數者の決然たる意志と、この少數者によつて實施されるところの突如たる變革との成果として實行され得るものだつたのである。

一八四八年はあらゆる種類における舊社會主義の頂點であり、同時にまたその危機だつたと言はなければならぬ。パリのプロレタリアートは、從來の革命的闘争の傳統に感化され、種々の社會主義體系に煽動されて、公平なる社會制度といふ漠然たる理念に熱情的に傾倒した。ルイ・フィリップのプロレテア王制が倒されるや、パリの労働者は直ちにその権力的地位を利用して、畏怖せるブルジョアジーから今度は「社會的共和制」と新しい「労働者の組織」との實現を要求した。このプログラムの實施のため、臨時政府はプロレタリアートから有名な三箇月の期限を與へられ、その間を労働者は餓えながら待つてゐたのに、ブルジョアジーと小ブルジョア團とは陰密

に武装をこらして、労働者の打破を準備してゐたのである。この期限は記憶すべき六月虐殺を以て終了し、こゝにいつの時代にも實現され得る「社會的共和制」なる理想は、パリのプロレタリアートの血潮で以て息の根をとめられてしまつた。一八四八年の革命は社會的平等の領國をもたせらずに、却つてブルジョアジーの政治的支配と、第二次帝國下における資本家的搾取の思ひもかけぬ飛躍とをもたらしたのである。

しかも舊派の社會主義が、六月一揆の紛碎された堡砦の下に、永久に葬られてしまつたように見えた。この同じ時代に當つて、マルクスおよびエンゲルスの社會主義理念が、全然新たな土臺の上に打ち樹てられたのである。兩人は社會主義のための基點を、現行社會制度の道德的非難にも求めなければ、社會的平等が今日の國家の中に密輸入され得るといふような、極めて人の氣に入り相な、誘惑的な計劃案の發明にも求めなかつた。彼れ等は今日の社會の經濟的關係の研究に向つた。こゝに、資本主義的無秩序の法則そのものの中に、マルクスは社會主義的努力のための現實の手がかりを發見したのである。フランスおよびイギリスの古典經濟學者は、資本主義經濟が生活し發展するところの法則を發見したとすれば、マルクスはその半世紀後に、彼れ等が仕事を中止した、丁度その箇所から仕事を開始したのである。マルクスは今日の經濟制度の法則が、無秩序の生育によつて絶えず社會の存立を脅やかし、破滅的な經濟的政治的破局の連續となることによつて、經濟制度それ自身の破滅を目指してゐるものであることを發見した。故にマルクスが立證したように、社會總體と人類文化とが制御すべからざる無秩序の激動の中に、没落するので

ない場合は、資本支配の成熟の或る段階において、労働する社會總體によつて意識的に編成された計劃的な經濟様式への推移を必然ならしむるものは、實に資本支配のそれ自身の發展傾向そのものなのである。そして支配的資本は自己の未來の墓掘者たるプロレタリアを絶えず益々大きな集團に糾合することによつて、またこの資本が地上のあらゆる國々に擴がつて、一個の無秩序的な世界經濟を樹立し、それと同時に萬國のプロレタリアが資本主義的階級社會の排除のために一個の革命的な世界權力に結合するための土臺をつくり出すことによつて、この支配的資本そのものが、右の臨終の時を絶えず益々力強く促進してゐるのである。これによつて社會主義は、設計案でも、美しい空想でも、各國の個々の労働者群の獨力を以てする實驗でもなくなる。國際的プロレタリアートの共同の政治的行動綱領として、社會主義は、資本主義の經濟的發展傾向の一成果であるが故に一の歴史的必然である。

そこでマルクスが何のために彼れ自身の經濟學說を公式の經濟學の圏外に置いて、これを『經濟學の一批判』と名づけたかは明白である。マルクスによつて説明された資本主義的無秩序とその將來の没落との法則は、たしかにブルジョア學者によつて創始された經濟學の繼續ではあるが、しかしその終局の結果においてはブルジョア經濟學の出發點とは隔然たる相反を成すところの繼續である。マルクスの學說はブルジョア經濟學の見であるが、それを生むのに母親が命がけだつたところの見である。マルクスの理論の中に經濟學は完成したが、同時にまた科學としての經濟學の終了をも見たのである。今後これに引續くべきものは何かといへば——マルクス學說を個々

に互つて仕上げることの外には——たゞ一つ、この學說を行爲に移すこと、言ひかへれば社會主義經濟秩序の實現のための國際的プロレタリアートの闘争あるのみである。かくて科學としての經濟學の終結は、一個の世界史的事蹟たることを意味する——即ちこれを、計劃的に編成された世界經濟の實行に移すことを意味する。經濟學說の最後の章は、世界プロレタリアートの社會革命である。

經濟學と近代的労働階級との特殊の聯絡は、かくて一個の相互關係であることを證する。一方においてはマルクスによつて完成された如き經濟學は、他のあらゆる學問以上にプロレタリア啓發の缺くべからざる基礎であるとすれば、他方においては、階級意識あるプロレタリアートは今日經濟學の學說に對する、唯一の理解能力あり感受能力ある傾聴者たるものである。初めまだ舊封建社會の崩壊しつゝある衰亡を眼前にして、曾てフランスのケネーとボアギユベルや、イギリスのアダム・スミスとリカルドは、矜持と感激とを以て新興ブルジョア社會を眺めて、ブルジョアジーの一千年王國の擡頭とその「自然的」社會的調和とに對する固き信念を以て、慧眼を憚るところなく資本主義法則の奥底に向けたのであつた。

爾來絶えず有力に膨大しつゝあるプロレタリア階級闘争と、殊にバリ・プロレタリアートの六月一揆とは、自分は神の如きものであるといふブルジョア社會の信念を早くより打ち破つてきた。近代的階級對立といふ智慧の果實を食つて以來、ブルジョア社會は、彼れ等の經濟學の創始者等が曾て世界にこの事實を剝き出しに示したやうな、そらいふ露骨さを忌み嫌つてゐる。しかもな

近代プロレタリアートの代辯者が、その致命的武器を、外ならぬブルジョア經濟學者のそらいふ學問的發見から取り出したことは、今日明白な事實である。

そらいふわけで數十年このかた、ひとり社會主義經濟學ばかりでなく、曾て現實の科學だつた限りのブルジョア經濟學も、今日有産階級の間には説いても一向聽かれぬのである。ブルジョア經濟學の偉大なる父祖を理解する能力もなく、況んやそこから現はれてブルジョア社會に吊鐘を鳴らしてゐるところの、マルクス學說を受け容れる能力もなく、今日のブルジョア學者は經濟學の名の下に、雑多な學問上の思想と、手當り次第の滅茶苦茶なものとの屑物を講義してゐるのであつて、もはや彼れ等は資本主義の現實の傾向を研究するといふ目的には從はず、反對に資本主義を最上の、唯一に可能な、永久の經濟制度として擁護するために右の傾向を隱蔽するといふ、逆の目的を追つてゐるにすぎぬ。

ブルジョア社會から忘却され、裏切られて、今や經濟科學は階級意識あるプロレタリアの間のみ聽き手を求めて、彼れ等の間に理論的理解のみならず力強い實行を見出そうとしてゐる。經濟學こそは有名なラサールの言葉が第一番にあてはまるところのものである——「科學と勞働者、社會のこの兩極が抱き合ふときは、すべての文化的障礙をその腕に絞め殺してしまふであらう。」

第二章 經濟史 (一)

極く古い極く原始的な經濟狀態に關する吾々の知識は、極く近頃になつてのことである。まだ一八四七年にはマルクスおよびエンゲルスは、科學的社會主義の最初の古典的文書『共產黨宣言』に、「從來のすべての社會の歴史は階級闘争の歴史である」と書いてゐた。科學的社會主義の創始者たる彼れ等は、こらいふ見解を發表した同じ時代において、すでにあらゆる方面から、新しい發見によつて揺り動かされ出した。人類社會の古い經濟狀態に關して、從來知られてゐなかつた洞察が殆んど毎年現はれ、そしてこれらの研究は、過去の歴史の中には非常に長期に亘つて、ただ何等階級闘争が存在してゐなかつた時代があつたに相違ないといふ結論に導いた。けだしその時代には、一般に種々の社會階級への分裂や貧富の差別がなく、何等私有財産が存在してゐなかつたといふ理由からである。

一八五一—一八五三年には、ゲオルヒ・ルートヴィヒ・フォン・マウラーの劃期的著作の最初の分、『マルク、農場、村落および都市制度、並びに公權力史緒論』が遂に發行された。この著作はゲルマン民族の過去と、中世の社會的および經濟的構造との上に新しい光明を投げたものであ

る。すでに人々は数十年このかた、或はドイツ、或は北方諸國、或はアイスランド等の諸々方々において、土地共有が以前にその場所に行はれてゐたこと、即ち農業共產制度が以前に存在してゐたことを示唆する幾多の原始的土制制度の注目すべき遺物に出會つてゐたのだが、最初のうちはそつういふ遺物を解釋する術を知らなかつた。從來、特にメーゼルおよびキンドリッガー以來、一般に普及してゐる見解によれば、ヨーロッパにおける土地の耕作は、個々の農場から出發したものであつて、各農場は分離せる一個の耕地を以て圍繞され、そしてこの耕地は農場主の私有財産だつたといふのである。そして後に中世期になつて始めて、安全の度が増したために、從來分散してゐた住居が寄合つて村落となり、從來分離してゐた農場耕地が合體して村落耕地となつたのだと信ぜられてゐた。この見解は精密に考察すれば本統らしくは思へない——けだしこの見解を基礎づけるためには、部分的に遠く隔立つてゐた住居が、單に別の場所に再び建てるために打ち壊されたといふこと、今まで耕地が自分の農場の周圍にあつて、折角完全に自由に耕作ができる便利な地位にあつたのを各自拋棄して、その耕地をわざわざ細長い條地に分割して、幾多の分圖に分散させて、村落員に完全に依倚する不自由な耕作を伴はせて、再びこれを受取つたといふこと、そつういふ信じ難い事柄を假定しなければならぬ。——こつういふ理論は如何に本統らしくなくとも、しかもそれは前世紀の中葉に至るまでは、依然として最も有力だつたのである。フオン・マウラーが初めてすべてこれらの個々の發見を、大膽な大規模な、一個の理論に綜合し、夥しい事實の材料と、古代の記録、文書、法制における徹底的探究とに基いて、土地の共有は後代

の中世期に初めて生じたものでなく、一般に最初からヨーロッパにおけるゲルマン民族新開土着の典型的且つ一般的な最古の形態だつたことを、究極的に證明したのであつた。或に二千年以前には、そしてなほ古く、記録歴史が今以て窺ひ得ざるゲルマン民族の太古時代には、ゲルマン民族の間に今日の状態とは根本的に異つた状態が行はれてゐたのである。成文強制法律を伴つた國家も、貧者と富者との分裂、支配する者と勞働する者との分裂も、當時ゲルマン民族の間には何等知られてゐなかつた。彼れ等は自由な種族および民族を形づくつてゐた。これは早くよりヨーロッパをあちこち移動し、最初は一時的に、後には永續的に定住するに至つたのである。即ち土地の最初の耕作は、ドイツにおいてはフォン・マウラーの立證によれば、個人からでなく民族および種族全體から發したのであつて、それは恰かもアイスランドにおいては、「フレンダリッドおよびスクルダリッド」——略し友人團體と從臣團體いふ意味——と名付けられてゐた比較的大きな社會から發した如くであつた。ローマ人によつて傳へられてゐる古代ゲルマン民族に關する最古の報道にしろ、種々の傳來的文物の調査にしろ、いづれもこの見解が眞理であることを保證してゐる。ドイツに最初に住まつたものは牧畜民族であつた。他の遊牧民族の場合と同じく、矢張り彼れ等の場合も、牧畜、從つて豊富な牧地の所有が主眼を成してゐた。それにも拘らず彼れ等がいつまでも農業なしには存在し得なかつたことは、時代の近いと古いとを問はず、すべて他の遊牧民族の場合と同じであつた。そしてユリウス・ケーザルの時代、即ち今から約千年以前には、當時漸やくローマに知られ始めたゲルマン諸民族の中で、スエーヴェンまたはシュワールベン族は、

まさにこういふような、農業と牧畜とを一緒にした状態にあつたのである。但しこの場合は牧畜が主で、農業は幾分從屬的なものであつた。しかしこれと似寄つた状態、それと似寄つた風俗文物が、フランク、アレマンネ、ヴァンダールその他のゲルマン種族の間にも確立してゐた。すべてゲルマン人は、種族および民族に綜合されてから、初めは諸所に短期間定住して土地を耕やし、さて一層力強い種族が前からか後からか迫つてきた場合、若しくは牧地が最早や充分でなくなつた場合に、すぐさま再び引き移つて行つた。流浪的種族が靜穩になつて、如何なる種族も他の種族を攻め立てないやうになつたとき、初めて彼れ等は比較的長期間をういふ移住地にとゞまるやうになり、かくして次第次第に定まつた居所を維持するやうになつた。然るにかゝる定住は、時代の早いと遅いとを問はず、自由地であると、舊ローマまたはスラヴの領地であるとを問はず、すべての種族および氏族の間に行はれてゐたのである。その場合種族毎に、そして各種族にあつては氏族毎に、一定の地域を占領し、その地域は關係者のすべてに共通に屬してゐた。古代ゲルマン人は、土地に關して俺のものだの、お前のものものといふことを知らなかつた。各氏族は定住した場合には、謂はゆるマルク組合を形づくり、マルク組合は所屬地域全體を共同に經營し、分割し、耕耘したのである。個人は抽籤によつて割地を贈與され、一定の期間だけ利用を委ねられ、この場合土地割當の嚴密な平等が格守されてゐた。マルク組合は同時に多くの場合武装能力ある男子の百人組フンデルツマクトを形成してゐたのだが、マルク組合の經濟的、法律のおよび一般的事務は、すべてマルク組合員自身の集會で規定され、マルク組合員はまたマルク首長およびその他の公共役

員を選出した。

空地や耕作し得べき土地が缺けてゐるために、比較的大規模に定住することが不可能な山地、森林、沼澤地域、たとへばオーデンワルト、ウェストファーレン、アルプス地方においては、ゲルマン民族は個々に農場を作つて定住したが、しかもその間に一の組合團體を構成してゐた。但しこの場合は耕地でなく、草地、林地、牧地が村落全體の共有物、謂はゆる「アルメンド」を成し、また一切の公共的事務はマルク組合によつて處理されてゐた。

數多の——多くの場合數百の——こういふマルク組合の綜合たる種族は、主として最高の司法的および軍事的單位體たる働きをなすのみであつた。かゝるマルク組合の組織は、マウラーがその大著の第十二卷において證明してゐるやうに、中世の早くからずつと後に近代に入るまでの、全社會的組織の基礎、謂はゞその最小の細胞を成してゐたものであり、封建時代の莊園や、村落や、都市は種々の改修を加へられた上で右のマルク組合から形成されたものであつて、このマルク組合の遺物は今日に至るまで、中央および北ヨーロッパの個々の地方において發見されてゐる。ドイツおよび北方諸國における原始的な土地共有制度の最初の發見が世に現はれた時は、これは或る特別の、ゲルマン民族特殊の制度が見付つたのであつて、この制度はゲルマン民族性の特殊性からのみ説明されるものだといふ理論が現はれた。マウラーその人は、ゲルマン民族の農業共產主義に對するかゝる民族的解釋には全然囚はれることなく、且つ他の諸民族の間にも類例の實例が存することを指摘したに拘らず、依然として古代の土地マルク組合はゲルマン民族の公共的

および法制的事情の一特性であり、「ゲルマン精神」の一發露であるといふ斷定的命題が、主としてドイツに行はれてゐたのである。然るにゲルマン民族の原始的村落共產主義に關するマウラーの最初の著作が現はれたと殆んど同一の時に、ヨーロッパ大陸の全然別な一部分における新發見が世に現はれた。即ち初めロシア皇帝ニコラス一世の希望に基き、四〇年代にロシアを旅行したウエストファールの男爵フォン・ハックスタウゼンは、一八四七—一八五二年にベルリンにおいて、『ロシアの國內状態、民族生活、特に土地制度に關する研究』を公けにした。世界はこの著作から、ヨーロッパの東部には現在もなほ類似の制度が存立してゐるのを知つて驚いた。原始村落共產主義は、ドイツでは後代の幾百年、幾千年の成層から、骨折つてその遺物を採し出さなければならなかつたのに、本物の原始村落共產主義が東隣大帝國において、その農奴制度の中に突如として復活したのである。上記の著作や一八六六年にライプチヒで刊行された著作、『ロシアの土地制度』の中でハックスタウゼンは、ロシアの農民は耕地、草地、林地については少しも私有なるもの知らず、村落全體がそつといふものの所有者と見做されてゐるのであつて、個々の農家は一時的使用のために割地を受けとるにすぎず、この割地はまた——古代ゲルマン民族の場合と全然同じく——抽籤によつて分配されてゐるといふことを證明した。

ハックスタウゼンがロシアを旅行して研究した時代には、この國には農奴制度が全力を以て支配してゐたことを思へば、苛酷な農奴制度と專制的國家機構との鋼鐵の被蓋の下に、ロシアの村落が、土地共產制度と村落會議即ちミールを以てする一切の公共事務の協同處理とを伴つて、一

個の獨立の小世界たる光景を呈してゐたといふ事實は、一見すれば極めて驚くべきことであつた。こつといふ特質の發見者たるハックスタウゼンは、ロシアの土地共同體は太古の斯拉ヴ家族團體の一產物であつて、かゝる家族團體は今日なほバルカン諸國において南斯拉ヴ民族の間に發見され、そしてまた十二世紀およびその後になつても、ロシア法典の中に完全に効力を發揮してゐたと説いた。ハックスタウゼンの發見はロシアにおける斯拉ヴ國粹主義の精神のおよび政治的全潮流によつて、歡喜を以て捉へられた。斯拉ヴ世界とその特殊性とを讚美し、ゲルマン文化を伴ふ「腐つた西歐」に對する斯拉ヴ世界の「消費されざる力」を讚美するこの潮流は、爾來二十年乃至三十年の間、ロシアの農民共同體の共產制度に最も有力なる基點を見出した。斯拉ヴ國粹主義が反動主義分派と革命主義分派とに分裂したにつれて、その土地共同體は、それぞれこれらの分派に従つて、或はロシア民族の三つの生粹なる斯拉ヴ的文物——ギリシヤ正教、ツァール專制主義、農民的家長的村落共產主義——の一つとして稱揚されるかと思へば、或はこれと反對に、最近の將來においてロシアの中に社會主義革命を導き入れ、かくして資本主義的發展を通過することを避けて、西歐よりも遙かに早く社會主義の天國の中に直接に飛躍するための適當な基點として稱揚された。それにも拘らず斯拉ヴ國粹主義のこの兩極は、ロシアの土地共同體は斯拉ヴ特殊の現象、斯拉ヴ種族の特殊性から説明さるべき現象であるといふ見解を持してゐる點において、完全に一致してゐたのである。

そらする間にヨーロッパ民族の歴史に、もう一つの要因が加はつた。この原因はヨーロッパ民

族を新大陸と接續させ、特殊の公共的制度、原始的文化形態が、ゲルマン民族の圏内にもスラヴ民族の圏内にも屬しない民族の間にも存してゐることを、極めてハッキリと悟らせたのである。今度は科學的探究や學問的發見でなく、ヨーロッパの資本主義諸國の狡猾なる利害と、實際的植民政策におけるこれらの諸國の經驗であつた。資本主義の時代たる十九世紀には、ヨーロッパの植民政策は新しい軌道に入り込んだ。今度は新世界に對して最初の大騒ぎが行はれた十六世紀におけるように、貴金屬、香料、貴重なる裝飾品、奴隸等、新たに發見された熱帶諸國の財寶および天富の極めて急激な掠奪——スペインおよびポルトガルが大仕掛けに行つたような——が最早や主眼ではなくなつた。そしてまた十七世紀にオランダがそれを始めて、イギリスに手本を示したような、單に有力な商機を利用して海外諸國の種々の原料をヨーロッパの互市場に輸入し、これらの國の土人に對しては値打ちのない雑多な屑物を押しつけるようなことも、最早や主眼ではなくなつた。今度は主眼とされたものは、植民といふ舊來の方法——因みにこの方法は今日に至るまで繁昌してゐるものであつて、未だ曾て實行の圏外に置かれたことのないものである——の外に、「母國」を富ますために植民地の人口を一層持久的、組織的に搾取するといふ新しい方法であつた。これには二様の方法が役立つ——一は各國の富の最も重要な物質的源泉たる土地を事實上に占領することであり、第二は住民の廣汎なる大衆に絶えず課税することである。ところがヨーロッパ植民強國は、こういふ兩様の企てを實施するに際して、あらゆる異國において、不思議な頑固な障礙物に出會つた。即ちそれは土人の一種獨特の財産組織であつて、これがヨーロッパ

人による掠奪に對して最も頑強な抵抗を續けたのである。從來の所有者の手から土地を奪ふためには、まづ始めに誰れが土地の所有者であるかを確かめて置かねばならなかつた。また單に課税するだけでなく、納税を強要し得るためには、納税される人間の負擔能力を確かめて置かねばならなかつた。茲においてヨーロッパ人はその植民地において、彼れ等にとつて全く縁のない事情、即ち所有財産の神聖といふヨーロッパの概念を逆立ちさせるような事情に遭遇した。こういふ事柄をイギリス人も南アジアにおいて、フランス人も北アフリカにおいて、一様に經驗したのである。

十七世紀が始まると同時に始まつたイギリス人のインド占領は、全沿岸およびベンガルを一步一步占領した後、十九世紀において始めて北部における重要な五河地方の征服と共に終りを告げた。だが政治的征服の後に、初めてインドの組織的搾取といふ困難な仕事が始まつたのである。この場合イギリス人は一步毎に非常に驚くべき事柄を經驗した——即ち彼れ等はそこにありとあらゆる大小の農民共同体を見出したのであるが、それらの共同体は數千年以來その土地に根をおろし、稻を植ゑ、靜謐な秩序立つた關係の下に生活してゐたのだが——恐るべきことには——この靜謐な村落の中には、土地の私有者といふものを見出すことができなかつた。誰れも自分が小作してゐる土地や、自分が耕作してゐる耕地を、自分のものと呼ぶことを得ない。従つてまたそれを賣つたり、賃貸したり、負債の抵當に入れたり、滞税のため入質したりすることも許されない。この共同体は或は大氏族全體を包含する場合もあり、或は氏族から分れた數個の家族

しか含まない場合もあるが、こゝにいふ共同體の所屬員は密接に且つ忠實に綜合してをり、彼れ等にとつては相互間の血縁が一切のものであつて、個人の所有は何にも値ひしないのである。然り、イギリス人はヒンドスおよびガンヂスの沿岸に、こゝにいふ土地共產主義を發見して喫驚したのであつて、この共產主義の前には、古代ゲルマン民族のマルク組合の共產主義的慣行も、スラヴ民族の村落共同體のそれも、殆んど私有制度に墮落してゐると言つても差支へないほどである。

一八四五年インド駐劄イギリス稅務廳の報告に曰く、「吾人は何等永續的持地を見ない。各人は耕作持地を、耕作の仕事が續く間所有するだけである。持地が耕作されずに置かれるときは、共同地に戻り、他の者は耕作するといふ條件の下に誰れでもこれを引取ることが出来る。」

同じ時代に、パンヂャブ（五河地方）における一八四九—一八五一年間の行政に關する政府の報告に曰く、「この共同體において血縁の感情と、共通の祖先から出たといふ意識とが、如何に力強いかを觀察するのは極めて興味あることである。——輿論はこの制度を維持することを主張してゐるのであつて、祖先が一代または二代の間共有地に何等持分を有しなかつた場合でも、その子孫がこの共有地に持分を認められる場合が稀れではない。」

インド氏族共同體に關するイギリス樞密院の報告に曰く、「かゝる形の土地所有の場合には、如何なる氏族の一員と雖も、共同體所屬地のかくかくの部分か、自分の所有に屬するといふことは愚か、一時的使用のためにのみ自己に屬するといふことすらも證明することはできぬ。共同經濟の產物は共同金庫に納められ、一切の需要に對してそこから支辨される。」故にこゝには一般に、

農業季節の間だけの田地の分配すらも認めることはできぬ。共同體農民は耕地を共同に所有し、耕作し、收穫も共同の村落穀倉——イギリス人の資本家的な眼には「金庫」と映ずるのは無理もない——に運び共同の勤勉の成果を以て、彼れ等のつゞましい欲望を仲よく充たすのである。五河地方の西北隅、アフガニスタンの國境に接してゐる地方には、もう一つ別に、私有財産といふ概念を嘲笑するような極めて奇異な風習が行はれてゐた。この場合は田地が分配され、定期的に交換されるが——不思議なことには——個々の農家がそれぞれ自分の耕地を交換するのでなく、諸々の村落全體が五年毎に土地を交換し、その際に全村落を擧げて移住するのである。インド駐劄イギリス稅務官ジェームスは、一八五二年に主務廳に報告した中に、次ぎの如く記してゐる。「予は今日まで或る地方に維持されてきてゐる極めて特殊な風習について緘黙するわけに行かぬ。即ちそれは個々の村落やその分村の間における土地の定期的交換である。若干の地區では田地だけが交換され、他の地區では住家すらも交換されてゐる。」

故に明らかにこゝでも矢張り一定民族の特殊性に出會つたわけであつて、今度は「インド的」特殊性なのである。だがインド村落共同體の共產主義制度は、その地理的位置によつても、また血統と親族關係との力によつても、等しくこの制度が傳統的な原始的性質のものであることを示唆したのである。取りも直さずインド人の最古の居處たる西北地方において、共產主義の最古の形態が確認されたといふことは、共有制度は力強い親族團體と共に、數千年昔の風習に遡るべきものであるといふ結論を明瞭に引き出すものであつて、この風習は、インド人がその新しい郷土

たる今日のインドに移住した時の最初の新聞土着と結びついてゐたものである。オックスフォード大学の比較法學教授にして、曾てインドにおけるイギリス政府の一員たりしサー・ヘンリー・メーンは、インドの農業共同體を講義の題目となし、これをマウラーがドイツに對して確證し、ナッセがイギリスに對して確證したマルク組合と比較して、ゲルマン農業共同體と同一性質の最古の制度であるとした。

この共產主義制度が古稀の歴史的年齡を有してゐるものであることは、イギリス人にとつては、もう一つ別な方面からも、即ちこの農業共同體がイギリス人の徵稅術および行政術に對して、驚くべき頑強さを以て抵抗したといふことから、窺ひ知られた筈である。イギリス人は十年間に亘る鬭争において、あらゆる暴行、奸計、インド民族の古來の權利と支配的な權利概念とに對する假借なき干渉の下に、あらゆる所有關係の恢復すべからざる混亂と、全般的不安と、農民大衆の零落とをもたらすことに初めて成功した。舊來の紐帶は切斷され、共產主義の靜穩な別世界的狀態が粉碎され、争訟、不和、不平等、搾取がこれに代つた。一方には巨大な太地所、他方には無資産の農民小作人の數百萬の大集團がその結果として現はれた。私有制度は揚々とインドに乗り込み、それに伴つて飢餓チブスと壞血病とが永久の賓客としてガンヂスの平原に乗り込んだ。

インドにおけるイギリス植民者の發見によれば、古代農業共產主義はすべてインド・ゲルマン大民族の三分派——ゲルマン民族、スラヴ民族、インド民族——の間にすでに發見されたのだから、インド・ゲルマン民族圏内の古い特殊性と見做されるかも知れぬが、こゝにいふ土俗學的概

念が如何に確定なものであるかは、これと時を同じうして、アフリカにおけるフランス人の發見がすでにこの民族圏をはるかに突破したことによつても知られる。即ち茲にフランス人の發見は、アフリカ北部におけるアラビア人およびベルベライ人の間に、ヨーロッパの中心とアジア大陸とに發見されたと同一の制度が存立してゐることを確かめたのである。

アラビア遊牧民族の間では、土地は氏族の財産であつた。フランスの探考者ダレストは一八五二年に記して曰く、この氏族財産は代々傳つてゐて、如何なるアラビア人と雖も、一片の土地を指してこれは我がものであると言ふことはできぬと。

全然アラビア化したカピレ族の間には、氏族團體がすでに著しく個々の分枝に別れてゐるが、しかもなほ氏族の力が依然として大きく、彼れ等は租稅を連帶で負ひ、個々の家族の間に食料として分配されるよゝになつてゐる家畜を共同で買入れ、すべての紛争事件や土地所有については、氏族相談會が最高の仲裁機關であり、カピレ族の中に移住するためには、各人にとつて氏族の同意が必要であり、また氏族相談會は不耕地を左右してゐたのである。しかし家族の不分割財産が常則と見做されてゐた。家族と言つてもそれは今日のヨーロッパの意味におけるよゝに、個々の一夫婦生活を包含してゐるのでなく、聖書の中に古イスラエル人について描かれてゐるよゝな一個の典型的な父權制的家族、即ち父、母、子、その妻、その子供、孫、叔父、叔母、甥、從兄弟から成る一大親戚圏を包含してゐたのである。もう一人のフランスの探考者ルトゥルヌが、一八七三年に語つてゐるところによれば、この大家族の中で、不分割財産を普通に家族のうちの最

年長の一員が左右してゐるのだが、この家族員は家族全員からこゝろいふ役員に選ばれるのであつて、すべて重要な事件、殊に土地の賣買については全家族相談會に相談しなければならぬのである。

フランス人がアルゼリアを植民地とした時のアルゼリア住民は、そゝろいふ性質のものであつた。イギリスがインドでやつた通りのことを、フランスが北アフリカでやつた。いたるところにヨーロッパの植民政策は、原始的氏族團體とその共產主義制度とにぶつかり、後者はヨーロッパ資本の搾取計劃とヨーロッパの財政政策とに對して、個々の人間を保護したのであつた。

こゝろいふ新しい經驗と同時に、昔日のヨーロッパの植民政策と新世界への掠奪遠征との、忘れかけられてゐた古い記憶が新たに喚び起された。スペインの國家記録保存所や僧院の古びた記録の中には、永く數百年以來南アメリカの或る神祕國に關する奇異な傳説が保存されてゐて、それによればスペイン人征服者は、すでに大發見時代において、極めて奇異な制度を發見してゐたのである。この南アメリカ神祕國に關する漠然たる知識は、すでに十七世紀および十八世紀においてヨーロッパの文獻の中に入り込んでゐた。スペイン人が今日のペルーに發見したインカ帝國に關する知識がそれであつて、この國においては寛大なる專制君主の父の如き神權政治の下に、人民が完全な共同財産を以て生活してゐた。ペルーにおける共產主義の傳説國に關する空想的觀念は、爾來根強く維持されてきて、一八七五年にはドイツの或る著述家は、インカ帝國のことを「人類史において殆んど唯一の」位置を占めてゐるところの、神權政治を土臺とせる社會的帝國

であつて、「社會民主主義者が——理想的に見れば——現在努力してをり、しかも如何なる時代にも達成しなかつた事柄の大部分」がこゝろでは實際上に實行されてゐたとさへ述べてゐる。しかしながら、やがてこの不思議な國とその風習とに關する一層精確な資料が公表されるに至つた。

一八四〇年には會てメキシコの元老院議員たりしアロンゾ・ツーリタの手に成る、新世界の舊スペイン植民地における行政および農村事情に關する重要な報告書が、フランス語に譯されて發表された。そしてまた十九世紀の半ばには、スペイン政府は、アメリカのスペイン領土の占領および行政に關する古文書を、記録保存所から世の中に出す氣になつた。それによつて、大西洋彼岸の諸國における資本主義以前の古い文化階段の社會的狀態に關する資料に、新たに重要な或る一つの記録が附加されたのである。すでにツーリタの報告書を基礎として、六〇年代にロシアの學者マキシム・コヴァレフスキイは次ぎの如き結論を下した。曰く、傳說的インカ帝國は、すでにマウラーが古代ゲルマン民族に對して各方面から闡明したと同一の原始的農業共產主義關係が支配してゐた國に外ならぬものであつて、この原始的農業共產主義は、ひとりペルーのみならずメキシコにおいても、その他一般にスペインによつて占領された新大陸全體において支配的形態だつたものである。その後種々の發表によつて舊時のペルー農業事情の精細なる研究が可能となり、原始的土地共產主義の新たなる圖景——しかも新大陸において、且つ從來の幾多の發見の場合とは全然別の人種、全然別の文化階段、そして全然別の時代においての——が明らかになつた。

こゝにこの原始的農業共產主義組織は——想像もできぬ太古の時代以來ペルー種族の間に行はれてゐたものであつて——十六世紀即ちスペイン人侵略の時代にも、なほ完全なる生氣と力を以て存立してゐたのであつた。親族團體、即ち氏族がこゝでもまた、各村落毎にまたは二三村落毎に土地の唯一の所有者であり、こゝでもまた耕地が割地に分割されて、年毎に村落の所屬員によつて籤分けされ、こゝでもまた公共事務は村落會議によつて處理され、村落會議はまた首長を選挙する。加之、取りも直さずこの遠い南アメリカの國において、インディアンの間に、ヨーロッパに全然知られなかつたような廣大な共產主義の生々とした痕跡が発見されたのである。即ちこれは大集團家屋であつて、そこには全氏族が共同墓地をもつた幾多の共同集團住區に住居してゐたのであつて、そういふ一住區には四千人以上の男女が住んでゐたと言はれる。謂はゆるインカ族の主要住所だつた都市クスコはそういふ幾多の集團住區から成つてゐて、この集團住區の各々がその氏族の特別の名稱を附せられてゐた。

このように十九世紀の半ばから六〇年に入るまでの間に幾多の資料が残らず世の中に現はれたのであつて、これらの資料は、私有制度は開闢以來存在してゐるものであつて、永遠なものだといふ古來の觀念を無慘にも小口から崩して行つて、やがてこれを微塵に粉碎してしまつた。即ち農業共產主義は最初にはゲルマン民族の特殊性として発見され、次いでスラヴ民族の、次いでインドの、アラビア・カビレ族の、古代メキシコの、それから今度はペルー・インカ奇蹟國家や、その他あらゆる大陸における幾多の「特殊」民族型の特殊性として発見されてきた後に、茲に

この村落共產主義とは一般に何等かの人種または大陸の「民族特殊性」ではなく、文化發展の一定高度における人類社會の一般的典型的な形態であるといふ結論がひとりでに生まれたのである。最初は公けのブルジョア學問、即ち國民經濟學は、こゝいふ認識に對して頑強なる抵抗を以て反對した。十九世紀前半において全ヨーロッパを支配してゐたスミス・リカルドのイギリス學派は、土地共有制の可能を露骨に否定した。曾てスペイン、ポルトガル、フランス、オランダの最初の侵略者の無知および魯鈍が、新たに発見されたアメリカにおいて、土人の農業事情に對して全く無理解な態度を取つて、私有者がゐないといふことを以て、國全體を無雜作に「皇帝の所有」、國庫所屬地と宣したと全く同じことを、ブルジョアの「啓蒙」時代においても、國民經濟學の最大の明星が繰返したのである。たとへば十七世紀に、フランスの宣教師デュボアはインドについて記して曰く、「インド人は何等土地財産を所有してゐない。彼れ等によつて耕作されてゐる田地は、モンゴル政府の財産である」と。そしてモンペリエー大學の醫學者フランソア・ペルニエー氏は、アジアにおける大モグールの諸國を旅行し、一六九九年アムステルダムにおいてこの國に關する有名な記述を公けにして、その中に憤怒を以て叫んで曰く、「この三國家——トルコ、ペルシヤ、前方インド——は、土地所有に對して用ゐられた吾がもの、汝のものといふ概念そのものを滅ぼしてしまつた。この概念こそは世界における一切の善および美の基本概念なのだ」と。資本主義文化らしく見えない一切のものに對する、これと全く同一の大ざつばな無知および無理解を、十九世紀において有名なるジョン・スチュアート・ミルの父のジェームス・ミルといふ學者が曝

露して、英領インド史に次ぎの如く記してゐる。「吾人の觀察してきた一切の事實に基いて、吾人はインドにおける土地財産は支配者に屬するといふ結論にのみ到達し得る。けだし支配者を土地の所有者と認めないとすれば、一體誰れが所有者であるか、答へることが不可能であらう。」土地の所有権は單に數千年來これを耕作してゐるインド農民共同體に歸するものであること、また土地が他人の勞働を搾取する手段でなく、單に勞働してゐる者自身の生存の基礎に外ならぬ國、そらいふ一大文化共同社會が存在し得るものであることは、イギリス・ブルジョア・アジの大學者の頭腦の中には絶對に入り込まなかつたのである。このように精神的眼界が情けなくも殆んど資本家的經濟の支柱にのみ局限されてゐるといふことは、たゞ次ぎの事實を立證するのみであつた。即ち約二千年以前にローマ人、たとへばケーザルの如き將帥やタキツスの如き史家が、彼れ等にとつて全くあかの他人であるゲルマン民族の經濟的および社會的事情について、極めて價値のある觀察と記述とを吾々に残してくれたのに較べて、ブルジョアの啓蒙期の公式學問は、お話にならぬほどちつぽけな眼界と文化史的な理解としかもつてゐないといふ事實である。

今日に限らず、從來あらゆる學問のうちで、支配的な搾取形態の護衛兵たるブルジョア經濟學は、異つた種類の文化形態および經濟形態に對して、一番理解を示してゐなかつた。そして資本對勞働の直接の利害の對抗と闘争場とから、幾分離れて立つてゐる種々の學科には、昔の時代の共產制度を、一定階段における經濟的および文化的發展の一般的な支配的形態と認めることを禁ぜられてゐたのである。最初に農業共產主義を、國際的な、一切の大陸および人種にあてはまる

原始的發展形態と認めるに至つたのは、マウラーやコヴァレフスキイのような法律家、またイギリスの法學教授にしてインド樞密院議員たるサー・ヘンリー・メインのような矢張り法律家だつた。そして原始社會に必須な社會的構造を、發展のこの經濟的形態の土臺として發見することは、法律的に教育された社會學者、アメリカ人モルガンに残された仕事であつた。太古共產主義村落共同體の間に親族關係が大きな役割をつとめたことは、インドにおいても、アルゼリアにおいても、乃至はスラヴ民族の場合にも等しく研究者が氣付いてゐた。ゲルマン民族について言へば、マウラーの研究によつて、ヨーロッパに移住を行つたのは氏族、即ち親族群だつたことが確證された。古代民族、即ちギリシヤ人およびローマ人の歴史は、彼れ等の中に古くから氏族が、社會的集團として、經濟的單位體として、法制體として、宗教的禮拜の團樂として、最大の役割をつとめてゐたことを一歩毎に示した。最後に、謂はゆる野蠻國における旅行者の殆んどすべての報道は、不思議にも異口同音に、民族が原始的であればあるほど、その民族の生活における親族關係の役割はそれだけ大であつて、その民族の經濟的および社會的関係および觀念を、それだけ支配してゐるといふ事實をもたらしした。

これによつて學問的研究は一つの新しい、最も重大な問題を提起したのである。即ち太古の時代にかくも重大な意義をもつてゐた氏族團體とは一體如何なるものであつたか？ 如何にして形成されたか？ 經濟的共產主義および一般に經濟的發展と如何なる聯絡をもつてゐたか！ 如何いふすべての問題について一八七七年に公けにした『古代社會』において、モルガンが初めて翻

期的な説明を下したのである。ニューヨーク州におけるインディアンのイロクオイ族の間に一生の大部分を送り、この原始的狩獵民族の事情を徹底的に研究したモルガンは、この研究の成果を他の原始的民族から獲た諸々の事實と比較することによつて、あらゆる歴史的知識に先行する非常に廣大な期間に亙る人類社會の發展形態に關する大規模な新理論を編み出した。モルガンの破天荒なる觀念は、その後夥しい新資料が附加せられ、彼れの説明の幾多の細部が修正されたにも拘らず、今日にいたるまで完全な效力を保持してゐるのであつて、このモルガンの業績は次ぎの諸點に綜括することができる。

一、モルガンは有史以前の文化史の中に科學的秩序をもたらした最初の間であつて、即ち彼れはその文化史に一定の發展段階を設計したと同じく、この發展の根柢的原動力を摘出したのである。それまでは、成史以前の廣大な期間に亙る社會生活と、同時にまた種々雑多な形態と階段とを伴つて今なほ生存してゐる原始民族の社會生活とは、多かれ少かれ滅茶苦茶な混沌状態を成してゐたのであつて、その中から只時々個々の斷片が學問的研究の光の中に照らされてゐたにすぎなかつた。即ちそういう状態を一括して、「野蠻」および「未開」といふ名稱が附せられるのを常としてゐたのだが、この名稱は單に消極的概念と見做されてゐた。言ひかへれば、「文明」——當時の見解によるところの——の徴候、即ち人類の文雅なる生活の徴候と見做されてゐた一切のものゝ缺如に對する名稱だつたのである。當時のそういう見地からすれば、社會の本來の文雅なる生活、人間らしい生活は、成史に表示されてゐる状態を以て始まるとせられてゐた。「野蠻」

および「未開」に屬する一切のものは、謂はゞ文明の劣等にして賤むべき前段、半獸的存在にすぎなくて、今日の文化的人類が高いところから輕蔑の眼を以てのみ見下し得るものにすぎなかつた。キリスト教教會の公式代表者にとつては、一切の原始的な、キリスト教以前の宗教は、唯一の眞の宗教に對する人類の追求における一系列の迷誤たることを示してゐるにすぎぬ如く、經濟學者にとつては一切の原始的經濟形態は、唯一の眞の經濟形態——私有および搾取の發見以前の不手際な企てたるにすぎなかつたのであつて、この私有および搾取と共に、成史と文明とが始まると考へられてゐたのである。モルガンはこういふ見解に對して決定的な打撃を加へたのであつて、即ち彼れは原始的文化史全體を、人類の連續的發展系列中における同じ値打ちの部分、否、それよりも無限に重要な部分と見たのである。何故に無限に重要であるかと言へば、原始的文化史はホンの小さな一節たるにすぎぬ成史に比して、無限に長い期間を占めてゐるからでもある。その社會的存在のこの長期の薄明期において、文化上幾多の重要な成果を見たからでもある。モルガンは、野蠻、未開、文明といふ「稱呼」に初めて積極的内容を盛つたことによつて、これを正確な科學的概念たらしめ、且つこれを科學的研究の道具として使用した。野蠻、未開、および文明はモルガンにおいては、一定の物質的特徴を以て相互に區別されるところの、文化發展の三つの區切りであつて、この區切りは各々また、下級、中級、上級に分かれ、その間を區別するものは矢張り文化の具體的な一定の成果および進歩なのである。これに對して今日術學的物知り、躍起となつて主張するかも知れぬ。野蠻状態の中級がモルガンの主張するように漁撈を以て始まり、

上級が弓矢の發明を以て始まるといふようなことは有り得なかつた。けだし多くの場合順序がその逆であるか、乃至は階段全體が自然的事情次第で色々になつて現はれたからと。——然しながらこゝういふ非難は、歴史的分類を融通のきく生き手引きと見ずに、絶對的妥當性を有する固定的圖式、或は認識の奴隸的鐵鎖と見れば、あらゆる歴史的分類に對して加へ得るものである。何と言つても最初科的分類によつて原始的歴史の研究のための先要條件をつくりあげたのは、依然としてモルガンの劃期的功績であることは、植物に最初の科學的分類を與へたのがリンネの功績であるのと同じことである。リンネは周知の如く植物を系統づけるための基礎として、極めて有用な、しかしながら純粹に外面的な特徴——植物の生殖器官といふ——を撰んだが、後にこの間に合せの方法は、リンネ自身も認めてゐるやうに、植物界の發達史から見ると一層生々とした自然的分類に席を譲らなければならなかつた。ところがモルガンの場合はこれと反對に、彼れが系統づけの基準としたところの根本原則の選擇そのものが、研究を最も効果あらしめた。即ちモルガンは、文化の最初の發端以來歴史のあらゆる時期において、人間の社會的關係を第一番に規定するものは、その場合場合における社會的勞働の様式であり、生産であつて、生産の重大なる進歩はそれぞれこの歴史的發展の標界をなすものであるといふ命題を以て、彼れらの分類の出發點としたのである。

二、モルガンの第二の大功績は、原始的社會の家族關係に關するものである。この場合も彼れは國際的な全般的調査によつて蒐集したところの大規模な資料を基礎として、原始的社會の最低

度の家族形態から、今日一般に行はれてゐる一夫一婦制度、即ち國家によつて認許されてゐるところの、夫の支配的地位を伴ふ鞏固なる單婚にいたるまでの、家族の發達形態の順列を、初めて科學的に基礎づけてこれを確立したのである。矢張りこの場合も、それ以來幾多の資料が發表されて、モルガンの家族發達の圖式の個々に互つて幾多の修正が加へられはした。それにも拘らずモルガンの體系の根本的特徴は、太古から現代にいたる人類の家族形態を、嚴密に發展思想の指針によつて階梯づけた最初のものとして、依然として社會科學の寶庫への不朽の貢獻たるを失はぬ。それにまたモルガンはこの方面においても、單に系統を與へたといふ點だけの功績ではなく、社會のその場合場合の家族關係と、その社會の中に通用してゐる親族制度との關係についての、天才的な根本的思想を寄與したのである。モルガンは多くの原始的民族において、現實の性關係および血統關係、即ち現實の家族は、人々が相互に對して附與してゐるところの親族名や、この稱號から生ずる相互的義務とは全く合致してゐないといふ、驚くべき事實に對して注意を喚起した最初の人であつた。彼れはこの謎のような現象に對して、純粹に唯物辯證的説明を見出した最初の人であつた。曰く、「家族は能動的要素である。それは決して靜止的なものではなく、社會が低い段階から高い段階に發展すると同じ度合に、低度の形態から高度の形態へと進んでゆくものである。これに反して親族制度は受動的なものであつて、家族が時代の經過と共に進んだ歩は長い期間のうちに漸やく親族制度の上に現はれてくるにすぎず、親族制度は家族が急激に變化した場合にのみ急激な變化を蒙るのである。」何故こゝういふ現象が起るかと言へば、原始的民

族の場合には、以前の家族形態はすでに止揚されてゐるのに、それに相應する親族制度が依然として通用してゐるからであつて、けだしこれは一般に、社會の事實上の物質的發展がずつと先きに進んでゐるのに、人間の觀念や理念が多くの場合依然としてもとの状態に固着してゐると同じである。

三、モルガンは家族關係の發達史を基礎として、古い氏族團體について最初の餘蘊なき研究を示した。即ちそれはすべての文化的民族、即ちギリシヤ人やローマ人、ケルト人やゲルマン人、古イストラエル人の場合に、歴史的傳統の發端を占めてゐるものであり、そして今日なほ生存してゐる大多數の原始的民族の間に確立してゐるものである。モルガンは血族關係と、共通の血統とを基礎とせるこの氏族團體は、一面においては家族の發達における或る高級段階に外ならぬものであり、他面においては——近代の意味での國家、即ち鞏固な地域的基礎の上に立てる政治的強制組織が、まだ何等存在してゐなかつた長い期間に互つて——民族のすべての社會的生活の基礎であることを立證した。各種族は一定數の氏族團體——または古代ローマ人の稱呼に従へば——ゲンスから成り、種族自身の地域を有し、この地域は總體的に種族のものとなつてゐた。そして各種族内では氏族團體が單位であつて、そこでは共同の家政が共產的に營まれ、富者もなければ貧者もなく、怠け者もなければ勞働者もなく、主人もなければ従僕もなく、かくてすべての公共事務は自由選舉と全員の決定とによつて處理されてゐた。こゝにいふ事情は今日の文明時代のあらゆる民族が曾て通過してきたものであるが、モルガンはその生ける實例として、ヨーロッパ人の

アメリカ侵略時代に繁榮してゐたアメリカ・インディアンの氏族組織を審らかに述べてゐる。

この氏族のすべての成員は自由人であつて、互ひに他人のために自由を擁護することを義務づけられてゐる。各人は人身的權利を等しうし、治安の首長も戰爭の隊長も何等上位を要求せず、彼れ等は血縁によつて結ばれてゐる一個の友愛團體を成してゐる。自由、平等、友愛は——さういふ言葉には要約されはしなかつたが——氏族の基本原則であつた。そして氏族は矢張り全社會的體制の單位であり、組織されたインディアン社會の基礎であつた。このことは何人もインディアンの間に認め得るところの毅然たる獨立不羈の念と、人身的威儀とを説明するものである。

四、氏族組織は社會的發展において文明期の戸口まで續いてゐるものであつて、モルガンは文明期を以て、文化史の最も若い短期間の時期であると説き、共產主義と古代民主主義との廢趾の上に私有制度が發生し、それに伴つて搾取が生じ、公的強制組織たる國家と、政治、所有權、家族における婦人に對する男子の專制的支配とが生じた時期であると説明してゐる。この比較的短かい歴史的時期の中に、生産、科學、藝術の最大の且つ最も急速なる進歩が含まれてゐると同時に、階級對抗による社會の徹底的分裂、民衆の極度の困窮とその極度の奴隸化とが、矢張り同じくこの時期の中に含まれてゐるのである。左に掲ぐるは現代文明に對するモルガン自身の評價であつて、モルガンがその古典的研究の成果の締めくくりとしたものである。

「文明期の開始以來、富の増大は非常なものとなり、その形態は種々様々のものとなり、その利用は極めて廣大無邊となり、その管理は所有者の利益に適合され、かくして富は人民に對して

一個の左右すべからざる權力となつてゐる。人類の精神は自分のつくり出したものに對して手も足も出ないのである。それにも拘らず、人類の理性が強くなつて、富を支配するようになり、國家と、國家が保護してゐるところの財産との關係をも、財産所有者の權利の限界をも確定する時代がくるであらう。社會の利益は個人の利益に絶對に先だち、この兩者は公正にして調和的な關係の下に置かれなければならぬ。過去におけるが如く依然として進歩が未來の法則だとすれば、單なる富の追求は人類の究極的運命ではない。文明の出現以來經過した時代は、人類のこれまで經過せる生涯の一小分數にすぎず、これから先の生涯の一小部分にすぎぬ。富を唯一の究極目標としてゐる或る歴史的道程の完結として、吾々の前に社會の臨終が迫つてゐる。けだしかゝる歴史的道程はそれ自身を滅ぼすところの要素を合んでゐるからである。行政における民主主義、社會における友愛、權利の平等、一般的教育は、經驗と理性と科學とが絶えずそれを目指してゐるところの、社會の次後の高級段階を立派なものとするだらう。それは古代氏族の自由、平等、友愛の復活——しかしながら一層高級の形態における——であるだらう。」

モルガンの業績は經濟史の認識にとつて廣大なる意義のあるものだつた。その時まで原始共產主義經濟は單に個々の場合において發見されてゐたのみで、説明されてゐなかつたのを、モルガンは一般的定則として、これを至當なる文化發展の土臺に据ゑ、特に氏族組織の土臺に据ゑたのである。それに適應せる民主主義と社會的平等とを伴へる原始共產主義は、かくして社會的發展の搖籃たることが示されたのである。モルガンはこのように成史以前の過去の水平線を擴大した

ことによつて、私有制度、階級支配、男子專制、強制國家、強制結婚等を伴へる今日の全文明を、短い期間の一時的段階と見做し、この段階は太古共產社會の消滅を受けて初めて發生したと同じく、未來においては一層高級の社會的形態に席をゆづらなければならぬものであると見たのである。かくてモルガンは科學的社會主義に對して新たに有力な援助を與へた。マルクスおよびエンゲルスは資本主義の經濟學的解剖によつて、社會が次ぎの將來において共產主義的世界經濟に必然的に歴史的に推移することを立證し、かくして社會主義的努力に對して鞏固な科學的土臺を與へたのであつたが、他方においてモルガンは、共產主義的民主主義的社會は、——それとは別な、一層原始的な形態においてではあるが——今日の文明期以前に人類文化史の長期の全過去を包括してゐるものであることを立證し、それによつてマルクス・エンゲルスの業績に對して、謂はゞ宏壯なる玄關口を與へたのであつた。かくして未來の革命的努力と、太古の傳統とが手を握り、認識の圈が調和的に連結され、今まで文化の全體であるかのように思はれ、世界歴史の最高目標であるかのように説かれてゐた今日の階級支配と搾取との世界は、右の見地からすれば單に人類の偉大なる文化的前進における極小の一時的段階の形をとるに至つたのである。

二

モルガンの『古代社會』は、謂はゞマルクスおよびエンゲルスの共產黨宣言に對する追加的の引きを成した。しかしそれと共にこの著書はブルジョア學問の中に反動を生じさせる羽目となつ

た。十九世紀半ば以來二十年から三十年までのうちに、原始共產主義の概念があらゆる方面から科學の中に入り込んだ。しかしながらまだ、尊敬すべき「ゲルマン法制遺物」や、「スラヴ種族の特徴」や、ペルーのインカ國家の歴史的發掘といふような事柄が眼目となつてゐた間は、それらの發見は現實的意義がなく、ブルジョア社會の日常利益や日常闘争と直接に結びつくことがなく、無害な學問的骨董物の範圍を超え得なかつたのであつて、そのためにルードウィヒ・フォン・マウラーやサー・ヘンリー・メインのような頑固な保守的な、または穏和な自由主義的な爲政家が、それらの發見に對する功績を贏ち得ることができたのであつた。しかしながら間もなくこれらのはブルジョア社會の日常利害と直接に結合するようになり、しかも二様の方面で結びつくに至つた。植民政策はブルジョア世界と原始共產状態との間に明白な物質的利害の衝突をもたらしめたことは、すでに吾々の見てきた通りである。一八四八年の二月革命の嵐の後、十九世紀半ば以來西ヨーロッパにおいて、資本主義制度が全能の位に即き始めてから、この利害の衝突は一層ハッキリしたものとなつた。それと同時に丁度この二月革命以來、ブルジョア社會自身の陣營の中に、もう一つ別の敵——革命的勞働運動が——益々大きな役割を演じた。一八四八年六月暴動以來パリにおいて、「赤い幽霊」は公けの舞臺から消え去ることなく、一八七一年にコンミュン戰の灼熱的火映となつて再び現はれて、フランスおよび國際ブルジョアジーを震駭させた。こゝにいふ血腥い階級闘争の光りに照らされて、今や學問的研究の最新の發見——原始共產主義——がその危険なる面貌を現はしたのである。自己の階級利益に敏感となつたブルジョアジーは、植民

地において土人に對する利慾的「ヨーロッパ」化の前進に當つて、ブルジョアジーに極めて頑強な抵抗を行つた原始共產主義の傳統と、先進資本主義國におけるプロレタリア大衆の革命的激動の新福音との間に、臚けな聯絡があることを嗅ぎつけた。一八七三年にフランス國民議會において、アルゼリアの不幸なるアラビア人の運命が、私有制度の強制的實施に關する法律によつて決せられねばならぬ羽目に陥つた時に、パリ・コンミュンに對する勝利者の卑劣なる精神と殺人慾とが未だ跡を引いてゐたこの國民議會において、アラビア人の原始的共有制度は、「精神において共產主義的傾向を藏してゐる形態として」如何なる代價を拂つても絶滅しなければならぬといふ言葉が繰返し發せられた。

その間にドイツにおいては新ドイツ帝國の榮光たる、泡沫會社簇生時代と七〇年代の最初の資本主義的恐慌、ビスマルクの鐵血政策とその社會主義鎮壓法とは、階級闘争を極度に激成し、併せて學問的研究からも一切の氣樂な心もちを驅逐してしまつた。マルクスおよびエンゲルスの理論の化身たるドイツ社會民主黨の未曾有の増大は、ドイツにおけるブルジョア學問の階級本能を異常に激成し、そしてまたこの場合も原始共產主義の學說に對する反動が最も手強く始まつた。リップルトやシュルツの如き文化史家、ビュヒャーの如き經濟學者、シュタルケ、ウェスターマルク、グローセの如き社會學者は、今日一致して原始共產主義の學說に熱心に反對し、殊にモルガンの家族進化説、同じく男女の平等と一般的民主主義とを伴へる氏族組織が曾て一般に行はれてゐたとするモルガンの學說に對して極力戰つてゐる。たとへばシュタルケ氏の如きは、一八八

八年刊『原始的家族』の中で、親族制度に關するモルガンの假説を「精神錯亂と言へなければ荒唐無稽の夢想」だと呼んでゐる。^{*}

また、比較的眞面目な學者、たとへば吾人の有する最良の文化史の著者リッペルトの如きもモルガンに敵對してゐる。リッペルトは十八世紀における經濟學上にも人類學上にも何等教養のない宣教師の、時代おくれの皮相な報告に基き、モルガンの大規模なる研究を全然無視して、北米インディアンの經濟状態を描き、これを以て、狩獵民族の間には一般に生産の共同規定も、全體のためや將來のための「配慮」も何等行はれてをらず、無規律と無思慮以外の何ものも支配してゐないことを示す一つの證據として擧げてゐる。この北米インディアンこそは、モルガンがその整然たる社會組織を有する生活に、他の何人よりも通曉してゐるところの民族なのである。インディアンの間に事實の上に現存してゐる共產主義制度を、偏狹なるヨーロッパ眼によつて下らなく歪められたのを、リッペルトは無批判に取り入れてゐる。たとへば北米インディアンの間に

^{*} シュタルケおよびウエスターマルクの批評および理論は、クノウによつて『オーストラリア黑人の親族組織』(一九九四年刊)の中で徹底的吟味を受けて覆へされてゐるが、これに對してわが博學なる兩氏は今日にいたるまで一言も答へてゐない。それにも拘らず兩者は最近の社會學者、たとへばグローセの如き人から、モルガン廢棄者として、並びに第一流の權威者として傑ます賞讃されてゐる。モルガン廢棄者における場合は、マルクス廢棄者におけると略し同じである。——ブルジョア學問にとつては、憚むべき革命家に反對する傾向だけで深山なのであつて、この場合好意がすべての學問的功績を補ふのである。

ける福音教徒の傳道の歴史を、一七八九年にロスキエルが書いたものから、次ぎの如き引用を試みてゐるが如きはその一證である。曰く、「道を踏んで誤らざるわが宣教師の記すところによれば、彼れ等(アメリカ・インディアン)の多くは極めて怠惰であつて、自分で何物も栽培せず、他人が食料の貯へを分けることを拒めないようにばかり仕向けてゐる。こつといふ具合で、勤勉な者も、自分の勞働の成果を怠け者以上に味へないのだから、勢ひ次第々に栽培を少くするようになる。また嚴しい冬がくれば彼れ等は深雪のために獵に行くことができず、かくして造作もなく、一般的飢饉が起り、往々澤山の人が斃れる。そこで彼れ等は困窮に教へられて、草根や木の内皮、殊に若櫛の内皮を食料に宛てることを覚えてくる。」リッペルトはこの證人の言葉に附け加へて曰く、即ちこのように自然の成行きを以て、往時の無配慮状態への復歸が、同じく往時の生計への復歸を伴つたのであると。そしてこのインディアンの社會において、即ち何人も自分の食料の貯へを他人に分けることを「拒めない」社會、一人の「福音教徒」が明々白々な氣まぐれを以てヨーロッパ流の型に似せて否應なしに「勤勉な者」と「怠け者」とに分けてゐるこのインディアンの社會の中に、リッペルトは原始共產主義に反對する最上の證據を見出さうと欲して曰く、「こつといふ段階においては、老いたる時代人が若き時代人の生活の支度のために、まだ心を勞することが少ないのは當然である。インディアンはすでに原始人からは遙かに遠ざかつてゐる。人類は道具を有するようになると同時に、所有の概念を有するが、但しこの概念は道具の上のみに限られてゐる。こつといふ概念をすでにインディアンは最低の段階において有してゐる。但しこ

の原始的所有には一切の共產主義的特徴が缺けてゐる。發展はその反對の方向に始まつてゐるのである。」

ビュヒャー教授は原始共產主義經濟に對して、原始民族の「個人的食物探求の理論」と、「測るべからざる長い期間」において「人類は勞働することなしに存在してきた」といふ理論とを以て對向してきた。ところが文化史家シュルツにとつては、カール・ビュヒャー教授はその「天才的眼光」を以てする一個の豫言者なのであつて、シュルツは原始的經濟關係に關する事柄については、盲目的にその言に追従してゐる。だが危険なる原始共產主義學說に對する反對派の最も典型的な、有力な主張者、「ドイツ社會民主黨の教父」モルガンに反對する氏族組織の最も典型的な、最も手強き主張者はエルンスト・グローセである。一見したところではグローセ自身が唯物史觀の信奉者であつて、即ち彼れは社會的生活の種々の法制的、性的、精神的形態を、それらの形態を決定する要因たるその場合場合の生産關係に歸せしめてゐる。彼れは一八九四年に公けにした『藝術の發端』の中でこう言つてゐる、「極く僅少の文化史家のみが生産の全意義を理解してゐたように見える。しかしながら生産の意義を低く評價するのは、それを高く評價しすぎるよりも遙かに容易である。經濟動機は謂はゞあらゆる文化形態の生命の中心であつて、文化の爾餘のすべての要因に對して、最も深い否應なしの影響を與へるものであるが、この經濟動機そのものは、文化的要因によつても、自然的要因によつても——地理的關係や氣象的關係によつても決定されない。生産形態を本原的文化現象と呼んで差支へないのであつて、その外の文化の各部門は、派生

的な、副次的な現象としてのみ現はれるものである——但しこの意味は、これらの他の部門が生産といふ根幹から發生するといふ意味ではなく、獨立的に發生するものではあるが、支配的な經濟的要因の優勢なる壓力の下に絶えず形成され發達してきたといふ意味である。」一見したところではグローセ自身が「ドイツ社會民主黨の教父」マルクスおよびエンゲルスから、彼れの主要思想を學び取つたように見える。但し賢明にも彼れ自身は「大多數の文化史家」に對する自己の卓越を、そつといふ出來合ひのまゝで誰れの學問的懷ろから持つてきたかを、一言も洩らさないように用心してはゐるが。加之、彼れは唯物史觀については「法皇よりも正統」である。マルクスと並んで唯物史觀の共同創始者たるエンゲルスは、原始時代における家族關係から、今日の國家的に承認されてゐる強制結婚の完成にいたるまでの發達は、經濟關係とは係はりのない諸形態の進展であつて、それには人類の維持の利益とその増殖とだけが根柢となつてゐるにすぎぬと見做してゐたのに、グローセはこの點において遙かに徹底してゐる。彼れはすべての時代において、その場合の家族形態は、その時代に支配してゐる經濟關係の直接の產物に外ならなかつたといふ理論を樹てゝゐるのである。即ち彼れは次ぎの如く言つてゐる、「生産の文化的意義が、家族の歴史におけるほど明瞭に現はれる場合はない。この家族といふ不思議な具象は、社會學者を騙つて更らに一層不思議な臆說を立てさせてきたものであるが、ひとたびこれを生産の諸形態と關聯させて觀察する時は、立ちどころに理解できるものとなつて現はれる。」

一八九六年に公けにされた彼れの著書、『家族の諸形態と經濟の諸形態』は、全然こつといふ思想

の證明に宛てられてゐる。だがそれと同時にグローセは原始共產主義説の斷乎たる反對者である。矢張り彼れも、人類の社會的發展は斷じて共有を以て始まつたのでなく、私有を以て始まつたことを證明しようとする。矢張りリッペルトやビュヒャーと同じく、この見地から出發して、原始史に遡れば遡るほど「個人的所有」を伴へる「個人」が、専ら全能的に支配してゐるといふことを證明しようとする。なるほどすべての大陸における共產主義村落團體の發見や、それに伴つて氏族團體、またはグローセの稱呼に従へばジツベ（同じく氏族の意）に關する發見は、無造作に否認することはできない。しかしグローセは取りも直さず——この點に彼れ特有の理論が成立するのだが——共產主義經濟の粹としてのこの氏族組織を、一定の發達段階においてのみ、即ち低級の農耕と共に出現するものとなし、一層高級の農耕の段階に來るや否や崩壊してしまつて、再び「個人的財産」と代るものと見做してゐる。このようにしてグローセは、モルガン・マルクスによつて樹立された歴史的遠近法を、意氣揚々として顛倒せしめたのである。モルガン・マルクスによれば、共產主義が人類の文化的發展の搖籃であり、この發展が測るべからざる長期間に互つて伴つたところの經濟關係の形態であつて、文明期の開始と共に初めて崩壊して私有制度と代るものであり、そして文明期はまた文明期で、急速な崩壊過程に面し、社會主義的社會秩序といふ一層高級な形において共產主義への復歸に面するものである。ところがグローセによれば、文化の發生と進歩とを誘致したものは私有制度であつて、この私有制度は一定の段階、即ち低級農耕の段階においてのみ、一時の間共產主義に坐を讓るものである。マルクス・エンゲルス

およびモルガンによれば、共有制度、社會的連帶が文化史の始點および終點であり、グローセおよびブルジョア學問における彼れの同僚によれば、私有財産を有する「個人」がそうなのである。だがそれだけではない。グローセは常にモルガンや共產主義に對してのみならず、社會生活の領域における進化理論全體に對しての公然たる反對者であつて、社會生活のすべての現象を一個の發展系列の中におし込めて、これを一個の單一の過程、即ち低き生活形態から高き生活形態へと向ふ人類の進展と見做すところの幼稚な思想家に對して嘲笑を浴びせかけてゐる。一般に近代社會科學全體、特に歴史觀並びに科學的社會主義の學説の基礎となつてゐるこの根本思想を、グローセは典型的ブルジョア學者として全力を擧げて攻撃してゐる。彼れは公言し力説して曰く「人類は唯一つの線上を唯一つの方向に向つて動いてゐるのでは決してなく、民族の生活條件が種々様々なるが如く、その道程や目標もまた種々様々である。」かくしてグローセといふ人間の姿をとつて、ブルジョア社會科學は、ブルジョア社會科學自身の發見の革命的結論に對する反動となつて、ブルジョア俗流經濟學が矢張り古典經濟學に對する反動となつて到達したと同じ點に到達した。即ち社會的發展の法則性そのものの否定に到達したのである。このマルクス、エンゲルスおよびモルガンの最近の克服者の、不思議な史的「唯物論」をもつと仔細に觀察して見よう。グローセは實に屢、「生産」を口にし、終始一貫して「生産」の性質を以て、文化總體に影響を與へるところの決定的要因なりと述べてゐる。だが彼れは生産とその性質とを何と解してゐるだらうか？「一つの社會群の中に行はれ、もしくは優勢を占めてゐる經濟形態、即ちその社會群

の成員が生計を獲得する方法は、直接に目撃される事實であり、その主要特徴をいつの場合も充分に確實に確定し得る事實である。吾々はオーストラリア人の宗教的觀念や社會的觀念についても、まだ仲々疑問をもつてゐるかも知れぬ。だが彼れ等の生産の性質については疑ひを挾むことは不可能である。即ちオーストラリア人は狩獵者であり植物採集者である。古代ペルー人の精神的文化を見究めることはおそらく不可能であらう。だがインカ帝國の市民は農耕民族だつたといふ事實は、あらゆる觀察者にとつて明瞭である。*

故に「生産」およびその「性質」を、グローセは單に民族の食糧のその場合場合の主要源泉のことと解してゐる。狩獵、漁撈、牧畜、農耕——これが一民族のその外の一切の文化事情に、決定的な影響を與へるところの「生産關係」なのである。こゝにまづ第一に注意しなければならぬことは、結局歸着するところはこういふ貧弱な發見だとすれば、少くとも「大多數の文化史家」に對するグローセ氏の卓越は、全く根據のないことだつたといふことである。或る一定の民族にとつて食糧に役立つ主要源泉の種類が、その民族の文化發達にとつて殊の外重要なものであるといふ認識は、別段グローセ氏の嶄新なる發見ではなく、むしろ文化史のすべての學者の古くからの備付品たるものである。取りも直さずこの認識こそは、民族を、狩獵民族、牧畜民族、農耕民族に分ける在來の習慣を誘致してきたものであり、この分け方は、すべての文化史においてつねに

* グローセ著『藝術の發端』第三四頁。

行はれてゐることであつて、これをグローセ氏自身が、幾度もあゝでもない、こうでもないと考えながら、しかも結局採用してゐるにすぎぬ。しかしこの認識は單に全然舊式であるのみならず、なほ——グローセがそれを採用してゐる場合のような單純な理論においては——全然誤りである。單に一民族が狩獵か牧畜か農耕かで生活してゐることを知つたとしても、その民族の生産關係やその他の文化については、まだ全然何物をも知つたことにならぬ。南アフリカの現在のホッテントットは、ドイツ人がその畜群を奪ひ、従つて彼れ等の從來の生存の源を奪つて、その代りに近代的銃を供給したので、そのため否應なしに再び狩獵者となつてゐる。ところがこの「狩獵民族」の生産關係は、今日なほ原始的な別世界狀態のうちに生活してゐるカリフォルニアのインディアン狩獵民族とは、微塵も共通な點を有せず、後者はまた、歐米の資本家に對して、毛皮品商業のための獸皮を職業的に供給してゐるカナダの狩獵者組合とは殆んど類似の點がない。スペイン人侵略以前にインカ治世の下にコルディレル山中に駱馬を共産的に飼養してゐたペルーの牧畜民、家長制牧畜群を有するアフリカやアラビアの遊牧アラビア民族、資本主義世界の眞中で昔ながらの『アルプス簿記』をつけてゐる、スキスやバイエルンやチロールのアルプス山中における今日の農民、荒涼たるアプリーエン地方で主人の巨大な畜群を見張つてゐた半野蠻的なローマの奴隸、今日アルゼンチンでオハイオ州の屠殺場や鑛詰製造所のために無數の畜群を肥らせてゐる農業企業家——すべてこれらのものは、それぞれ生産および文化の全然異つた型を代表するところの「牧畜」の見本である。最後に「農耕」は、太古のインド民族マルク組合から近代の巨大

地所經濟にいたるまで、自作農的矮小經濟から東エルベの諸侯領地經濟にいたるまで、イギリスの小作制度からルーマニアの特別徭役制度にいたるまで、支那の農民園藝からブラジルの栽培場や奴隷勞働にいたるまでタヒチ島における婦人の掘耕から蒸氣および電氣經營を以てする北アメリカの大農場にいたるまで、——ありとあらゆる種々様々な經濟様式を包括してゐるのであつて、生産の意義に關するグローセ氏の高慢ちきな御託宣の中には、本統の「生産」とは何を意味するかについて、見事な無理解が示されてゐるにすぎぬ。この種の「唯物論」は、生産および文化の外部的な自然條件のみを考慮に入れてゐるにすぎず、イギリスの社會學者バックルを以て、その最上の且つ餘蘊なき代表者としてゐるものであつて、外ならぬこゝろいふ大ざつばな「唯物論」に、マルクスおよびエンゲルスは反對したのであつた。食糧の外部的な自然的源泉が、人間の經濟上および文化上の關係を決定するのではなく、人間が勞働において相互に對して結んでゐる關係が、これを決定するのである。生産の社會的關係は、或る一定の民族の間に如何なる生産形態が支配してゐるかといふ問題を決定する。生産のこの方面を根本的に理解した場合にのみ、一民族の生産が、その家族關係や、法律概念や、宗教的觀念や、藝術的發達などに對して決定的影響を與へることを理解することが出来る。だが謂はゆる野蠻民族の場合の生産における社會的關係を見届けることは、大多數のヨーロッパ人觀察者にとつて極めて困難な事柄である。インカ・ペルー人は農耕民族だつたといふこと以外に何事も知らぬ場合に、すでに一個の世界を知りつくしてゐると信じてゐるグローセ氏の如きとは正反對に、サー・ヘンリー・メーソンの如き眞面目な學者は次

ぎの如く言つてゐる。

「外國の社會的または法制的事情の直接目撃者に特有の誤謬は、それらの事情を、外見上同一種類のものに見える既知の事情と、餘りに早卒に比較することである。」

そこで家族形態と、右の如く解された「生産形態」との相互關係は、グローセ氏の場合にあつては次ぎの如く見える。

「最低の段階においては人類は、狩獵——最も廣い意味における——と、植物の採取とによつて食つてゆく。こゝろいふ原始的形態の生産の場合には、それと同時に、兩性の間における最も原始的な形態の分業が現はれる。男子は動物性食物の調達を受持ち、一方で植物や果實の採取が女子の役目となる。こゝろいふ事情の下では、經濟上の重點は殆んどつねに男の側にあり、その結果、原始的な家族形態は如何なる場合も、明白な父權的性質を帯びてゐる。血族に關する見解がどんな種類のものであらうと、原始時代の男子は、——子孫の血族と見做されてゐない場合ですらも——事實上妻子の間に主人並びに財産所有者の位置を占めてゐる。こゝろいふ最低の段階から、生産は二つの方向に進展し得る。それにつれて女子の經濟經營か、男子の經濟經營かが一層發達してくるのである。だがこの兩種の經營のうち何れが根幹になるかは、第一番に原始的集團が生活してゐる自然的條件の如何によつて決定される。その土地の植物の分布と氣候とがまづ最初に有用植物の保護、ついでその培養に適し、且つ引き合ふ場合は、女の受持ちの經濟部門、即ち植物の採取が漸次に植物栽培に發達してくる。事實において原始的農耕民族の場合には、この仕事はつ

ねに女の手にあるのである。然るにそれと共に經濟上の重點が女の側に置かれ、その結果吾々は、主として農耕に倚つてゐるすべての原始社會の場合に、母權的家族形態、もしくはそらういふものがある。とはいへ本來の意味での母權的支配が形成され、本統の女性支配が形づくられる場合極めて稀れにしかない——即ちその社會群が外敵の攻撃から免れた場合に限られてゐる。その外は極すべての場合には男子が優位を獲得してゐた。即ち男子は扶養者として失つた優位を、保護者として取戻したのである。こらういふ具合にして、かゝる農耕民族の大多數の間に行はれてゐる家族形態が發生するのであつて、それは母權的傾向と父權的傾向との中和を成すものである。——それにも拘はらず人類の大部分は全然別個の發達を闊みしてきた。農耕には困難だが、飼養に差支へなく且つ引き合ふ動物が存在してゐる地域に棲んでゐた狩獵民族は、前の民族のように植物培養の方に發達せず、牧畜の方に發達したのである。ところが狩獵から漸次に發達する牧畜は、狩獵と全然同様に、本來如何なる場合も男子の特權となつて現はれる。こらういふ具合にして、男子側に既に存在してゐる經濟上の優勢が更に一層強められ、そしてこの事情は、特に牧畜によつて食つてゐるすべての民族は父權的家族形態の支配下にあるといふ事實となつて、徹底的な形をとつて現はれるのである。なほその外に、牧畜社會における男子の支配的地位は、矢張りその社會の生産の形態と直接に關聯するところの、もう一つ別の事情によつて高められる。即ち牧畜民族はつねに戰爭的葛藤をひき起し勝ちであり、その結果集中的な戰爭組織體を形成する傾向があ

る。その結果は勢ひ妻が權利のない奴隷として、專制的權力を贈與された夫の下にかしづくといふ、極端な形の父權制度の出現となる。しかるに妻が家族の扶養者たる地位を占め、もしくは少くとも部分的に自由な地位を享有してゐる平和的な農耕民族は、大多數の場合戰鬪的牧畜民族に征服され、その結果この牧畜民族から種々の風習と共に、家族内における男子の專制的支配をも移入する。「かくして吾々は今日なほ、すべての文化的國民が、多少とも鮮明な父權的家族形態の徴候を帯びてゐるのを認めるのである。」*

されば右に描き出されたところの、生産形態に依倚する人類家族の奇妙な歴史的運命は、要するに次ぎの如き圖式に歸着する。狩獵の時期——男子支配を伴ふ個別家族。牧畜の時期——一層惡辣な男子支配を伴ふ個別家族。低級農耕の時期——折々の女子支配を伴ふ個別家族、だが後に牧畜民族による農耕民族の征服、従つて矢張りこの場合も男子支配を伴ふ個別家族。そして建物かたまりの要石として、高級農耕の時期——男子支配を伴ふ個別家族。グローセ氏は御覽の如く近代進化論の否認に熱心である。氏にあつてはおよそ家族形態の進化といふものは存在しないのだ。歴史は個別家族と男子支配とを以て終始するのだ。この場合グローセは、最初に家族形態の發生を生産形態から説明することを、大得意で約束しながら、一般に家族形態を、或る既存のもの、出來上つたもの、即ち個別家族、即ち一個の近代的世帯として前提して、これをすべての生産形態の下

に全然不變のものを見做してゐることに氣がつかない。グローセが時代の變遷に伴ふ種々の「家族形態」として追及してゐるものは、その實、單に兩性相互間の關係といふたゞ一つの問題である。男子支配か女子支配か——これがグローセによれば「家族形態」なのであつて、かくして彼れは「生産形態」を、狩獵か牧畜か農耕かといふ問題に約元して骨抜きにしたと同じ大ざつばなやり方で、家族形態を全然骨抜きにして外部的特徴に約元してゐる。「男子支配」か「女子支配」かといふことは、何ダースといふ種々の家族形態を包含し得るものだといふこと、「狩獵民族」といふ同一の文化段階内にも、何ダースといふ種々の親族制度が存在し得るといふこと——すべてこゝろいふことは、一種類の生産内部における社會關係の問題と同じく、グローセ氏にとつては全然問題にならないのである。家族形態と生産形態との相互關係は、要するにこの場合次ぎの如き才氣に富んだ「唯物論」に歸着する。——即ち兩性は當初から業務の競争者と見做されてゐる。家族を養ふものは矢張り家族内を支配すると俗人は考へてをり、ブルジョア民法もそう考へてゐる。だが女性の不運は、歴史上たゞ例外的にのみ——即ち低級な耨耕の場合に——家族扶養の當事者だつたのだが、それも矢張り戰鬪的男性のために敗を取らなければならなかつた。かくして家族形態の歴史は、これを根本的に見れば、どんな「生産形態」の場合たるとを問はず、單に婦人の奴隷状態の歴史たるにすぎぬ。この場合家族形態と經濟形態との唯一の關聯は、専ら男子支配が比較的穩和な形のものであるか、比較的苛酷な形態のものであるかといふ、わけもない區別に存するだけである。そしてこの最後に當つて、奴隷化された婦人のための、人類文化史

における最初の救ひの使として——キリスト教が現はれた。これは地上においてはないが、少くとも天上においては兩性の間に何等區別をつけないものである。グローセ氏は經濟史の大洋の中を長いこと漂泊した後に、漸やく仕合せにもキリスト教といふ港に錨を下すことを得て、「この教へによつてキリスト教は婦人に卓越した地位を與へ、男子の我儘もそれには屈しなければならぬ」と結んでゐる。このように社會學者を驅つて「不思議な臆説」を立てさせてきたところの家族形態は、これを「生産形態と關聯させて」觀察するときには、なるほど「立ちどころに理解できるもの」となつて現はれるではないか！

しかしこの「家族形態」の歴史の中に最も際立つてゐるものは、氏族團體、もしくはグローセの稱呼によればジッペの取扱ひ方である。氏族團體が昔の文化段階において、社會的生活にとつて如何に巨大な役割をつとめてゐたかを吾々はすでに見てきた。氏族團體は——殊にモルガンの劃期的研究によれば——地域的國家の形成以前における人類特有の社會形態であつて、その後にも、久しく經濟的單位體並びに宗教的共同體であつたことは、吾々のすでに見てきたところである。この事實はグローセの「家族形態」の不思議な歴史とどんな關係があるだらうか？ グローセはすべての原始民族の間に氏族組織が成立してゐたことを、流石に無造作に否認することはできない。しかしこの氏族組織は個別家族および私有制度の支配といふグローセ自身の圖式と矛

盾するのだから、彼れは氏族組織の重要性を——低級農耕といふ一時期を除いて——できるだけ無いものにしてようと努めてゐる。「氏族權力は低級農業と共に發生し、低級農業と共に消滅し、すべての高級農業の間には氏族制度がすでに瓦解してゐるか、乃至は瓦解する。」*このようにグローセは、共産主義經濟を伴へる「氏族權力」を、經濟史および家族史の中に、恰もピストルから發射されたものゝように突然出現させ、それからすぐさま再び元の方へ消え失せさせてゐる。グローセによれば氏族制度は低級農耕以前には、個別家族に對して經濟的機能も社會的重要性ももつてゐないのだから、それなら一體低級農耕以前における文化發展の數千年間に互つての氏族制度の發生、成立、機能は如何に説明すべきであるか、そして狩獵民族や牧畜民族の間では、私經濟を伴ふ單獨家族の背後に影の如くひそんで存在してゐるといふ、そつといふ氏族とは一體如何なるものであるか、——そつといふ問題は何處までもグローセ氏の個人的祕密にとゞまる。同様にまたグローセ氏は、氏の小歴史が、一般に認められてゐる若干の事實と矛盾相容れないものであることに氣がつかないでゐる。氏族は低級農耕の場合に初めて重要性を發揮するといふ。ところが氏族は大多數の場合、近族復讐の制度や、宗教上の儀式や、また極めて屢々動物稱名の習俗と結びついてゐる。然るにすべてこれらの事柄は、農耕よりも遙かに古いものであるから、従つてグローセ自身の理論からするも、氏族權力は農耕期よりもずつと原始的な文化時期の生産關係

* グローセ著、家族の諸形態 第二〇七、二一五頁。

から派生しなければならぬわけである。グローセはゲルマン、ケルト、インド人の如き高級農耕民族の氏族制度は、低級農耕期の遺産であつて、この時期には氏族制度が婦人の農業に根元を置いてゐると説いてゐる。然るに文化民族の高級農耕は婦人の耨耕からでなく、牧畜から發生したのであつて、この牧畜はすでに男子によつて營まれてゐたのだから、従つて高級農耕の場合には、グローセによれば氏族は父權的家族經濟に對して何等意義を有してゐなかつたわけである。グローセによれば放浪的牧畜民族の間には氏族制度は無意義であつて、定住と農耕とが始まると共に初めて暫時の間權力を獲得するのである。然るに最も秀でたる農業制度研究者によれば、事實上の發達は丁度それと正反對の方向に行はれてきた。即ち牧畜民が放浪的生活様式をつゞけてゐた間は、氏族團體はあらゆる點において最大の權力を有してゐたのであつて、定住および農耕と共に氏族の連結は弛み初め、農耕民の地域的團體に代つて影をひそめ始める。即ちこの地域的團體の共同利益は血縁の傳統よりも力強いのであつて、かくて氏族共同體は謂はゆる近隣共同體に化する。これがルートウィヒ・フォン・マウラー、コヴァレフスキイ、ヘンリー・メイン、ラヴレーの見解であつて、現在ではカウフマンが、中央アジアのキルギス人およびヤクト人の間に同一の現象が行はれてゐることを立證してゐる。

結びとしてなほ次ぎの點を述べべきであらう。グローセは原始的家族關係の領域における最も重要な現象、たとへば母權制度の如きものに對して、彼れの立場からは如何なる説明をも斷じて與へることができないで、單に肩を聳やかして母權制度を「社會學の最も奇異なる事物」と説い

てゐるだけにすぎぬ。また彼れは、オーストラリア人の間には血族に關する觀念はその家族制度の上に何等影響を與へてゐないといふような、信ずべからざることを臆面もなく主張し、古代ペルー人の間には氏族の痕跡だになかつたといふような、これに輪をかけた荒唐無稽なことを主張してゐるし、またゲルマン人の農業制度を、舊式な、信憑すべからざるラヴレーの資料によつて判斷してゐる。そして最後に彼れはこの同じラヴレーの口眞似をして、たとへば「今日もなほ」ロシアの村落共同體は、三千五百萬の大ロシア人の間に、血縁を以て成る氏族團體、即ち「家族共同社會」を形づくつてゐるといふようなお伽話めいた主張をしてゐるのであつて、そういう主張は、ベルリンの總住民は「今日もなほ」一大家族共同社會を形づくつてゐるといふのと略々違ひがない。グローセはすべてこういふ主張によつて、「ドイツ社會民主黨の教父」モルガンを、死んだ犬ころのように取扱ふ資格を與へられてゐるのである。以上の吟味によつてグローセの家族形態および氏族の取扱ひ方から判斷すれば、彼れが「經濟の形態」なるものを如何に取扱つてゐるかは自から明白となる。原始共產主義の認容に反對する彼れの立證全體は、「なるほど云々だが」「併しながら云々」といふ二つの言葉の上に基礎をおいてゐる、即ち反對すべからざる事實はなるほど承認するが、併しながらそれに他の事實を對立せしめ、かくて望ましからぬものは縮小し、望ましいものは誇張し、結果をそれに應じて整理するといふやり方をしてゐる。

なるほどグローセ自身は低級狩獵民について次ぎの如く説いてゐる、「すべての低位の社會にあつては個人的所有は、主として、または専ら動産より成るものであるが、そつといふ個人的所有

は低級狩獵民の間には殆んど無意義であつて、財産中の最も貴重な部分、即ち獵地は種族の男子全體の共有である。その結果往々獲物も群團中の全員の間に分配されなければならぬ。このことはたとへばボトクレーデン族についても報告されてゐる(『エーレンライヒ、『人類學時報』)。またオーストラリア人の若干の部分の間にも、これと似た風習が存してゐる。それだから原始的群團の成員全體が、殆んど一樣にいつも貧しいのである。また大した財産上の差別がないのだから、身分上の區別が生ずる主要な根據が缺けてゐる。一般に一種族内の成年男子は總て同權である(前掲書第五一五六頁)。同様に「氏族員たる資格は若干の(一)點において、低級狩獵民の生活の上に重大な影響を與へてゐる。氏族員たる資格は狩獵者に一定の獵地を利用する權利を贈與し、防衛および復讐の權利義務を贈與する」(第六四頁)。同様にグローセは、カリフォルニアの低級狩獵民の間に氏族共產主義の可能性を認めてゐる。

併しながらそれにも拘らず、氏族は緩慢且つ薄弱なものであつて、この場合經濟共同社會が存してゐないのである。「しかし北極狩獵民の生産様式は全然個人主義的であつて、氏族の連結は遠心的な欲望に對して殆んど抵抗する力がない。」同様にオーストラリア人の間には「狩獵および採集による共有獵場の利用は、常則として何等共同には行はれることなく、個別家族が各自分立的な經濟を營んでゐる。」そして一般には「食物の缺乏は、比較的大きな群團を持続的に結合してゆくに耐えず、この群團の分散を餘儀なからしむるものである。」

次ぎに高級狩獵民の方に移らう。

なるほど、「土地は高級狩獵民の間にも、常則として種族または氏族の共有である」(第六九頁)。なるほど吾々はこの段階において、集國家屋がそのまゝ氏族のための共同營舎となつてゐるのを目撃し(第八四頁)、なるほど吾々は更らに進んで次ぎのような事柄を聞きはする、「マッケンジーがハイダ河の流域に見た長大なる堤防は、彼れの判斷によれば種族全體の勞働を必要としたに相違ないが、この堤防は酋長の監督の下に置かれて、その許可がなければ何人と雖も漁をすることを得なかつた。故にこれはおそらく村落共同體全體の財産と見做されてゐたのであつて、おまけに漁池も獵場も分配されずに共有となつてゐたのである」(第八七頁)。

併しながら、「この場合動産は相當の擴張を見、且つ重要さを増してゐるので、土地所有が平等であるに拘らず財産の一大不平等が展開し得る」(第六九頁)、そして「常則として食物は、吾々の認め得る限りにおいては、他の動産と同じく共有と見做されてゐない。故にこの家内氏族は極く局限された意味でのみ經濟共同社會と呼ばれるだけである。」(第八八頁)。

その次ぎに位する文化段階、即ち流浪的牧畜民に轉じよう。これについてもグローセは次ぎの如く説いてゐる。

なるほど、「どんなに不安定な遊牧民と雖も、無制限に遠方に流浪するわけのものでなく、一般に可なりハッキリ限られた地域内を移動してゐるのであつて、この地域は彼れ等の種族の財産と見做され、往々更らに個々の單獨家族や氏族の間に分配されてゐる。」そして更らに、「土地は殆んど牧畜の全域に互つて「種族または氏族の共有」である」(第九一頁)。「土地は慥かに氏族全

員の共有財産であつて、共有財産として氏族または首長から各家族の間に使用のために分配されてゐる」(第二二八頁)。

併しながら、「土地は遊牧民の最も貴重な財産ではない。最上の財産はその畜群であつて、家畜はつねに(一)個々の家族の單獨財産である。牧畜氏族は決して(一)經濟共同社會や財産共同社會とは成つてゐない。」

最後に低級農耕民を究めよう。この場合はなるほど氏族が、初めて完全に共產主義的な經濟共同社會と認められてはゐる。

併しながら「こゝでも矢張り「併しながら」が尻にくつつ付く——この場合も「産業が社會的平等を覆へず」(グローセは産業といつてゐるが、勿論商品生産のことを指してゐるのであつて、彼れはこれと産業とを區別することを知らないのである)。そして土地の共有に對して優位を持つる動産の單獨所有をつくり出し、やがてこれが共有を破壊してしまふ(第一三六—三七頁)。そして土地共同社會であるに拘らず、「この場合にもすでに貧富の分離が存してゐる。」かくして共產主義は經濟史中の短い間狂言に短縮され、經濟史はやはり私有を以て始まり、私有を似て終るものとされてゐる。果してそうであるか。

三

グローセの圖式の値打ちを吟味するために、最初に事實の上に眼を轉じよう。まつ低級民族の

經濟様式を——瞥見的にはあるが——しらべて見よう。それは如何なるものであるか？

グローセはこの低級民族を「低級狩獵民」と名づけ、それについて次ぎの如く語つてゐる。「低級狩獵民は今日人類中の極く小部分をなしてゐるにすぎぬ。彼れ等はその不完全な、且つ不生産的な生産形態のために、數的微弱と文化的貧弱との運命を負はされて、いたるところにおいて強大民族の前に畏縮する羽目に陥り、かくて現在は近づき難き原始林や、荒涼たる曠野の中に僅かに餘命を保つてゐるにすぎぬ。こゝにいふ憐れむべき種族の大部分は矮小人種に屬してゐる。それは取りも直さず生存競争において、強者のために最も文化に適しない地域に驅逐され、それと共に文化的停滯を運命づけられてしまつた最弱者なのである。それにも拘らず今日もなほ、ヨーロッパを除いてすべての大陸に、この最古の經濟形態の代表者を見出すことができる。アフリカは多數の矮小化する狩獵民族を藏してゐる。が惜しいかな吾々は今までのところ、この種の民族のうち只一つ、カラハリ曠野（獨領南アフリカ）のブッシュマン族のことをいくらか傳へられてゐるだけであつて、その他の矮小種族の生活は今なほ奥地の原始林の暗闇の中にかくされてゐる。アフリカから東部に眼を轉ずれば、まづ初めにセイロン（東インド半島の南端）の内地にウエッダといふ矮小狩獵民族に出會ふ。更らにアンダマン群島にミンコビー族、スマトラの内地にクブ族、フィリッピンの山地にエータ族を見る。この三種族は矢張り矮小人種に屬するものである。オーストラリア大陸は、ヨーロッパ人の移住以前にはその全廣袤に互つて低級狩獵種族が住んでゐた。そして土人は十九世紀後半に、移民のために沿岸地域の最大部分から驅逐されてしま

つたのだが、それでも今日なほ彼れ等は奥地の荒野にとゞまつてゐる。最後にアメリカでは、南の端から北の端まで、最も文化の低い幾多の群團が散在してゐる跡を追ふことができる。ケーブ・ホルン（南アメリカの南端）における風雨に曝れてゐる荒山には一人ならぬの目撃者によつて、人類中最も悲惨にして粗野な種族と説かれてきたフォイエルランド族が棲んでゐる。ブラジルの森林一帯には不評判なポトクーデン族の外に、多分なほ狩獵民族の幾多の群團が散在してゐるのであるが、そのうちフォン・デン・シュタイネンの研究のおかげで、少くともポロラー族は吾々に知られるに至つた。中央カリフォルニア（北アメリカの西岸）は、最も悲惨なオーストラリア人と殆んど劣らない種々の種族を藏してゐる。*なほグローセは奇妙にもエスキモーをも最低級民族に數へてゐるのだが、これ以上に、そゝいふグローセの後についてゆくわけに行かぬから、今度は右に數へ上げた中の若干の種族について、社會的計劃的な勞働編成の跡を探索して見たいと思ふ。

まづ最初にオーストラリア食人種族に眼を向けよう。これは幾多の學者の説によれば、人類がこの地上に示し得る最低の文化状態にあるものである。オーストラリア黑人の間には、まづ第一に、すでに述べた男女間の原始的分業を認めることができる。即ち女は主として植物性食物や薪水のことを受持ち、男は獵に出て獸肉の食物を受持つてゐる。

更らに吾々はこゝに、「個人的食物探究」とは正反對な社會的勞働の一圖景を見るのであつて、

* グローセ著「家族の諸形態」第三〇頁。

それは同時に、最も原始的な社會において、如何に各人が必要な勞働力を發揮するように留意されてゐるかといふことの、一つの證據を吾々に示すものである。たとへば、「ヘバラ種族の間では、病氣でない限りすべての男子が食物のために骨折るものと期待されてゐる。或る一人の男子が怠けて營舎にとゞまつてゐる時は、他の者から罵られ、辱かしめられる。男も女も朝早く營舎を出て食物を探しにゆく。十分に狩りをしたら男も女も獲物を最寄りの池に運び、そこで火をおこして獸肉を炙ふる。年寄りが食物をすべてに平等に分配してから、男も女も子供も皆仲よく一緒に食事をする。食事が終ると女が残りを營舎に運び、男は狩りをつゞける。」

今度はオーストラリア黑人の間における、生産の計劃をもつと仔細にしらべて見よう。この計劃は殊の外複雑であつて、微細な點に互つて作られてゐる。各オーストラリア種族は多數の群團に分れ、この群團はそれぞれ彼れ等が尊崇してゐる動物または植物に従つて命名され、種族地域内の一定の限られた地域をそれぞれ所有してゐる。だから或る地域はたとへばカンガル族に屬し、第二の地域はエミウ族（エミウは駝鳥に似た巨鳥である）に、第三の地域は蛇族（オーストラリア黑人は蛇類をも食用にしてゐる）に屬するといふ風である。この「トーテム」は最近の科學的研究によれば、殆んど純粹にオーストラリア黑人が食用にしてゐる動物植物だけである。こゝにいふ群團はそれぞれ酋長を有し、酋長は狩獵を指揮命令する。さて動物植物の名とそれに應ずる崇拜とは決して空虚な形式ではなく、オーストラリア黑人の各個の群團は、事實においてその群團の名となつてゐる動物植物の食ひ物の世話をして、この食料の源泉の維持と續生とに心を配る義務

がある。しかも各群團は自分のためにそうするのでなく、何よりもまづ種族中の他の群團のためにそうするのである。たとへばカンガル族は、カンガルーの肉を自分以外の種族仲間のために供し、蛇族は蛇を供給し、蜈蚣族は御馳走と見做されてゐる蜈蚣を保護するといふ風に。特に注意すべきは、すべてこゝにいふことは厳格な宗教上の風習や、壯大な儀式と結びついてゐるといふことである。たとへば各群團の人間は、その群團自身のトーテム動物植物を、全然、または極く制限的にしか食つてはならぬのであつて、それを他の群團の人間のために調へなければならぬといふのが、殆んど一般的常則である。たとへば蛇族の人間が蛇を狩り取つた場合には、——非常に飢ゑてゐるときの外は——自分で食はずに残して、他人のために營舎に持つて歸らなければならぬ。同じくエミウ族の人間は、エミウ鳥の肉は自分では極く僅かしか食はず、その卵と、それから藥として用ゐられるその脂肪とは、全然自分のものとせず種族仲間に渡すであらう。また他方では他の群團は、それに應じたトーテム族の許しがなければ、動物や蛇を狩つたり、採取したり、食用にしたりしてはならぬ。毎年それぞれの群團によつて、トーテム動物植物の續生を（唱や吹奏や種々の儀禮によつて）保證するための壯嚴な儀式が催され、その後初めて他の群團がその動物なり植物なりを食ふことを許される。儀式をいつ行ふかといふ時期は酋長が取り定め、酋長が矢張り儀式を指揮する。そしてその時期は直接に生産條件と關聯してゐるのである。中央オーストラリアでは長い旱魃季があつて、その季節には動植物がひどく惱むのであるが、また短い雨季があつて、それによつて動物の増殖が行はれ、植物が繁茂する。そこでトーテム群團の大

多數の儀式は、この好季節を前にして行はれるのである。ラッシュェルはオーストラリア人がその最も重要な食料に應じて自分の名をつけると言はれたとき、まだそれを「喜劇的誤解」と見做してゐた。しかしながら右に概説したトーテム群團の體系の中に、何人と雖も一見して完全な社會的生産の組織を認めるに相違ない。個々のトーテム群團は明らかに一個の廣大な體系の各要素に外ならぬ。すべての群團が一個の秩序立つた計劃的な全一體を成し、各群團はまた一個の統一的指揮の下に、全く組織的且つ計劃的にふるまつてゐる。ところがこの生産制度が宗教上の形を取つて、即ち禁忌、儀式その他種々の形を取つて現はれるといふ事實は、この生産計劃が太古の時代のものであること、この生産組織は數百年、いな數千年以前にすでにオーストラリア黑人の間に存してゐたことを證するに外ならぬものであつて、そのためにこの生産組織は動かすべからざる法式に固定する時間があつたのであり、かくて本來は單に生産と食物の調達といふ點からのみ目的に適つてゐたのが、やがて神祕な聯繫に對する信條と化したのである。

こゝにいふ相互關係は、初めイギリスのスペンサーとヂレンとによつて發見されたのであるが、もう一人の學者フレイザーによつても確證されてゐる。フレイザーはたとへば明白に次ぎの如く述べてゐる、「吾々はトーテム的社會における種々のトーテム群團が、互ひに孤立せず生活してゐることを記憶しなければならぬ。トーテム群團は混交してゐて、その魔術的勢力を公安のためにも用ゐてゐる。最初の制度から言へば、カンガル族は——吾々にして誤らなければ——外のすべてのトーテム群團の用に役立てるためと、自分自身の用に供するためとに、カンガルを飼

つたり殺したりしてゐた。そして螟蛉トーテムの場合も、鷹トーテムやその他の場合もさうだつたと思ふ。ところが宗教上の形を取つた新制度の下においては、トーテム群團は、それぞれ自分のトーテム動物を殺したり喰つたりすることを禁ぜられるに至り、カンガル族はカンガルを生産することを依然として續けはしたが、もはやそれは自家用のためではなくなつた。エミウ族は依然としてエミウ鳥の増殖に携つたが、彼れ等自身はもはやエミウ鳥の肉を味はふことを許さず、螟蛉族は引きつゞき螟蛉の繁殖のために魔術を行つたが、この御馳走は爾來他人の胃袋のために宛てられてゐたのである。」一言でいへば、今日吾々に對して禮拜の制度となつて現はれてゐるのは、すでに太古の時代においては、組織化された社會的生産と廣汎なる分業との單なる制度だつたのである。——次にオーストラリア黑人間の生産物の分配に眼を轉ずるなら、吾々は何處よりも精細にして複雑な制度を認める。獵で獲た獸、發見された鳥類、採取された一掴みの果實は、ひとつ残らず堅固な規定に従つて、計劃的に社會のあれやこれやの成員の消費に向けられる。たとへば女が採取した植物性の食物は、母とその子供とに屬する。男の獵の獲物はそれぞれ規定に従つて分配される。この規定は各種族によつて異なるが、すべての種族の間に極く詳細に定められてゐる。たとへば主としてヴィクトリア地方において、オーストラリア西南部の民族を観察したイギリスの學者ホイットは、次ぎの如き分配方法を觀察してゐる——

「一人の男が營舎から或る程度の離れたところで、一匹のカンガルを殺す。他の二人の男が彼れの連れとなつてゐるが、その場合にカンガルを殺す手傳ひをするようなことはしない。營

舎から可なり離れてゐるので、カンガルは持ち歸る前に炙られる。最初の男が火を焚きつけ、他の二人が獸肉を切り、三人が臟腑を焼いて食ふ。その分配は次ぎのように行はれる、即ち第二および第三の男は、その場に居合はせ、且つ解剖に手傳つたために、一本の脛と尻尾と、それから臀肉の一部の附いた片腿とを受取る。第一の男はその残りを受取つて營舎に持つて歸る。頭と背肉とはその男の妻が妻の兩親に運び、その残りがその男の兩親の分となる。彼れがちつとも肉をもつてゐない場合は自分の分として少しばかりを受取るのだが、たとへば一疋の袋鼠オースムをもつてゐる場合は、すつかり譲つてやる。彼れの母が魚を捕つた場合は、彼れにそのうちの一部分を與へるだらうし、でなければ舅姑が自分の分から幾分を分けてやる。また舅姑は彼れにその翌朝も幾分を與へる。子供はすべての場合に祖父母によつて充分あてがはれる。或る種族では次ぎのような規定が行はれてゐる、即ちカンガルならカンガルのうち、殺した當人が臀股の肉を、父は背肉と肋肉と肩と頭とを受取り、母は右の腿を、弟は左の前脚を、姉は背中に添つた一切れを、妹は右の前脚を受取る。父は尻尾と背中の一切れとを更らに自分の親に與へ、母は腿の一部と脛とを自分の親に與へる。熊は獵者自身が左の肋肉を受取り、父は右の後脚を、母は左の後脚を、兄は右の前脚を、弟は左の前脚を受取り、姉は背肉を、妹は肝臟を受取る。右の肋肉は父の兄弟のものとなり、側肉は母方の叔父に、そして頭は若い男たちに與へられる。

これに反して他の種族では、手に入れた食料は、つねにすべてその場に居合はせた者の間に平等に分配される。たとへば一匹のワラビー獸が殺され、その場合にたとへば十人か十二人の人間

があるとするは、各人がその獸の一部分を受取る。獵者から自分の分を與へられないうちは、そのうちの何人と雖も、その獸にも、その肉片にも手を觸れない。その肉が炙られてしまつた時にも、獸を取つた人間が偶々その場にゐない場合は、何人と雖もその人間が戻つてきて、それを分配しないうちは手を觸れない。女は男と等しい部分を受取り、子供は兩方の側から注意深くあてがはれる。

分配方法は各種族によつて種々異つてはゐるが、矢張り儀式の形を取つて現はれ、箴言の形で考へられてゐるといふ點に、その古代的性質を現はしてゐる。即ち數千年も昔の傳統がそつといふものゝ形を取つて現はれてゐるのであつて、それは各時代の人々によつて、先祖代々傳はつてきたもの、犯すべからざる戒律と見做されて、嚴格に守られてゐるのである。ところがこの制度は最も明瞭に二つのことを示してゐる。これは第一に、おそらく最もおくれてゐる人種たるこのオーストラリア黑人の間には、生産ばかりでなく消費も、共同の社會的な事柄として計劃的に編成されてゐるといふこと、第二は、この計劃は明らかに社會の全員に對する配慮と保護とを眼中においてゐることを示してゐるのであつて、しかもそれは各人の食物の欲望と給付力とに應ずるよりに行はれてゐる。即ちあらゆる場合に第一に老人が配慮を受け、そしてまた老人は、たとへば母なら母は幼兒のために世話をするといふようになつてゐる。このようにオーストラリア黑人の全經濟生活——生産、分業、食料の分配——は、極めて嚴格に計劃的に——太古の時代以來堅固な規定となつて——編成されてゐるのである。

今度はオーストラリアから北アメリカに轉じよう。こゝでは西部にインディアン族が極く僅かばかり残つてゐて、カリフォルニア灣のチブロン島と近接大陸の狭小な地帯とに住んでゐるが、この種族は世界から全然遮断されてゐるのと、外人に對して敵意を有してゐるのとで、その太古からの風俗を大部分純粹のままに保存してきてゐる點で、特別の興味を呈するものである。一八九五年に合衆國の學者が、この種族の研究のため探險を企て、その成果はアメリカ人マックジーによつて誌されてゐる。それによると、セリ・インディアン種族——目下極めて稀少な此の小民族はかく呼ばれてゐる——は四群に分れ、その各々がそれぞれ一動物の名稱を帯びてゐる。そのうち最も重要な二群は、ベリカン群團と海龜群團とである。各自のトーテム動物に關する群團の風俗、習慣、戒律は極秘に附せられ、殆んど何も確かめることができぬ。しかし同時に吾々がこのインディアン種族の食物は、主としてベリカン鳥の肉、海龜、魚類、その他海棲動物から成ることを知り、そして右に述べたオーストラリア黑人の場合のトーテム群團の制度を想ひ起すなら、矢張りこのカリフォルニアのインディアン種族の場合にも、トーテム動物に對する祕密の禮拜が行はれ、且つ種族がそれぞれトーテム群團に分かれてゐるのは、分業をもつて嚴密に編成された太古の生産制度が、宗教的象徴に化石して残つてゐることを現はしてゐるのに外ならぬと斷言して差支へあるまい。この説を確かめるものは、たとへばセリ・インディアンの最高の守護神がベリカン鳥だといふ事情である。この鳥こそは同時にまた、この種族の經濟的存在の基礎を成すものに外ならぬのである。ベリカンの肉は主要食物であり、ベリカンの皮は衣服や寢具に用ゐられ、

盾に作られ、また外人に對する最も重要な交易品となつてゐる。いまセリ種族の最も重要な勞働形態、即ち狩獵は、今日にいたるまで嚴格に規定されてゐる。たとへばベリカン狩りは、立派に編成された共同事業であつて、「少くとも半儀式的な性質のもの」である。ベリカン狩りは一定の時期に行ふことを許され、しかも孵化期には、この鳥は後繼ぎが絶えないように保護されてゐる。「屠殺がすむと(この鈍重な鳥を大群的に打ち殺すことは決して難事ではない)今度は一同の牛飲馬食が始まり、餓ゑ切つた家族は肉の柔かい部分を無我夢中で貪り、大騒ぎで酒を飲みつゞけ、そのまゝそこへ寢込んでしまふ。翌日になると女は鳥の死骸を探し廻る、尤も鳥は少くとも羽毛が傷付いてゐるのだが、女は細心にその皮を剥ぎとる。」この饗宴は幾日もつゞき、それに伴つて色々の儀式が行はれる。こゝにいふ「牛飲馬食」、こゝにいふ「無我夢中の貪食」——おまけに大騒ぎ、——ビュヒャー教授ならこれを純動物的ふるまひの徴候だと極めるだらうが、實際上には——取りも直さずその儀式的性質がこれを充分に證明してゐるように——實に整然と編成されてゐるのである。即ち狩獵の計劃性に伴つて、分配および消費の嚴格な規定が行はれてゐる。共同飲食は一定の順序を伴つて行はれる。即ち第一番に酋長、同じく狩りの指揮者、次ぎに残りの戰士が年齢順に並び、その次ぎに最年長の婦人、それからその妹たちが年齢順に並び、最後に子供がこれも年齢順に並び、乙女は、殊に年頃になつたものは、婦人連の好意によつて優待される。「家族または氏族の各員は、必要な衣食を要求することができる、そしてこの場合そゝいふ必要を充たすように配慮することが、他の各人の仕事である。この義務の程度は、一部は近隣の度合

ひに合致し、最も近い人間が一番多く義務を負ふのだが、主として群團における地位と責任（普通に通に年齢と一致する）が規準となる。食事の場合には下座の人々に充分に食物が残るように配慮するのだが、上座の人々の義務であり、そして順々にこの義務は、無力の小兒の利益も配慮されるような具合に行はれてゆく。」

南アメリカについては、ブラジルの野蠻種族、ボロラ族に關するフォン・デル・シュタイネン教授の證言がある。こゝでも第一にまづ典型的分業が行はれてゐる。即ち婦人は植物性食物を給し、尖つた棒で根果を求めたり、敏捷に棕櫚の樹に攀ぢ登つたり、胡桃を拾ひ集めたり、榴で椰子菜を摘んだり、果實を探したり何かする。それからまた植物性食物を調理したり、麩を拵へたりもする。家に歸つた時は男に果實や何かを與へ、獸肉の残つたのを受取る。分配と消費は嚴密に規定されてゐる。

シュタイネンは言ふ、「禮儀作法はボロラ族が共同で食事をするを妨げなかつたので、その代りに彼れ等は別に不思議な習慣を有してゐた。この習慣は、乏しい獲物に頼つてゐる種族は、何等かの方法によつて分配の際の喧嘩を豫防する手段を探し出さなければならぬことを、明瞭に物語るものである。そこでまづ第一に實に奇妙な規定が生じた。即ち、射殺した當人が決して獲物を焼かずに、他人に遣つてそれを焼かせるのだ！ 貴重な毛皮や牙に對しても、そついで豫防策が講ぜられた。ジャグアル豹が射止められると、一大盛宴が催され、肉は食はれる。だが毛皮と牙は獵者が受取らずに、最近に物故した人間の最も近い親族に與へられる。獵者は尊敬される、

そして各人からアララ鸚鵡の羽根（ボロラ族の第一等の裝飾品）と、オアス紐で飾つた弓を贈物として受ける。しかし不和を防止する最も重要な策は、醫者（またはヨーロッパ人がこゝにいふ場合に用ゐるのを常とする言葉で言へば、魔術者または祭司）の役目の一部となつてゐる。」これはどんな動物でも殺す場合に立會はなければならぬ、そして屠獸でも植物性の食料でも、一定の儀式を行つて後に初めて分配に委される掟である。狩獵は酋長の懸け聲と指揮との下に行はれる。青年並びに未婚の男子は共同に「男部屋」に住み、そこで共同に働き、武器や道具や飾りを拵へたり、紡いだり、相撲を取つたり、また極く嚴格な規律と秩序とを以て、前に述べたような風と共に食事をする。また曰く、「成員の一人が死ぬと家族は大した損害を受ける。けだし死者が使つてゐたものは、悉く焼き捨てられるか、河に投げ込まれるか、骨籠に填められるかして、死者が戻つてくる機因を無くするようにされるからである。それから小舎が残る隅なく掃除される。たゞ後に残つた者は色々進物を贈られ、弓矢も作つて貰へる。そついでジャグアル豹が殺された場合には、毛皮は最近に死んだ婦人の兄弟や、最近に死んだ男子の叔父などに與へられる風習となつたのである。」このように、生産の場合にも分配の場合にも、一定の計劃と社會的編成とが行はれてゐる。

アメリカ大陸の最南端までくると、そこには低級な自然民族の一つ、フォイエラランド族を見出す。これは南アメリカ南端にある不毛の群島に住んでゐるのであつて、この民族のことが最近に傳へられたのは十七世紀のことであつた。當時フランス人の海賊が永年南洋で仕事をしてゐた

のに刺激されて、一六九八年にフランス政府は遠征隊を南海に派遣した。それに加つた技術家の一人が當時の日記を残してゐるが、それにはフォイエラランド族について次ぎの如き貧弱な報道がある。

「各家族、即ち父と母と、未婚の子供とは、一艘の獨木舟をもつてゐて、必要なものを悉くそれで運んでゐる。夜になつた場合はそこで寝る。有合せの小屋といふものはないので、家族がそれを建てる。——彼れ等は眞中に一寸した火を焚きつけ、それを圍んで草の上に入り亂れて寝ころぶのだ。腹がへつてくると貝類を焼き、その中の最年長者がこれを均等に分配する。男の主要な仕事と義務は、小屋を建てること、獵をすること、魚を捕ること、女は獨木舟の世話と貝類の調理とを受持つ。……彼れ等は鯨獲りを次ぎの順序で行ふ。まづ五六艘の獨木舟で一緒になつて海に出て、鯨を見付けたら、これを追跡して、鯨を骨か石で器用に尖らしてある大きな箭を打ち込む。……獸か鳥を殺したり、普通彼れ等の食物となつてゐる魚貝を捕つたりした場合は、すべての各家族に分配するのであつて、彼れ等が生活資料を殆んど悉く共有してゐるといふ點は、吾々に優つてゐる點である。」*

今度はアメリカからアジアに轉じよう。こゝではアンダマン群島（ベンガル灣上）のミンコピ

* エム・ジ・マルセル述、一八九〇年パリにおけるアメリカ關係者國際大會第八回會期報告、パリ、一八九二年刊、第
四九一頁。

1といふ倭小種族のことを、イギリスの探險家、イー・エッチ・マンが次ぎの如く傳へてゐる。氏はこの種族の間に十一年を過ごし、この種族のことについてはヨーロッパ人中最も精密な知識を有してゐる。

「ミンコピ族は九つの種族に分れ、各種族は、十人乃至五十人より成る幾多の小群團に分れてゐるが、群團は往々三百人位の場合もある。各群團はそれぞれ首長を有し、各種族全體にも一人づゝ酋長がゐて、各群團の首長の上に位してゐる。だがその權力は極く局限されてゐて、自分の種族に屬する全群團の會議を催すことが、その主もな仕事になつてゐる。それに酋長は狩獵、漁撈の場合や移住の時に引率者となり、また争ひの仲裁者となる。各群團内には共同勞働が行はれ、しかも男女間の分業を伴つてゐる。即ち男は狩り、魚捕り、蜂蜜の調達、獨木舟、弓矢、その他の器物の製造を受持ち、女は薪水を運んだり、食用の植物を取つてきたり、裝飾品を拵へたり、料理したりする。子供や病人や老人を世話したり、小屋に火を絶やさないようにするのは、男女を間はず家に残つてゐる者の義務である。勞働能力のある人間は、いづれも自分と群團のため働く義務があり、また常に食糧が貯へられてゐるようになつてゐる。友人が泊つた場合にそれで饗應するのが普通である。幼児や病人や老人は特別に一般の世話を受け、その日常の欲望を、他の一般人よりも良く充たしてやるようになつてゐる。

食事については一定の規則ができてゐる。既婚の男は、同じく既婚の男か男の獨身者とだけ、食事を共にすることが許され、餘程年を取つてゐる場合は別として、自分の一家の婦人以外には、

如何なる婦人とも一緒に食事をすることを許されない。未婚者は別々に——青年は青年、娘は娘といふ風に——食事をする事になつてゐる。

食事の調理は普通に女の義務で、男の留守の間に用意するのを常とする。だがお祭りの當時や、特別に澤山の收穫のあつた狩獵の後などのように、女が普通以上に薪水を調達することが必要な場合は、男の一人が代つて料理を受持ち、食事が半分出来ると、これを出席者に分けて調理を託し、各自が自分の爐で料理をつゞける。酋長が出席してゐる場合は、最初の分を、しかも一番良いところを受取り、その次に男、それから女と子供といふ順になる。あまつたものは分配者のものとなる。

武器や器物やその他の品物を製造する場合には、ミンコビーは著しき忍耐と非常な勤勉とを現はし、一片の鐵を石斧でコッコ加工して、槍の穂先や箭の根を拵へたり、一挺の弓の形を直したりすることに、何時間もかゝり切りになつてゐることが出来る。そんなに一生涯になる必要は差當り少しもない場合にも、こういふ仕事に専心してゐる。彼れ等を我利々々だなどと決して誣るわけには行かぬ——といふのは、彼れ等は自分の持つてゐる中で一番よいものを屢々人に呉れる(勿論「分配する」といふべきを、ヨーロッパ式に誤解して、「呉れる」といふ言葉がこゝに使つてあるのだ)、そして上出来の品物を自分の用に取つて置くようなこともしなければ、自分のものだからと特に念入りに拵へるようなこともしないからである。

以上の幾多の例に、もう一つ、アフリカの野蠻民族の生活を調べて、おしまひにしよう。こゝ

では普通にカラハリ荒原のブッシュマン倭小種族が、人類文化の最低の状態の例を示してゐる。ブッシュマン族については、ドイツ、イギリス、フランスの研究者は、この種族が群團を成して生活し、各群團が一個の共同の經濟生活を營んでゐることを異口同音に傳へてゐる。これらの小團體の中には、生活資料や武器や何かについても完全な平等が行はれてゐる。彼れ等があちこち歩き廻つて見付けた食料は、囊に容れて、營舎に持つて歸つてあける。「そこで一日の收穫がこゝろがり出す——根類、球莖、果實、螟蛉、犀鳥、大蛙、龜、蟋蟀、これに蛇や蜥蜴などさへも出てくる」と、ドイツ人パッサルゲは語つてゐる。ついで獲物は全員の間に分配される。「果實、根類、球莖などの植物や小動物を、定つた仕事として採集するのは女の役目である。女はさういふもので群團を養ふことになつてをり、子供がその手傳ひをする。男も偶然さういふものが見付かつた時は持つて歸るが、しかし採集は男にあつては全く餘事である。男子の役目は第一に狩獵である。」狩りの獲物は群團が共同で食ふ。他の仲間の群團の者に旅に来てゐるブッシュマンも共に爐に坐つて食物を與へられる。加ふるにパッサルゲは、ブルジョア社會の精神的眼鏡をかけた立派なヨーロッパ人として、ブッシュマンが何でも彼でも、どんな残り物に至るまでも他人と分けてゐる、その「過度の徳性」に、彼れ等の文化的無力の原因を認めてゐる！

かくて最も原始的な民族、しかも定住および農耕にはまだまだ至らないで、謂はゞ經濟的發展の連鎖の始點に立つてゐるような民族は、直接の觀察によつて吾々に知られてゐる限りにおいて、グローセ氏の圖式におけるとは全然別個の事情を示してゐることを知る。「分散」や「分立

「經濟」ではなく、共產主義的組織の典型的特徴を伴へる、嚴格に規定された經濟的共同社會を、吾々はいたるところに見るのである。これは「低級狩獵民」に關するものである。「高級狩獵民」に關しては、モルガンが詳細に描いてゐるイロクォイ族の場合の氏族經濟の圖景がすべてを語つてゐる。それに牧畜民もまた、グローセの大膽な主張の嘘つばちであることを示す充分な材料を供してゐる。

故に農業マルク組合は、吾々が經濟史において出會ふ唯一の原始共產主義組織體ではなく、單にその最高度に發達したものであり、最初の原始共產主義組織體ではなく、最後のものなのである。このマルク組合そのものは農耕の產物でなく、測るべからざる大昔の共產主義の傳統の產物なのであつて、この共產主義は氏族組織の胎内で生れ、最後になつて農業の上に適用され、この農業において發達を遂げて、共產主義自身の没落の期が熟したのである。このように、事實はグローセの圖式を徹頭徹尾確證してゐない。いま共產主義は經濟史の中に一寸現はれて、すぐさま引込んでしまふといふ奇妙な現象に對する説明を求めらるゝなら、グローセ氏は機智に富んだ「唯物論的」説明を與へてくれる。曰く、「氏族が他の文化形態の民族におけるよりも、低級農耕民の間にはるかに多くの確實性と權力とを獲得したのは、氏族はこの場合に初めて住居、財産、經濟の共同社會として現はれるものだからである。このことは吾々が事實において認めてきたところである。併しながら氏族がこの場合にそういふ形を取つたといふことは、矢張りまた人間を糾合する農業經濟の本質から説明されるものであつて、これに反して狩獵および牧畜は人間を分散させる

ものである」(前掲書第一五八頁。)これで見れば、勞働の場合に人間が「糾合」されてゐるか、「分散」してゐるかといふことが、共產主義が支配してゐるか、私有制度が支配してゐるかを決定する。たゞ惜しむらくはグローセ氏は、人々が一番よく「分散」されるところの林地や草地が一番長く——所によつては今日にいたるまで——共有財産となつてゐたのに、何故に人々が「糾合」されるところの耕地が一番早く私有に移つたか、その理由を吾々に説いて聞かせることを忘れた。そして更に全經濟史のうちで一番多く人間を「糾合」するところの生産形態、即ち近代的大工業が、何故に全然共有財産を喚び起さずに、私有財産の最も赤裸々な形態たる資本家的財産を喚び起したかを、吾々に説明することを氏は忘れたのである。

かくて知る、グローセの「唯物論」なるものは、矢張りまた次ぎの眞理を證明する一つの證據に外ならぬ。即ち、歴史を唯物論的に理解するためには、單に「生産」と社會の全生活に對するその重要性とを云々するだけでは足りないこと、即ち史的唯物論は、そのもう一つ別の方面たる革命的發展思想から切り離してしまへば、——マルクスの場合には探究的精神の天才的羽ばたきだつたとは反對に、——不細工な松葉杖となるといふことである。

しかしながら何よりもまづ、グローセ氏は生産だの、その形態だのと頻りに口にしながら、その實生産關係といふ最も根本的な概念について、一向ハッキリしてゐないことが示されてゐる。氏が第一に生産形態を、狩獵、牧畜、農耕といふような純外部的な範疇と解してゐることは、すでに吾々の見た通りである。そこでこゝにいふ各「生産形態」内において、所有形態の問題——即

ち共有財産か家族有財産か私有財産か、そして誰れに財産が屬してゐるかの問題——を決定するために、グローセは、一方に「土地財産」、他方に「動産」といふ範疇を分けてゐる。そして氏はこれらの財産が種々の所有者に屬してゐるのを見て、「動産」と不動産の土地財産と、いづれが「重要」であるかを問題としてゐる。そこでグローセ氏は氏にとつて「重要」に見える方が、社會の所有形態を決定するものと見做してゐる。たとへば氏は高級狩獵民の場合には「動産はすでに重要性を獲てゐて」土地財産よりも重要であると斷定し、そしてその場合動産は私有財産たる食料なのだから、氏は明白に土地の共有が行はれてゐるにも拘らず、この場合何等共產主義經濟を認めないのである。

さてこういふような純外部的特徴に基く區別——動産および不動産といふような——は、生産にとつて毫も意義を有するものでなく、その外のグローセ式區別、即ち男性支配と女性支配とを以てする家族形態の區別や、分散作用と糾合作用とを以てする生産形態の區別と略々同じ程度の代物である。「動産」といふものは、たとへば食料から成る場合もあり——もしくは原料、或は裝飾品と儀禮用品、乃至は道具から成る場合もある。それは社會自身の使用のために拵へられることもあり、交換のために拵へられる場合もある。それぞれの場合によつて、「動産」は生産關係に對してそれぞれ異つた意義を有するだらう。然るに一般にグローセ氏は、民族の生産關係、所有關係を——この點において彼れは今日のブルジョア學問の典型的代表者なのである——食料その他最も廣い意味での消費品によつて判斷してゐる。氏は消費品が個人によつて所有され、使用

されてゐるのを見出したとすると、氏にとつては、その民族の間に個人所有が支配してゐることが證明されたことになる。こういふのが、即ち今日原始的共產主義が「科學的」に反駁される典型的方法なのである。こういふ考へ深い立場からすれば、東洋に屢々見るところの、一緒に托鉢をして一緒に施し物を食ふ乞食の共同社會も、盗んだものを仲よく味ふ盜賊の一團も、いづれも「共產主義經濟組合」の胚芽となつて現はれる。これに引きかへ、土地を共有し、共同で耕作はするがその成果は家族別に消費するマルク組合は「極く局限された意味においてのみ經濟共同社會」と名づけ得られるといふのだ。約言すれば、生産の性質にとつて決定的なものは、この見解に従へば消費資料の所有權であつて、生産手段のそれではなく、即ち分配の條件であつて生産のそれではない。こゝに吾々は全經濟史の理解にとつて根本的に重要な、經濟學的理解の基點に到達したのである。これからはグローセ氏のことは運命のまゝに委ねて、一般的にこの問題に注意を向けよう。

四

誰れでも經濟史の研究に入つた人、社會の經濟關係が歴史的發展のうちにとつてきた種々の形態を學び知らうと欲する人は、この歴史的發展の試金石および尺度として、經濟關係の如何なる特徴を撰ぶべきかを、何よりもまづハッキリ知つてゐなければならぬ。或る一定の領域における夥しい現象の中に針路を見出し、特にその歴史的順序を見付け出すためには、謂はゞそれらの現

象の運動の中心であり、その内部的樞軸となつてゐるところの契機を、充分明瞭に知つてゐなければならぬ。たとへばモルガンは、文化史の尺度として、並びにその場合場合の文化史の高さの試金石として、一定の契機——生産技術の發達——を選んだ。それによつて彼れは事實において、人類の文化的存在全體の、謂はゞ根を握つたのである。吾々の目的たる經濟史のためには、モルガンの尺度だけでは充分でない。社會的労働の技術は、外界的自然に對する人間の支配の、その場合における段階を精確に示すものである。生産技術の完成が一步進んだのは、同時にまた物理的自然に對する人類精神の征服が一步進んだことであり、従つてまた一般的人類文化の發達が一步進んだことである。しかしながら特に一社會における生産の形態を研究せんと欲するならば、自然に對する人間の關係だけでは充分でなく、その場合吾々の關心するところは、第一番に人間労働のもう一つの方面——即ち、労働の場合における、人間相互の關係——である。謂ひかへれば、吾々の關心するところは、生産の技術ではなく、生産の社會的編成である。或る原始的民族が陶工旋盤を使用し、製陶を営んでゐるのを吾々が知つてゐるとすれば、これはその民族の文化的階段を知る上に、極めて大事な點である。モルガンは技術上におけるこゝろいふ重大な進歩を以て、彼れが野蠻期から未開期への過渡と名づけてゐる一文化期全體の境界石としてゐる。しかしこの民族の生産形態については、右に擧げただけの事實を基礎としてはホンの僅かしか判断を下すことができぬ。それには吾々はまづ幾多の事情に通曉してゐなければならぬ。たとへば、その社會においてどんな人々が製陶に従事してゐるか、社會に陶器をあてがふのは社會の全員か、それと

もその一部分、たとへば婦人といふ一つの性だけに限られてゐるか、製造された陶器は共同體、たとへば村落自身の用に供せられるか、それとも他との交換に供せられるか、製陶に従事してゐる各人の生産物は、單に當人によつてのみ使用されるか、それとも造り出された物全體が、共同に社會の全員の用に供せられるか、といふような事情である。

一社會における生産形態の性質を決定し得るものは、分業、消費者間における生産物の分配、交換といふような種々様々な社會的關係であることを知る。ところが經濟的生活のこゝろいふ方面それ自身は、すべて生産といふ決定的要因によつて規定されてゐるのである。生産物の分配も、交換も、それ自身は結果的現象に外ならぬことは一見して判明する。生産物が消費者の間に分配され、交換され得るためには、まづ初めに生産物がつくり出されてゐなければならぬ。故に生産そのものが、社會の經濟的生活の、第一の且つ最も重要な契機である。しかるに生産の過程においては何が決定的な事柄かといへば、労働する者がその生産手段に對して如何なる關係に立つてゐるかといふ點である。各労働は一定の原料、一定の仕事場、それから——一定の道具を要する。人間社會の生活において、労働の道具とその製造とが如何に大きな意義を有してゐるかといふことは、すでに吾々の知れる通りである。ところが、こゝろいふ道具とその他の物的生産手段とを以て労働を行ひ、社會の生活に必要な、極く広い意味での消費資料をつくり出すためには、右に加ふるに人間の労働力が必要である。そこで、労働する人間がその生産手段に對して有する關係が、生産の第一問題であり、その決定的要因なのである。但し茲に労働する人間とその生産手段との

關係といふ意味は、技術上の關係をいふのでもなければ、人間がそれを以て勞働するところの生産手段の完成の程度が高いか低いかといふことでもなく、人間が勞働する場合の順序方法のことでもない。吾々の意味するところは、人間勞働力と物的生産手段との社會的關係である。即ち生産手段が何人に屬してゐるかといふ問題である。時代の變遷につれてこの關係は種々様々に變つてきた。だがそれにつれて生産の全性質が變化し、生産物の分配、分業の成態、交換の方向と範圍、最後に社會の物質的および精神的な生活全體がその都度變化したのである。勞働する者がその生産手段を共有してゐるか、それとも個人が各自に所有してゐるか、それとも個人がそれを所有してゐないか、それとも勞働する人間が生産手段と一緒に、それ自身生産手段として、勞働しない人間の所有物となつてゐるか、不自由民として生産手段に縛りつけられてゐるか、それとも生産手段を所有せざる自由人として、自分の勞働力を生産手段として賣ることを餘儀なくされてゐるか——その各々の場合によつて、或は共產主義的生産形態が生じ、或は小農的および手工業的生産形態が生じ、或は奴隸經濟、或は隸民制度の上に立つ莊園經濟、或はまた貨幣制度を伴へる資本主義經濟が生ずる。そしてこれらの經濟狀態の各々は、それぞれ獨特の様式に分業、生産物の分配、交換、社會的、法制的、精神的な生活を伴つてゐるのである。

人類の經濟史においては、勞働する者と生産手段との關係が根本的に變化するにつれて、その都度、他のすべての方面、即ち經濟的、政治的、精神的な生活もまた根本的に變化し、それに伴つて全然新たな社會が発生するといふことで充分である。社會の經濟的生活のすべてこれらの方面

の間には、慥かに間斷なき相互作用が成り立つてはゐる。生産手段に對する勞働力の關係が、分業、生産物の分配、交換に影響を與へるだけでなく、後者もまた前者の生産關係に反作用するものである。しかしながら作用の仕方が異つてゐる。各經濟段階に主として行はれてゐる分業の様式や、富の分配、就中交換は、勞働力と生産手段との關係から生じたものでありながら、この關係を漸次に覆へす場合もある。しかしながらこれらのものゝ形態は、勞働力と生産手段との關係が廢れてきて、この關係に或る根本的變革、明白な革命が起つた場合に初めて變化するのである。このように、勞働力と生産手段との關係におけるその場合場合の變革は、經濟史の途上に誰れにも分る大きな里程碑を形づくつてゐるのであつて、この變革は人類社會の經濟的進程における自然的時代を劃するものである。經濟史を理解するためには、その歴史の本質的なものを明らかにして、それを非本質的なものと區別することが如何に重要であるかは、今日ドイツのブルジョア經濟學において最も汎く行はれ、最も賞讃されてゐるところの、經濟史の分け方を吟味すれば分かる。といふのはビュヒャー教授の分け方を指すのである。ビュヒャー教授はその著『國民經濟の發生』の中で、經濟史を各時期に正しく分けることが、經濟史を理解する上に如何に重要であるかを論じてゐる。しかるに彼れはいつもの癖として、直ちに問題に入つて自分の合理的研究の業績を吾々に示すことをせず、まづ最初に自分のすべての先行者の不足の點を満足氣に並べ立て、彼れ自身の業績を正當に評價させる準備を與へる。

曰く、「ずつと遡つた時期における一民族の經濟を理解せんと欲する場合に、經濟學者が提出す

べき第一の問題は次ぎの如きものであらう。その經濟は國民經濟であるか？ その經濟の諸現象は今日のわが流通經濟のそれと同じ性質のものであるか、それとも兩者は互ひに本質を異にしてゐるか？ しかるにこの問題は、概念的分析、心理的分離的演繹の手段を以て、過去の經濟的現象を研究することを蔑にしない場合のみ、解決され得るものであつて、これらの手段は昔の「抽象」經濟學の巨匠の手にあつて、現代の經濟に對しても見事に保證されてきたものである。近來の「歴史」學派には次ぎの非難を惜しむわけには行かないだらう、即ち彼れ等はこの種の研究によつて過去の經濟時期の本質に徹することをせず、近代國民經濟の諸現象を捨象せる在り來りの範疇を、殆んどお構ひなしにそのまま過去の時代に移してゐる點、乃至は流通經濟上の概念を捏ね廻して、とうとう無理やりにすべての經濟時期に適應させる點である。……こゝろいふ點は、現代の文化民族の經濟様式と、過去の時期または文化的に貧弱な民族の經濟との區別を特徴づけてゐる方法に、一番明瞭に認められる。謂はゆる發展段階なるものを組立て、經濟史の發展道程を場當りに總括してゐるために、そんな風になるのである。……すべて從來のこの種の試みは、事物の本質に侵入することなく、皮相に固執してゐるといふ不都合を犯してゐる。そこでピユヒャー教授は如何なる經濟史の分け方を提出してゐるか？ それを聞いて見よう。「この全發展を或る一つの視點から把握せんとするなら、そゝいふ視點は、吾々を國民經濟の

*ピユヒャー著『國民經濟の發生』第五四頁。

本質的現象の中に導き入れると同時に、過去の經濟時期の組織上の契機を闡明してくれるものでなければならぬ。それは財の生産が財の消費に對して有する關係、もつと精確にいへば、財が生産者から消費者の手に届くまでに通過するところの道程の長さの外ならぬ。この視點からすれば、すべての經濟的發達を——少くとも充分な精密さを以て歴史的に辿り得るところの中歐および西歐の諸民族に對して——次ぎの三つの段階に分つことができる。

一、自足的、家内經濟の段階（純自己生産、無交換經濟）。この場合は財は、それがつくり出された場合と同一の經濟内で消費される。
二、都市經濟の段階（註文生産、または直接交換の段階）。この場合は財は、生産する經濟から消費する經濟に直接に移つてゆく。

三、國民經濟の段階（商品生産、財の流通の段階）。この場合は財は、消費されるに至るまでに常則として幾多の經濟を通過しなければならぬ。*

この經濟史の圖式はまづ第一に、それに包含されてゐないものがある點で興味がある。ピユヒャー教授にとつては、經濟史はヨーロッパ文化民族のマルク組合を以て始まる。即ちすでに高級農耕が行はれてゐる時代から始まるのである。高級農耕に先立つ數千年間に互る原始的生産關係、今日なほ數多の民族がそゝいふ状態にあるところの生産關係を、ピユヒャー教授は周知の如く

*ピユヒャー著『國民經濟の發生』第五八頁。

「非經濟」、即ち彼れの有名な「個人的食物探究」および「非勞働」の時代と名づけてゐる。かくしてビュヒャー教授は經濟史を、原始共產主義の最も晩期の形態から始めてゐる。即ち定住と高級農耕のために、不可避免的に原始共產主義が瓦解して、不平等、搾取および階級社會へ移行行く兆が現はれてゐた時期から始めてゐるのである。グローセは農業マルク組合以前の全發展時期における共產主義の存在を反駁したが、ビュヒャーはそういふ共產主義の時期そのものを經濟史から抹殺してゐるのである。

自足的「都市經濟」といふ第二段階も、シュルツの口吻でいへば、矢張り吾々がライプチヒ大學教授の「天才的眼光」に負ふところの劃期的發見である。たとへばマルク組合の「自足的な家内經濟」は、すべて自己の經濟的欲望をこの家内經濟内で充たしてゐる人々の一團を包含してゐるといふ點に特徴があるとすれば、中歐および西歐の中世都市——といふのは、ビュヒャーの「都市經濟」はそれを指すだけなのだから——の場合これと正反對である。中世都市には何等共同經濟が存せず、——ビュヒャー教授自身の口吻でいへば——ギルド手工業者の職場および市帯と同じ數の「經濟」があるのであつて、このギルド手工業者はそれぞれ——ギルドおよび都市の全般的規定の下にはあるが——自己のために生産し、販賣し、消費してゐた。だが一般としてはドイツでもフランスでも、中世ギルド都市は決して「自足的」な經濟領域を成してはゐなかつた。ただしこれらのギルド都市の存立は、取りも直さず田舎との相互的交換を基礎としてゐたからであつて、田舎から食料と原料を仕入れ、田舎のために手工業品を製造してゐたのである。ビュヒャー

1 は各都市の周圍に一定範圍の田舎の圈を劃し、これを「都市經濟」の中に加へて、都市とこの田舎との交換を、單に都市近郊の農民との交換といふ風に、自分に都合のよいように變へてゐる。都市商業の最上の顧客だつた富裕な封建領主——彼れ等は一部分は都市を遠く離れた田舎に散在してゐたが、一部分は都市に——殊に帝領都市および寺領都市に——本邸を構へ、しかもそこで一個の獨特の經濟領域を形づくつてゐた、そういふ封建領主の莊園をビュヒャーは全然考慮の外に置き、同様にまた中世の經濟關係、殊に都市の運命にとつて最大の意義を有してゐた外國貿易を度外視してゐる。だが中世都市の實際の特徴は何かといへば、中世都市が商品生産の中心點だつたことであつて、こゝに初めて商品生産が——限られた地域上ではあるが——支配的な生産形態となつたのであつた。この事實にビュヒャー教授は氣がついてゐない。反對にビュヒャーにあつては商品生産は、漸やく「國民經濟」において始まるのである——周知の如くブルジョア經濟學は、現在の資本家的經濟制度をそういふ作り話で以て特徴づけるのが習はしであつて、商品生産でなく資本家的生産であるといふ點をこそ特徴としてゐるところの、經濟的生活の或る一つの「段階」を、ブルジョア經濟學はそういふ風に胡魔化してゐるのである。グローセは商品生産を單に「産業」と呼んでゐるが、それに對してビュヒャー教授は産業を單に「商品生産」に變せしめて、單純な社會學者よりも經濟學教授のゑらさのほどを證明してゐる。

だがこういふ餘事から本題に移らう。ビュヒャー教授はその經濟史の第一の「段階」として、「自足的な家内經濟」をあげてゐる。これを彼れは如何なるものに解してゐるか？ ビュヒャーに

あつてはこの段階が農耕的村落組合を以て始まることは、すでに述べた通りである。しかるにビュヒャー教授はこの原始的マルク組合の外に、他の諸々の歴史的形態をこの「自足的家内経済」の段階に數へてゐる。即ちギリシヤ人およびローマ人の古代奴隷経済と、中世の封建的莊園経済とがそれである。ずつと大昔の時代からギリシヤの古代と中世全體とを経て、近代の入口にいたるまでの文化人類の経済史全體が、生産の一つの「段階」に總括され、それに對して中世ヨーロッパのギルド都市が第二段階として、今日の資本家的經濟が第三段階として對置されてゐる。このようにビュヒャー教授の經濟史では、インドの五河地方の山峽の中か何處かに點々として餘命を保つてゐる共產主義村落共同體と、アテネ文化興隆の絶頂期におけるペリクレスの家政と、中世におけるバウムベルクの僧正の封建的の館邸とが同一の「經濟段階」として同列に並んでゐる。しかしどんな小兒でも、苟くも學校の歴史教科書からいくらかでも皮相的知識を學んでゐるなら、この場合根本的に異つてゐる種々の事情が一括されてゐるといふことが判るに違ひない。一方農業共產體においては、農民大衆の間に財産および權利に對する一般的平等が行はれ、何等身分の區別がないか、あつても胚芽状態にあるにすぎないのに——他方、古代ギリシヤおよびローマ、並びに封建的中世ヨーロッパには社會に身分の區別がハッキリと形づくられ、自由民と奴隷、特權ある者と權利なき者、地主と農奴、富と貧困との對立がある。彼方には一般的勞働義務、此方には働く者の奴隷大衆と、働かざる者の支配的少數との對立。それにまたギリシヤ人やローマ人の古代奴隷經濟と、中世の封建經濟との間には、古代奴隷制度は結局ギリシヤ、ローマ文化の没落

をもたらしに反して、中世封建制度は都市商業を伴へる都市ギルド手工業を喚び起し、かくて結局は今日の資本主義をその胎内から生み出したといふ、非常に大きな相違が存してゐた。故にこのように天地の相違ある色々の經濟的および社會的形態や歴史的時期を一つ概念、一つの圖式の下に置く人間は、經濟時期に對して全く獨特の尺度を用ゐるに相違ない。しかるにビュヒャー教授は、萬物を一樣のものに化する「自足的家内經濟」の魔力をつくり出すために、如何なる尺度を用ゐたかを、教授自身が吾々に論じてくれて、囁んで含めるように吾々の理解の當惑を救つてくれてゐる。「無交換經濟」とは記録歴史の初めから近代に互つてゐる第一の「段階」の謂ひであつて、その中には中世都市が「直接交換の段階」として編入され、今日の經濟制度が「財の流通」として編入されてゐる。故に、無交換か、單純交換か、複雑交換か——もつと普通の言葉でいへば、無商業か、單純なる商業か、發達せる世界商業か——これがビュヒャー教授が經濟時期に對して用ゐてゐる尺度なのである。即ち商人がすでに現はれてゐるか否か、生産者と同一の人間であるかないか——これが經濟史の主要且つ根本問題なのである。吾々はこの機會に「無交換經濟」なるものをビュヒャー教授に贈り返したい。それはこの地上の何處にもまだ發見されてゐない大學教授式妄想に外ならぬものであつて、この妄想は古代ギリシヤおよびローマ、並びに十世紀以來の封建的中世に應用されて、途方もない向ふ見ずの歴史的幻想となつてゐるものである。だが生産關係でなく交換關係を一般的生産發展の尺度として認め、商人を經濟制度の中心點、あらゆる事物の標準と認め、まだ商人などといふものが全然存在してゐない場合に

も、これを判断の規準と認めるとは——何といふすばらしい「概念的分析、心理的遊離的演繹」の成果、とりわけあらゆる「皮相に固執すること」を斥けるところの、何といふ見事な「事物の本質への侵入」だらう！ 最初にすべての「舊來のこの種の試み」を鼻であしらひ、然るのちに先きに非難した交換の「皮相に固執すること」をそのまま根本思想として取りあげ、たゞそれを術學的なやりくりによつて間違ひだらけの圖式に分解してゐるにすぎぬビュヒャー教授の專賣特許の特製品よりも、まだしも經濟史を「自然經濟、貨幣經濟、信用經濟」の三期に分ける「歴史」學派の身分相應な圖式の方が、はるかに上出来であり、はるかに眞理に近いではないか。

經濟史の「皮相に固執すること」は、ブルジョア學問にあつては何等偶然なことではない。ブルジョア學者の一部は、フリードリヒ・リストの如く食物の最も重要な出所といふ外部の性質で分けて、狩獵、牧畜、農業、工業の各時期をあげてゐる——これは外面的文化史に對してすらも少しも充分でない分け方である。別のブルジョア學者は、ヒルデブランド教授の如く、交換といふ外面的形式によつて經濟史を自然經濟、貨幣經濟、信用經濟に分けてをり、乃至はまたビュヒャーの如く、無交換の經濟、直接交換を伴ふ經濟、商品流通を伴ふ經濟といふ風に分けてゐる。もう一つ別のブルジョア學者は、グロッセの如く、財の分配を經濟形態の判断の出發點としてゐる。一言でいへばブルジョアジの學者は、歴史的考察の正面に、交換、分配、消費——即ち生産の社會的形態だけを除いたすべてのもの——を持つてくる。言ひかへれば、取りも直さずあらゆる歴史的時期において決定的なものだけを除外してゐる。即ち交換およびその諸形態、分配および

消費が特殊の形を取つて、その都度そこから論理的結果として生ずる、そつといふ大事な根元を除外してゐるのである。何故だらうか？ その根據は、彼れ等ブルジョア學者が、「國民經濟」即ち資本主義經濟を人類歴史の最高最終の段階と説き、その資本主義經濟が革命的傾向を伴つて更らに世界經濟的に發展することを否認してゐると同じ根據である。生産の社會的成態、言ひかへれば勞働する人間が生産手段に對して有する關係如何の問題は、各經濟的時期の核心ではあるが、同時にまた各階級社會の痛點である。生産手段を何等かの形において、勞働してゐる人間の手から絶縁させておくことは、すべての階級社會の共通基礎である。何故ならそれはあらゆる搾取および階級支配の根本條件だからである。そこでこつといふ痛い個所から注意を轉じて、すべての外面的な副次的なものに注意を集中することは、ブルジョア學者の意識的努力であると言ふよりも、むしろ智慧の樹から危険な果實を味ふことに對するブルジョア階級の本能的嫌惡なのであつて、これらの學者はこれを精神的に代表してゐるのである。そしてビュヒャーの如き近代の有名な大學教授が、生産手段に對する勞働力の關係が根本的に型式を異にしてゐるところの、原始共產主義、奴隸制度、徭役經濟といふような種々の大きな時期を、易々と彼れの圖式の小ポケットの中に押し込みながら、實業の歴史については細々と穿鑿を始めて、「家内仕事」だの「手仕事」だの「顧客仕事」だのと、下手な小間物店のやうに、術學的な勿體ぶつた態度で並べ立てゝゐるが如きは、即ち右の階級本能を「天才的眼光」を以て證據立てゝゐるものである。被搾取的民衆の觀念代表者、即ち初期の共產主義者、往時の社會主義主張者も、その訴へと戦ひとを、主として不

公平な分配や、乃至は——十九世紀における二三の社會主義者の如く——交換の近代的形態に向けてゐた間は、人間間の平等の説教を以て闇に迷ひ、宙に浮いてゐたのであつた。分配および交換は、その形態において生産の編成に左右されるものであり、生産の中にあつては、労働する人間と生産手段との關係が決定的なものであるといふことを、労働階級の最良の指導者等が會得するに至つて、初めて社會主義運動が確乎たる科學的土臺の上に置かれたのである。そして専らこゝろいふ見解からのみ、プロレタリアートの科學的態度が、經濟史の入口のところではブルジョアジのそれと分れるのであつて、これは先きに經濟學の戸口のところで兩者の學問的立場が分れたのと同じである。經濟史の核心——生産手段に對する労働力の關係の成態——の歴史的過程を胡魔化するがブルジョアジの階級利益であるとすれば、プロレタリアートの利益は、それと逆に、この關係を正面にもつてきて、社會の經濟的構造の尺度とすることを命ずるのである。しかも太古の共產主義社會と後代の階級社會とを區切るところの歴史のこの大里程標に注意するのが、労働者にとつて必要であるばかりでなく、階級社會そのものゝ種々の歴史の形態の間の區別に注意することが同様に必要である。原始共產主義社會の特殊の經濟的特徴を明瞭に考慮に入れ、それと劣らず古代奴隸經濟と中世僑役經濟との特殊性を明瞭に考慮に入れる人間のみが、何故に今日の資本主義階級社會が、初めて社會主義實現のための歴史的把手を提供するが、また未來の社會主義的世界經濟と、太古の原始的共產主義群團との根本的區別が奈邊に存するかを、完全に徹底的に理解することができるのである。

第三章 經濟史 (二)

最もよく研究されてゐるゲルマン人のマルク組合の内部的制度を調べて見よう。

ゲルマン人は周知の如く種族および氏族を以て定住してゐた。各氏族において、家父は農場用の土地、建物の場所とを宛てがはれ、そこに家と農場とを設けた。ついで地域の一部が耕作に使用され、各家族がそれぞれその割地を受けてゐた。尤もまだ——ケーザルの證言によれば——キリスト紀元の初め頃にはドイツ人の一種族(スエーヴェンまたはシュワーベン族)は耕地を各家族の間に分配せずに、共同で耕作してゐたのだが、しかもローマの史家タキツスの時代、即ち二世紀頃には毎年の割地替がすでに一般普通に行はれてゐたのである。地方によつては、たとへばナッサウ地方のフリックホーフエン村では十七世紀および十八世紀になつても、年々の割地替がなほ普通に行はれてゐた。また十九世紀に至つても、バイエルン采領の二三の地方やライン地方では地割が普通一般であつた。尤もその期間はずつと長く、三年毎、四年毎、九年毎、十二年毎、十八年毎といふ風ではあつた。故にこれらの耕地は十九世紀の半ばに至つて、初めてハッキリと私有財産となつたのである。スコットランドの若干の地方においても、割地替は最近の時代

まで行はれてゐた。すべて割地は本来は全く平等であつて、その大きさは一家族の平均的需要、並びに土地とその時の労働との収益力に應じたものであつた。割地は種々の地方における地所によつて異り、それぞれ十五モルゲン、三十モルゲン、四十モルゲン、乃至はそれ以上のモルゲン（一モルゲン——約四段、但し時代と地方とにより異なる）に上つた。ヨーロッパの大部分では割地替が段々稀れになつてきて遂に廢止されてしまつたために、割地はすでに五六世紀において單獨家族の世襲財産に移つてしまつた。だがそれは耕地に關してのみのものであつた。その他のすべての地域——林地、草地、水流、並びに使用されない場所は、依然として分割のまゝにマルクの共有となつてゐた。たとへば山林の収益はまづ共同に必要なものと公課とに宛て、あとに残つたものが分配されてゐたのである。

牧地は共同に利用されてゐた。この不分割マルク即ち共同地は、極く長い間維持されてゐたものであつて、今日もなほバイエルン、チロール、スチス等のアルプス地域や、フランスや（ヴァンデー地方）、ノルウェーおよびスウェーデンに存在してゐる。

耕地の分配に當つて完全な平等を期するために、まづ最初にマルクは地味や位置に従つて若干のフルール（圃）（エッシェともゲヴァンとも呼ばれた）に分たれ、それから今度は各フルールが正式のマルク組合員の數だけの細い條地に切られた。もしマルク組合員の誰れでも、他と平等な割地を分けられたかどうかについて疑念がある時は、いつでもマルク耕地全體の測量の仕直しを要求することができるのであつて、その人間にそれを拒んだものは罰せられたのである。

る。

しかるに定期的な割地替と籤分けとが全く廢れてしまつた時にも、すべてのマルク組合員の労働は——耕地においても——依然として徹頭徹尾共同で行はれ、團體總體の嚴格な規律の下に置かれてゐた。そこからして最初にまづ割地の各持主にとつて、一般に労働義務が生じたのである。實際上のマルク組合員たるためには、マルクの中に定住してゐるだけではまだ足りなかつた。この目的のためには各人はマルクの中に自分が住んでゐる外に、なほ自分の地所を自分で耕やさなければならなかつた。自分の割地を幾年の間も耕やさない者は、以後その割地を失ひ、組合はそれを他に與へて耕やさせることができたのである。ところが今度は労働そのものが組合の指揮の下に置かれるに至つた。ゲルマン人定住後の當座は、經濟生活の中心に立つてゐたものは牧畜であつて、それは共同の草牧地で、共同の村屬牧人の間で營まれてゐたのであつた。牧場としては休耕も收穫後の耕地も、二つながら使用されてゐた。そういふわけから、播種や收穫の時期、各圃に對する耕作年度と休耕年度との代替、播種の順位などが共同に規定されることになつたのであつて、各人は一般の制定に従はねばならなかつた。圃は各々落し戸のある柵で圍はれて、播種から收穫までの間閉ぢられ、圃の開閉の時期は村落全體に一定してゐた。圃はそれぞれ公吏として掟を司る一人の監督、即ち圃頭の下に置かれてゐた。そして全村民の謂はゆる田地廻りは儀式の形を取つて行はれ、その際には子供も伴はれて、後日の證據として能く境界を覚えておくように耳打ちが行はれた。